埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第32集

三ヶ尻古墳群
西別府館跡
上前原遺跡
元境内遺跡
野原宮脇遺跡

－市内遺跡発掘調査報告書Ⅵ－

2019

埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第32集

三ヶ尻古墳群
西別府館跡
上前原遺跡
元境内遺跡
野原宮脇遺跡

－市内遺跡発掘調査報告書Ⅵ－

2019

埼玉県熊谷市教育委員会

序

私たちの郷土熊谷は、丘陵、台地、沖積低地と地形が変化に富んでいる上、我が国及び関東を代表する２大河川である利根川・荒川が市内を流れ、大河がもたらす肥沃な大地と豊な自然が広がっております。このような自然環境のもと、市内には、先人たちによって多くの文化財が営々と引き継がれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たち子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代に伝え、さらに豊かな熊谷市形成の礎としていかなければならないと考えております。

さて、市内には地下に埋蔵されている多くの遺跡が所在します。そして、これらの遺跡内では各種開発が行われ、遺跡を保護・保存できない場合が多数あります。その場合には、発掘調査という記録保存を行い、後世に伝えるべく方策を採っています。

本書は、平成23年度に実施された西別府館跡及び上前原遺跡、平成26年度に実施された元境内遺跡及び野原宮脇遺跡、平成27年度に実施された三ヶ尻古墳群の発掘調査の成果をまとめたものです。

本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く活用されることとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護に御理解、御協力を賜りました関係者の皆様には厚くお礼申し上げます。

平成31年３月

熊谷市教育委員会
教育長　野原　晃

例　言

1　本書は、市内遺跡「三ヶ尻古墳群（第 63・64 号墳）、西別府館跡、上前原遺跡、元境内遺跡、野原宮脇遺跡」の発掘調査報告書である

三ヶ尻古墳群	埼玉県熊谷市三ヶ尻字林 3605 番、3606 番４・11 所在	（埼玉県遺跡番号 59-021）
第 63 号墳	埼玉県熊谷市三ヶ尻字林 3606 番 4 所在	（埼玉県遺跡番号 59-021-63）
第 64 号墳	埼玉県熊谷市三ヶ尻字林 3605 番所在	（埼玉県遺跡番号 59-021-64）
西別府館跡	埼玉県熊谷市西別府字天神 2225 番 28 所在	（埼玉県遺跡番号 59-039）
上前原遺跡	埼玉県熊谷市千代字代 63 番 12・13 所在	（埼玉県遺跡番号 65-022）
元境内遺跡	埼玉県熊谷市野原字持橋ノ道上 668 番 3 所在	（埼玉県遺跡番号 65-039）
野原宮脇遺跡	埼玉県熊谷市野原字宮脇 72 番 2 所在	（埼玉県遺跡番号 65-041）

2　本調査は、三ヶ尻古墳群・西別府館跡・上前原遺跡・元境内遺跡・野原宮脇遺跡のいずれも個人住宅建築工事に伴う事前の記録保存目的の発掘調査である。また、いずれも市内遺跡発掘調査等事業国庫補助金、県費補助金の交付を受け、熊谷市教育委員会が実施した。

3　本事業の組織は、各調査の「発掘調査の概要」のとおりである。

4　発掘調査期間は、三ヶ尻古墳群（第 63・64 号墳）が平成 27 年８月 17 日～ 10 月 16 日、西別府館跡が平成 23 年 10 月 18 日、上前原遺跡が平成 23 年７月 26 日、元境内遺跡が平成 26 年９月 27 日～ 10 月 20 日、野原宮脇遺跡が平成 26 年４月 10 日～４月 22 日である。

整理・報告書作成期間は、平成 30 年４月２日～平成 31 年３月 27 日である。

5　発掘調査の担当は、三ヶ尻古墳群（第 63･64 号墳）及び野原宮脇遺跡を熊谷市教育委員会吉野　健･腰塚　博隆が、西別府館跡を同教育委員会松田　哲が、上前原遺跡及び元境内遺跡を同教育委員会吉野がそれぞれ担当した。

また、整理・報告書作成事業は、各々の発掘調査を担当した者が担当した。

6　本書の執筆は、整理・報告書作成事業を担当した吉野、松田、腰塚が分担し、第Ⅰ章は腰塚が行った。また、全体の編集については、腰塚が担当し、吉野が監修した。

7　写真撮影は、発掘調査及び遺物を、各々の担当者が行った。

8　基準点測量は、三ヶ尻古墳群（第 63・64 号墳）・野原宮脇遺跡を株式会社東京航業研究所に、元境内遺跡を中央航業株式会社に委託した。

9　出土遺物は、熊谷市教育委員会で保管している。

10　発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。

（敬称略）

根岸　友憲、埼玉県教育局生涯学習文化財課（現、文化資源課）、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

凡　例

1　本文中、遺構の略記号は、次のとおりである。
　ＳＤ…溝跡　ＳＩ…竪穴建物跡　ＳＫ…土坑　ＳＳ…古墳　ＳＴ…埴輪棺墓　ＳＸ…竪穴遺構
　Ｐ…ピット
2　土層断面図及び平面図中の表記記号は、次のとおりである。
　Ｓ…川原石　Ｐ…土器
3　遺構挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。
　三ヶ尻古墳群、宮脇遺跡：平面図…1／30（三ヶ尻古墳群　1次調査溝跡のみ1／40）
　上前原、元境内遺跡：掘立柱建物跡・溝跡平面図…1／80　竪穴建物跡・土坑・竪穴遺構・ピット…1／60
　西別府館跡：平面図…1／60
4　遺構挿図中、遺物に添えてある番号は、該当する遺構の遺物挿図中の遺物番号と一致する。
5　遺構挿図中、断面に添えてある数値は標高を示している。また、原則として、同一図版の標高は統一し、Aポイントに表記した。
6　遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。
　縄文土器・土師器・須恵器・須恵系土師質土器・ロクロ土師器・灰釉陶器・陶磁器・石器…１／４
　瓦…１／４・１／５　埴輪…１／３　縄文土器（破片・底部）…１／３　土製品・鉄製品…１／２
7　遺物実測図の中で、中心線はすべて実線で示し、遺物観察表にできる限り残存率で示した。また、表現方法は、以下のとおりである。
　須恵器のうち還元焔焼成の断面：黒塗り、酸化焔焼成の断面：白抜き
　瓦縦断面：　瓦横断面：
　上記以外の土師器等土器・埴輪・土製品・鉄製品・石器断面：白抜き
　墨書：黒塗り
　底部調整　回転ヘラ削り　回転糸切り
　石器の磨面範囲　敲打範囲
8　遺物拓影は、原則として、左右あるものは向かって左に外面、右に内面、左のみのものは外面を示した。瓦については、左に凹面、右に凸面を示した。
9　遺物観察表の凡例は、次のとおりである。
　法量の単位は、㎝、ｇである。また、推定値は括弧付けで示した。
　胎土は、土器に含まれる鉱物等を以下の記号土錘で示した。
　Ａ…白色粒子　Ｂ…黒色粒子　Ｃ…赤色粒子　Ｄ…褐色粒子　Ｅ…赤褐色粒子　Ｆ…白色針状物質
　Ｇ…長石　Ｈ…石英　Ｉ…白雲母　Ｊ…黒雲母　Ｋ…角閃石　Ｌ…片岩　Ｍ…砂粒　Ｎ…礫
　焼成は、次のように区分した。
　Ａ…良好　Ｂ…普通　Ｃ…不良
10　写真図版の遺物縮尺は、すべて任意である。
11　土層及び遺物の色調は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行）に照らし最も近似した色相を示した。

目　　次

序　文
例　言
凡　例
目　次
Ⅰ　遺跡の立地と環境……1
Ⅱ　三ヶ尻古墳群（第63・64号墳）の調査 …9
　1　発掘調査の概要……9
　2　遺跡の概要……13
　3　遺構と遺物（第１次調査）……15
　4　遺構と遺物（第２次調査）……33
　5　調査のまとめ……45
Ⅲ　西別府館跡の調査……49
　1　発掘調査の概要……49
　2　遺跡の概要……51
　3　遺構と遺物……53
　4　調査のまとめ……56
Ⅳ　上前原遺跡の調査……59
　1　発掘調査の概要……59
　2　遺跡の概要……61
　3　遺構と遺物……63
　4　調査のまとめ……64
Ⅴ　元境内遺跡の調査……69
　1　発掘調査の概要……69
　2　遺跡の概要……70
　3　遺構と遺物……74
　4　調査のまとめ……81
Ⅵ　野原宮脇遺跡の調査……85
　1　発掘調査の概要……85
　2　遺跡の概要……88
　3　遺構と遺物……89
　4　調査のまとめ……93

挿　図　目　次

第１図　埼玉県の地形図……1
第２図　周辺遺跡分布図……2
第３図　三ヶ尻古墳群第63・64号墳調査地点位置図…11
第４図　三ヶ尻古墳群第63・64号墳推定位置図 ……12
第５図　三ヶ尻古墳群第１次調査区全測図……13
第６図　三ヶ尻古墳群第２次調査区全測図……14
第７図　三ヶ尻古墳群第１次調査第１号住居跡 ……16
第８図　三ヶ尻古墳群第１次調査第１号住居跡出土遺物（1）……17
第９図　三ヶ尻古墳群第１次調査第１号住居跡出土遺物（2）……18
第 10 図 三ヶ尻古墳群第１次調査第１号住居跡出土遺物（3）……19
第 11 図 三ヶ尻古墳群第１次調査第１号住居跡出土遺物（4）……20
第 12 図 三ヶ尻古墳群第１次調査第63号墳（1）……22
第 13 図 三ヶ尻古墳群第１次調査第63号墳（2）……23
第 14 図 三ヶ尻古墳群第１次調査第63号墳出土遺物……24
第 15 図 三ヶ尻古墳群第１次調査第64号墳……25
第 16 図 三ヶ尻古墳群第１次調査第１号埴輪棺墓……26
第 17 図 三ヶ尻古墳群第１次調査第１号埴輪棺墓出土遺物……27
第 18 図 三ヶ尻古墳群第１次調査第１・２号溝跡……29
第 19 図 三ヶ尻古墳群第１次調査第３号溝跡 ……30
第 20 図 三ヶ尻古墳群第１次調査溝跡出土遺物 ……31
第 21 図 三ヶ尻古墳群第１次調査土坑 ……32
第 22 図 三ヶ尻古墳群第１次調査第２号土坑出土遺物 ……33
第 23 図 三ヶ尻古墳群第２次調査第１号住居跡 ……34
第 24 図 三ヶ尻古墳群第２次調査第１号住居跡出土遺物 ……34
第 25 図 三ヶ尻古墳群第２次調査第64号墳 ……35
第 26 図 三ヶ尻古墳群第２次調査第64号墳出土遺物 ……36
第 27 図 三ヶ尻古墳群第２次調査第１号溝跡 ……37
第 28 図 三ヶ尻古墳群第２次調査第１号溝跡出土遺物 ……37
第 29 図 三ヶ尻古墳群第２次調査ピット出土遺物 ……38
第 30 図 三ヶ尻古墳群第２次調査ピット（第１～10号） ……39
第 31 図 三ヶ尻古墳群第２次調査ピット（第11～24号） ……40
第 32 図 三ヶ尻古墳群第１次調査遺構外出土遺物（1）……42
第 33 図 三ヶ尻古墳群第１次調査遺構外出土遺物（2）……43
第 34 図 三ヶ尻古墳群第２次調査遺構外出土遺物 ……44
第 35 図 西別府館跡調査地点位置図……52
第 36 図 西別府館跡調査区（第１号溝跡）全測図・土層断面図 …53

第 37 図　西別府館跡第１号溝跡出土遺物……54
第 38 図　上前原遺跡調査地点位置図（1）……60
第 39 図　上前原遺跡調査地点位置図（2）……61
第 40 図　上前原遺跡調査区・遺構全測図……62
第 41 図　上前原遺跡出土遺物……64
第 42 図　元境内遺跡調査地点位置図……71
第 43 図　元境内遺跡調査区全測図……72
第 44 図　元境内遺跡第１号竪穴建物跡……73
第 45 図　元境内遺跡第１号竪穴建物跡掘方 ……74
第 46 図　元境内遺跡第１号竪穴建物跡出土遺物（1）……75
第 47 図　元境内遺跡第１号竪穴建物跡出土遺物（2）……77
第 48 図　元境内遺跡第１・２号竪穴遺構……78
第 49 図　元境内遺跡第１・２号土坑、第１～３号ピット…80
第 50 図　元境内遺跡遺構外出土遺物……81
第 51 図　野原宮脇遺跡調査地点位置図……86
第 52 図　野原宮脇遺跡調査区全測図……87
第 53 図　野原宮脇遺跡第１号住居跡……89
第 54 図　野原宮脇遺跡第１・２号溝跡……90
第 55 図　野原宮脇遺跡溝跡出土遺物……91
第 56 図　野原宮脇遺跡ピット……92
第 57 図　野原宮脇遺跡ピット出土遺物……93
第 58 図　野原宮脇遺跡遺構外出土遺物……93

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表……３
第２表　三ヶ尻古墳群第１次調査第１号住居跡出土遺物観察表 …21
第３表　三ヶ尻古墳群第１次調査第63号墳出土遺物観察表 ……24
第４表　三ヶ尻古墳群第１次調査第１号埴輪棺墓出土遺物観察表…28
第５表　三ヶ尻古墳群第１次調査溝跡出土遺物観察表（1）…30
第６表　三ヶ尻古墳群第１次調査溝跡出土遺物観察表（2）…32
第７表　三ヶ尻古墳群第１次調査第２号土坑出土遺物観察表…33
第８表　三ヶ尻古墳群第２次調査第１号住居跡出土遺物観察表…34
第９表　三ヶ尻古墳群第２次調査第64号墳出土遺物観察表…36
第 10 表　三ヶ尻古墳群第２次調査第１号溝跡出土遺物観察表…37
第 11 表　三ヶ尻古墳群第２次調査ピット一覧表 ……38
第 12 表　三ヶ尻古墳群第２次調査ピット出土遺物観察表 ……38
第 13 表　三ヶ尻古墳群遺構外第１次調査遺構外出土遺物観察表 ……41
第 14 表　三ヶ尻古墳群第２次調査遺構外出土遺物観察表（1）……41
第 15 表　三ヶ尻古墳群第２次調査遺構外出土遺物観察表（2）……43
第 16 表　西別府館跡第１号溝跡出土遺物観察表…55
第 17 表　元境内遺跡第１号竪穴建物跡出土遺物観察表…76
第 18 表　野原宮脇遺跡溝跡出土遺物観察表……91
第 19 表　野原宮脇遺跡ピット一覧表……92
第 20 表　野原宮脇遺跡ピット出土遺物観察表…93
第 21 表　野原宮脇遺跡遺構外出土遺物観察表…93

図　版　目　次

図版１　三ヶ尻古墳群　第１次調査調査区全景（東から）
三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号住居跡
遺物検出状況
三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号住居跡　炉跡
三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号住居跡（中央部分）（東から）
図版２　三ヶ尻古墳群　第１次調査第 63 号墳　周溝（東から）
三ヶ尻古墳群　第１次調査第 64 号墳　周溝（北から）
三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号溝跡（南から）
図版３　三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号埴輪棺墓（上が南）
同埴輪棺（検出直後）
同埴輪棺（上部覆い取外し後）
同埴輪棺（取り上げ後全景）
同埴輪棺（測量風景）
図版４　三ヶ尻古墳群　第２次調査調査区全景（北東から）
三ヶ尻古墳群　第２次調査第１号住居跡　（南東から）
三ヶ尻古墳群　第２次調査Ｂ－５・６グリッド付近　ピット群　（南西から）
三ヶ尻古墳群　第２次調査第 64 号墳　周溝（東から）
図版５　三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号埴輪棺墓　第 17 図１・２・３
図版６　三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号住居跡　第８図１
三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号住居跡
第９図２・３

三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号住居跡
第 10 図８・９
図版７　三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号住居跡
第 10 図７
三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号住居跡
第 10 図 10
三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号住居跡
第 10 図 13
三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号住居跡
第 10 図　上：14・15　下：16・17
三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号住居跡
第 11 図 18
三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号住居跡
第 11 図 19
三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号住居跡
第 11 図 21
三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号住居跡
第 11 図 22
図版８　三ヶ尻古墳群　第１次調査第 63 号墳
第 14 図２
三ヶ尻古墳群　第１次調査第 63 号墳
第 14 図３～５
三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号溝跡
第 20 図１－１・２
三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号溝跡
第 20 図１－５～７・11
三ヶ尻古墳群　第１次調査第２号溝跡
第 20 図　上：２－１～３、下：２－４・５
三ヶ尻古墳群　第１次調査第２号土坑
第 22 図２・３
三ヶ尻古墳群　第１次調査遺構外　第 33 図 17
図版９　三ヶ尻古墳群　第１次調査遺構外　第 32 図４・５
三ヶ尻古墳群　第１次調査遺構外　第 32 図６
三ヶ尻古墳群　第２次調査第１号住居跡
第 24 図　上：１～３、下：４～７
三ヶ尻古墳群　第２次調査第１号住居跡
第 28 図　上：１・２、下：３・４
三ヶ尻古墳群　第２次調査第 64 号墳
第 26 図　上：１～３、下：４～８
三ヶ尻古墳群　第２次調査遺構外
第 34 図１・２
三ヶ尻古墳群　第２次調査遺外　第 34 図 12・13
三ヶ尻古墳群　第１次調査作業風景
図版10　西別府館跡　調査区全景（北から）
西別府館跡　調査区全景（西から）
図版11　西別府館跡第１号溝跡　第 37 図１～４（外面）
西別府館跡第１号溝跡　第 37 図１～４（内面）
西別府館跡第１号溝跡　第 37 図７
西別府館跡第１号溝跡　第 37 図８
図版12　西別府館跡第１号溝跡　第 37 図９
西別府館跡第１号溝跡　第 37 図 10
西別府館跡第１号溝跡　第 37 図 11
西別府館跡第１号溝跡　第 37 図 12～14（凹面）
西別府館跡第１号溝跡　第 37 図 12～14（凸面）
図版13　上前原遺跡　調査区全景（上が北東）
上前原遺跡　第１号竪穴遺構（南西から）
図版14　上前原遺跡　第１号竪穴遺構土層断面
上前原遺跡　調査区遺構外、試掘トレンチ２
第 41 図１・２・３
図版15　元境内遺跡　調査区全景（南から）
元境内遺跡　第１号竪穴建物跡（西から）
図版16　元境内遺跡　第１号竪穴建物跡掘方（北から）
元境内遺跡　第１号竪穴建物跡　須恵器脚付
小埦出土状況
図版17　元境内遺跡 第１号竪穴遺構（北から）
元境内遺跡 第２号竪穴遺構（北東から）
元境内遺跡 第１号土坑（西から）
図版18　元境内遺跡　第１号竪穴建物跡　第 46 図２・
５・14・15・22・30、第 47 図 43・44
図版19　元境内遺跡　第１号竪穴建物跡　第 46 図１・３・
４・６～ 10・12・13・16・17、11・18（墨書）
図版20　元境内遺跡　第１号竪穴建物跡　第 46 図 19
～ 21・ 23 ～ 29・31 ～ 36・38 ～ 42
図版21　元境内遺跡　第１号竪穴建物跡　第 46 図 37・
第 47 図 45 ～ 47
元境内遺跡　遺構外　第 50 図１
図版22　野原宮脇遺跡　調査区全景（北東から）
野原宮脇遺跡　第２号溝跡（北から）
野原宮脇遺跡　第１号住居跡（北から）
野原宮脇遺跡　ピット群（北から）
図版23　野原宮脇遺跡　第１・２号溝跡　第 55 図１－
１・２、２－３～６
野原宮脇遺跡　第２号溝跡　第 55 図２－１・２
野原宮脇遺跡　第２号溝跡　第 55 図２－７・８
野原宮脇遺跡　第７号ピット　第 57 図１
野原宮脇遺跡　作業風景

Ⅰ　遺跡の立地と環境

熊谷市は、平成の大合併による二度の合併（平成 17 年に妻沼町及び大里町、平成 19 年に江南町）を経て県北初の 20 万都市となり、平成 21 年４月から「特例市」として現在に至っている。

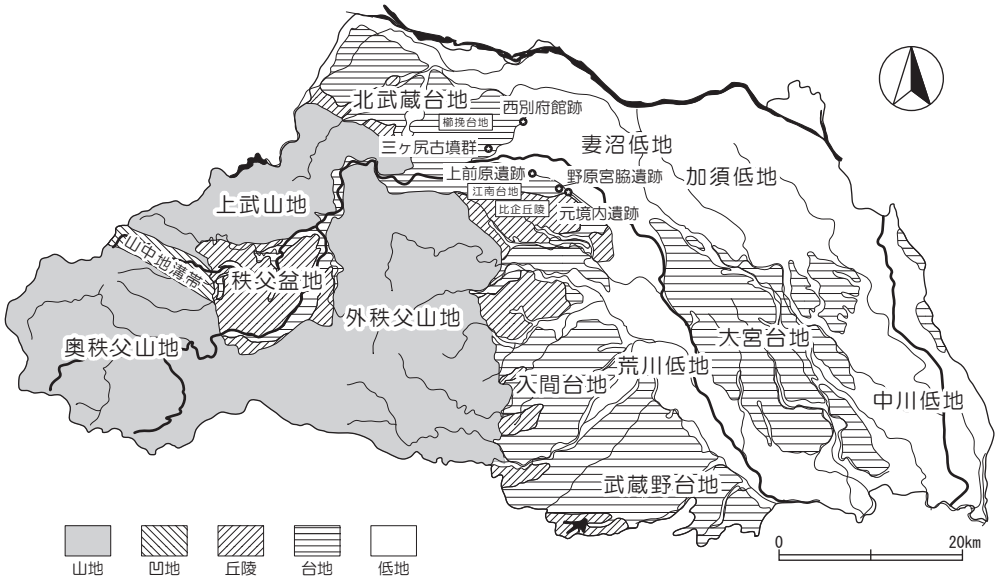
熊谷市は、北側の群馬県との境を利根川が、南側は旧大里町及び旧江南町との境を荒川がそれぞれ西から南東方向に流れており、関東地方の２大河川が最も近接する地域にある。地形的には市の西側に櫛挽台地、荒川を挟んで南側には江南台地、北側及び東側には妻沼低地が広がっているが、市の大半は妻沼低地上にある（第１図）。

櫛挽台地は、洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東は JR 高崎線籠原駅から北へ約２㎞の西別府付近にまで延びている。標高は約 36 ～ 54 ｍを測り、妻沼低地に向って緩やかに下る。荒川に面した櫛挽台地南東端には、独立丘陵地である観音山（標高 81 ｍ、第３紀層の残丘）があり、台地からの比高差は約 25 ｍ、沖積地からの比高差は約 35 ｍを測る。櫛挽台地の東側には、沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新荒川扇状地が広がる。新期荒川扇状地は、熊谷市の南西に位置する深谷市菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や微高地、後背湿地が発達している。

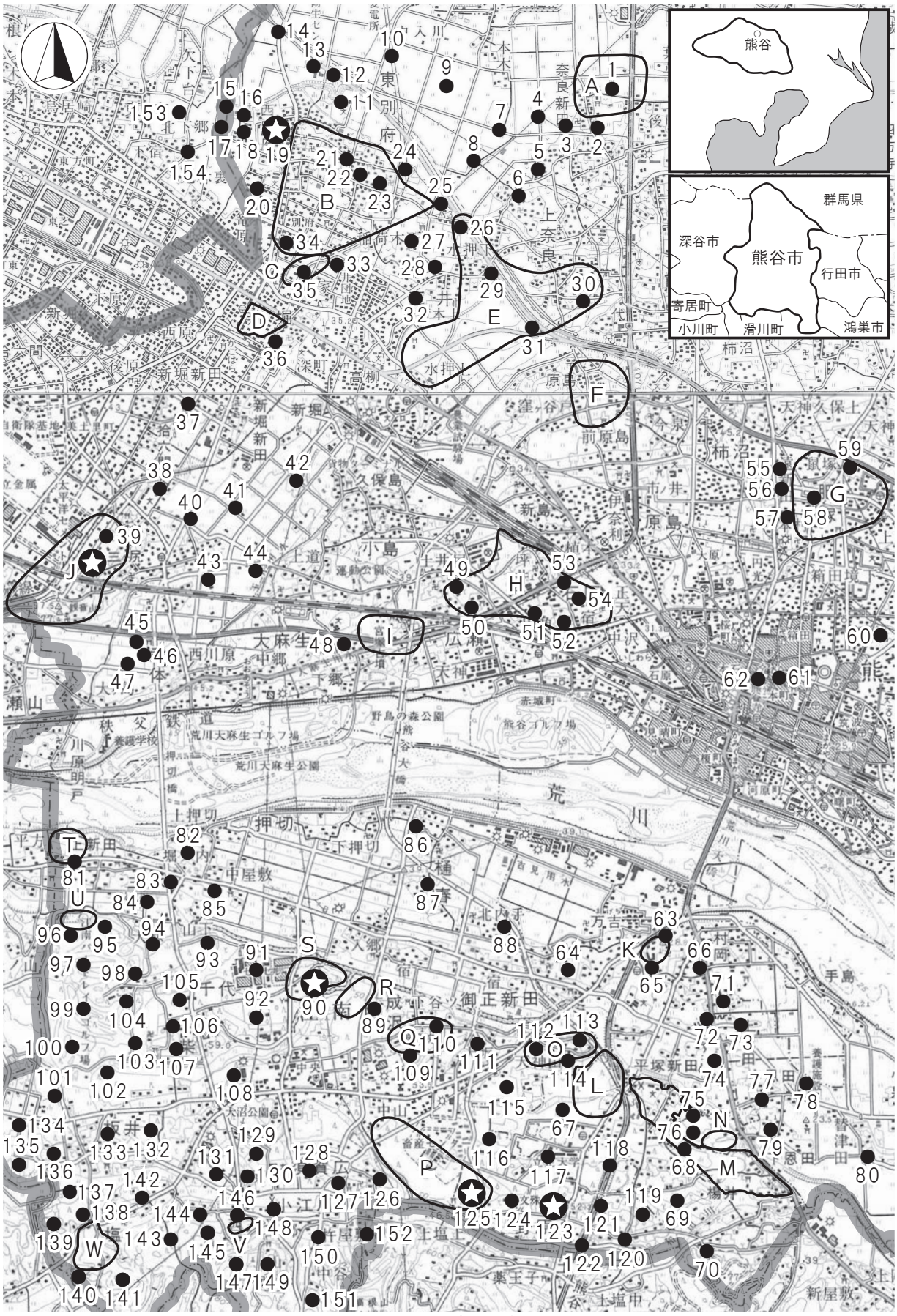
今回報告する遺跡は、三ヶ尻古墳群、西別府館跡、上前原遺跡、元境内遺跡、野原宮脇遺跡の５遺跡である。三ヶ尻古墳群は、熊谷市西寄りの三ヶ尻地区の標高 50 ｍを測る櫛挽台地南東端に立地し、荒川は南へ約１㎞の距離にある。西別府館跡は、西別府地区の櫛挽台地北東端縁辺部の標高 28 ～ 33 ｍを測る台地上に立地する。上前原遺跡は千代地区の荒川を北に臨む江南台地北端縁辺部の標高 45 ～ 54 ｍ前後を測る半島状に突き出た台地上に立地する。元境内遺跡及び野原宮脇遺跡は、野原地区の江南台地の南縁、比企丘陵とは和田川の開析する帯状の沖積地を挟んで立地し、標高は 40 ～ 56 ｍを測る。

続いて、周辺の歴史的環境について概観する（第２図、第１表）。

旧石器時代から縄文時代までの遺跡は、熊谷市西部及び荒川右岸に多くみられ、地形的には櫛挽台地



第１図　埼玉県の地形図



第２図　周辺遺跡分布図

第１表　周辺遺跡一覧表

No.	遺　跡　名	時　　代	No.	遺　跡　名	時　　代
熊　谷　市			63	村岡館跡	平安末
1	横塚遺跡	古墳前、平安	64	万吉西浦遺跡	縄文中、古墳後、平安、近世
2	東通遺跡	古墳後	65	村岡北西原遺跡	平安
3	西通遺跡	古墳後	66	北西原遺跡	奈良・平安
4	中耕地遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良・平安	67	下原遺跡	縄文、古墳後、奈良・平安、中・近世
5	土用ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安	68	瀬戸山遺跡	縄文早・中、古墳前・後、奈良・平安、近世
6	奈良氏館跡	平安末～中世	69	楊井前原遺跡	古墳後
7	一本木前遺跡	古墳前・後、奈良・平安、中世、近世	70	安通寺遺跡	古墳後
8	天神下遺跡	古墳前・後、奈良・平安	71	塚本遺跡	古墳後、奈良・平安
9	別府条里遺跡	奈良・平安	72	西浦遺跡	奈良・平安、中世
10	深町遺跡	縄文中・後、古墳前・後、奈良・平安	73	腰廻遺跡	奈良・平安
11	石田遺跡	縄文中・後、弥生中、古墳前	74	三分一遺跡	奈良・平安
12	関下遺跡	縄文中、弥生中、古墳後	75	原北遺跡	奈良・平安
13	横間栗遺跡	縄文後、弥生前・中、古墳前、奈良・平安、近世	76	原南遺跡	縄文中、古墳、奈良・平安
14	根絡遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良・平安	77	西内手遺跡	縄文前、弥生後、奈良・平安
15	西別府祭祀遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世	78	高田遺跡	奈良・平安
16	西方遺跡	奈良・平安、中・近世	79	下恩田中町遺跡	奈良・平安
17	西別府遺跡	古墳後、奈良・平安	80	西浦町遺跡	奈良・平安
18	西別府廃寺	古墳後、奈良・平安、中・近世	81	新田裏遺跡	古墳後、奈良・平安
19	**西別府館跡**	平安末～中世	82	堀ノ内遺跡	中・近世
20	大竹遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世	83	新屋敷遺跡	古墳後、中・近世
21	埋鳥遺跡	縄文中、奈良・平安	84	大林遺跡	古墳後、奈良・平安
22	別府城跡	平安、中世	85	中屋敷遺跡	古墳、奈良・平安、中・近世
23	別府氏館跡	平安末～中世	86	平山館	中・近世
24	寺東遺跡	縄文中・後	87	宮前遺跡	古墳後、奈良・平安、近世
25	稲荷東遺跡	古墳後、奈良・平安	88	宿遺跡	奈良・平安、中・近世
26	新ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安	89	代遺跡	縄文中、中世
27	玉井陣屋跡	平安末～中世	**90**	**上前原遺跡**	旧石器、縄文早・中・後、古墳、奈良・平安
28	水押下遺跡	古墳後	91	東原遺跡	縄文中
29	下河原中遺跡	奈良・平安	92	萩山遺跡	旧石器、縄文早・後、奈良・平安、中世
30	本代遺跡	古墳後、近世	93	宮下遺跡	縄文中・後、古墳後、奈良・平安
31	下河原上遺跡	近世	94	権現坂遺跡	縄文中、奈良・平安、近世
32	稲荷木上遺跡	古墳後		権現坂埴輪窯跡	古墳後
33	五反畑遺跡	中世	95	富士山遺跡	縄文早～後、弥生後、古墳前
34	別府三丁目遺跡	奈良・平安	96	姥ヶ沢遺跡	縄文早～後、弥生後、古墳前、奈良・平安
35	在家遺跡	古墳後、奈良・平安		姥ヶ沢埴輪窯跡	古墳後
36	籠原裏遺跡	旧石器、縄文前・中、古墳後、平安、中・近世	97	千代西原遺跡	旧石器、縄文早～後、奈良・平安、中世
37	拾六間後遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世	98	北方遺跡	縄文早～後、古墳中・後
38	樋の上遺跡	縄文前～後、古墳後、奈良・平安、中・近世	99	山神遺跡	旧石器、縄文中、中世
39	三ヶ尻遺跡	縄文前・中、弥生中、古墳後、奈良・平安、中世	100	寺内（廃寺）遺跡	旧石器、縄文早・中・後、奈良・平安
40	若松遺跡	中・近世	101	天神遺跡	旧石器、縄文、奈良・平安、中世
41	黒沢館跡	中世	102	板井中島遺跡	縄文早・後、奈良・平安、中世
42	東遺跡	平安、中世	103	西遺跡	縄文早・中、奈良・平安
43	松原遺跡	中・近世	104	天神谷遺跡	縄文中、古墳前、奈良・平安
44	庚申塚遺跡	近世	105	南方遺跡	縄文早・中、中・近世
45	社裏北遺跡	中世	106	山神東遺跡	縄文中、奈良・平安
46	社裏遺跡	中世	107	久保遺跡	中・近世
47	社裏南遺跡	中世	108	原谷遺跡	縄文草創、古墳前
48	下郷遺跡	奈良・平安	109	合羽山遺跡	縄文、奈良・平安、中世
49	高根遺跡	縄文、古墳後、平安、中・近世	110	静簡院遺跡	縄文、古墳、奈良・平安、中・近世
50	不二ノ腰遺跡	奈良・平安	111	成沢上原遺跡	縄文、古墳、奈良・平安
51	田角遺跡	平安	112	中原遺跡	古墳、奈良・平安
52	御蔵場跡	近世	113	天神山遺跡	縄文早・後、古墳
53	天神前遺跡	古墳後、中世	114	松原遺跡	縄文
54	兵部裏屋敷跡	中世	115	向原遺跡	旧石器、縄文早・中、古墳
55	肥塚中島遺跡	奈良・平安、近世	116	八軒遺跡	縄文、奈良・平安、中世
56	出口上遺跡	奈良・平安、中・近世	117	鹿嶋遺跡	旧石器、縄文早、弥生、奈良・平安、中・近世
57	肥塚館跡	中世	118	下新田遺跡	縄文中、古墳、奈良・平安
58	出口下遺跡	古墳後	119	丸山浦遺跡	縄文早、古墳、奈良・平安、中世
59	八幡上遺跡	古墳後	120	丸山遺跡	縄文早・中、古墳、奈良・平安
60	箱田氏館跡	平安末～中世	121	荒神脇遺跡	縄文早～後、古墳、奈良・平安
61	宮町遺跡	奈良・平安、中世	122	熊野遺跡	縄文早、古墳、奈良・平安、中世
62	熊谷氏館跡	中世	**123**	**元境内遺跡**	縄文、古墳中・後、奈良・平安、中・近世

No.	遺　跡　名	時　　代	No.	遺　跡　名	時　　代
124	諏訪脇遺跡	縄文、古墳、奈良・平安、中・近世	152	石橋山遺跡	縄文中、古墳前
125	**野原宮脇遺跡**	縄文早、古墳後、奈良・平安、中・近世	深　谷　市		
126	本田・東台遺跡	旧石器、縄文早、古墳中・後、奈良・平安、近世	153	幡羅官衙遺跡	古墳後、奈良・平安
127	須賀広宮脇遺跡	縄文早・中、古墳後、奈良・平安	154	下郷遺跡	古墳後、奈良・平安、中世
128	田村陣屋跡	近世	古　墳　群		
129	小江川下原遺跡	縄文、古墳後、奈良・平安	A	奈良古墳群	古墳中～後
130	小江川上原遺跡	古墳	B	別府古墳群	古墳後
131	田中遺跡	古墳、奈良・平安	C	在家古墳群	古墳後
132	山ノ神遺跡	縄文、奈良・平安	D	籠原裏古墳群	古墳末
133	氷川遺跡	古墳、奈良・平安、中・近世	E	玉井古墳群	古墳後
134	桜山遺跡	旧石器、縄文中、古墳後、奈良・平安、中世	F	原島古墳群	古墳後
135	立野遺跡	縄文早・中、古墳後、奈良・平安	G	肥塚古墳群	古墳後
136	岩比田遺跡	縄文早・中、古墳後、奈良・平安	H	石原古墳群	古墳後
137	向比遺跡	縄文中、古墳、奈良・平安	I	広瀬古墳群	古墳後～末
138	荒井遺跡	古墳	**J**	**三ヶ尻古墳群**	古墳後
139	塩西原遺跡	古墳	K	村岡古墳群	古墳後
140	塩新田遺跡	縄文早～中、古墳後	L	万吉下原古墳群	古墳前・後
141	諸ヶ谷遺跡	縄文中、古墳前・後	M	瀬戸山古墳群	古墳後～末
142	塩西遺跡	旧石器、縄文中、古墳前・後、奈良・平安、中・近世	N	原古墳群	古墳後
143	塩丸山遺跡	旧石器、縄文中・後、古墳前、奈良・平安、中・近世	O	天神山古墳群	古墳後
144	船川遺跡	縄文早・中、古墳前	P	野原古墳群	古墳後
145	新山遺跡	縄文早・中、古墳前、近世	Q	静簡院古墳群	古墳後
146	内神遺跡	縄文中、古墳前	R	行人塚古墳群（遺跡）	古墳前・後
147	富士塚遺跡	近世	S	上前原古墳群	古墳後
148	諏訪木遺跡	古墳前、奈良・平安	T	新田裏古墳群	古墳後～末
149	釜場遺跡	古墳前、中・近世	U	姥ヶ沢古墳群	古墳後
150	漆畑遺跡	古墳後、奈良・平安、中世	V	西古墳群	古墳後
151	前谷遺跡	近世	W	塩古墳群	古墳前・後

及び台地直下の妻沼低地上に集中する。旧石器時代については、櫛挽台地東端に立地する籠原裏遺跡(36)から出土した黒耀石の尖頭器のほか、萩山遺跡（92)、向原遺跡（115)、本田東台遺跡（126）・塩西遺跡（142)、鹿嶋遺跡（117）からナイフ形石器、寺内遺跡(100)、上前原遺跡(90)天神遺跡(101)、山神遺跡(99)、千代西原遺跡で槍先形の尖頭器が検出されている。また、上前原遺跡からは非北方系の細石刃核が出土し、深谷市（旧川本町）に北方系細石刃を出土した白草遺跡（地図未掲載）がある。

縄文時代については、草創期は萩山遺跡で有舌尖頭器や爪型文土器が出土している。早期の遺跡は、江南台地東部に多く見られる。県内有数の集落跡の萩山遺跡(92)において、スタンプ型石器が200点以上検出され、船川遺跡（144）では、竹之内式と呼称される貝殻沈線文土器が出土し、山形押型文土器・無文土器との共伴関係が確認されている。他には、鹿嶋遺跡(117)、野原宮脇遺跡（125)、南方遺跡(105)で撚糸文期後半の住居跡が検出されている。続いて前期は、次第に遺跡数が増え始め、江南台地以外の三ヶ尻遺跡（39）で集落跡が確認される。江南台地では人々の生活痕跡は西部に移り、富士山遺跡(95)で諸磯期の住居跡を３軒検出するのみである。中期になると遺跡数が大幅に増え、特に中期後半の加曾利Ｅ式期の遺跡が多い。前期と異なり、台地以外に低地上にも集落跡が確認されるようになるが、特に櫛挽台地北東端及び台地下の低地上に集中する。一方で、引き続き江南台地上の権現坂遺跡(94)、富士山遺跡(95)、寺内遺跡(100)、上前原遺跡(90)などで加曾利Ｅ式期の住居跡が見られる。後期になると遺跡数は減少し、妻沼低地へと移る傾向が見られる。西城切通遺跡（地図未掲載)、場違ヶ谷戸遺跡（地図未掲載）など櫛挽台地から離れた低地上でも遺跡が認められるようになる。屋外埋甕が、宮下遺跡（93)、萩山遺跡(92)で確認されているが、いずれも遺跡は小規模である。

晩期は、遺跡数がさらに減少する。地図中には示せなかったが、市東部では低地上に立地する諏訪木遺跡や中西遺跡で集落跡が確認されている。台地上、特に江南台地では活動の痕跡をほとんど認めること

ができない。

弥生時代は、東日本初期弥生土器を語る上で非常に重要な資料が出土している。前期末～中期前半の遺跡は、櫛挽台地北東端及び台地下の低地上に集中するが、確認されたのは集落跡ではなく、再葬墓である。横間栗遺跡（13）では、前期末から中期前半までの再葬墓が 13 基確認されており、再葬墓一括資料は 1999 年３月に埼玉県指定になっている。深谷市上敷免遺跡（地図未掲載）などでも再葬墓が検出されており、上敷免遺跡では、包含層からであるが、県内初の遠賀川式土器の壺胴部片も出土している。中期中葉以降は、これまでの状況と一変して市東部の低地上に集落が出現する。東日本でも最古段階の環壕集落である池上遺跡（地図未掲載）や、その墓域とされ最古段階の方形周溝墓が検出された行田市小敷田遺跡（地図未掲載）などをはじめ、集落が本格的に展開されるようになる。この他にも、北島遺跡や前中西遺跡（いずれも地図未掲載）などで大規模集落が展開されるようになるが、市北部及び西部では確認例が少なく、深谷市明戸東遺跡（地図未掲載）など後期の遺跡がいくつか点在するのみである。江南台地上では、姥ヶ沢遺跡（96）及び富士山遺跡（95）が後期の集落として確認されている。

古墳時代になると低地上への進出がより活発化し、前期の遺跡は近年確認例が増加している。一本木前遺跡（7）では、約 100 軒もの膨大な数の住居跡の他に４基の方形周溝墓が確認されており、第２号方形周溝墓の主体部からはヒスイ製の勾玉や緑色凝灰岩製の管玉、人歯などが検出されている。なお、住居跡群と方形周溝墓群には若干の時期差があり、前者が古く、後者が新しいことが判明している。江南台地上の行人塚遺跡（R）からは、小鍛冶関連遺物が出土し、県内でも早い段階での製鉄技術の導入が確認される重要な事例となっている。中期は確認例が少なく､市東部では集落跡が確認されているが、市北部及び西部では市指定史跡である横塚山古墳（A：奈良古墳群）があるのみである。これは、B種横刷毛の埴輪を持つ帆立貝式前方後円墳であるが、後円部は一部削平されている。後期になると、遺跡数が爆発的に増加する。集落跡は大規模になり、低地上にも多数出現する。そして、これらの集落跡は奈良・平安時代へと継続するものが多い。古墳は群をなして形成され、多数の古墳群が台地や低地上に築造されている。古墳群は、概ね６世紀から７世紀末ないしは８世紀初頭にかけて築造されたが、埴輪を持たない古墳群に、在家古墳群（C）、籠原裏古墳群（D）などがある。また、姥ヶ沢埴輪窯跡群（96）及び権現坂埴輪窯跡群（94）は生産遺跡であり、台地崖線部の斜面や台地上の平坦地を利用した遺跡として確認されている。また、権現坂埴輪窯跡群では、小さな谷を挟んで東側と西側の斜面に埴輪窯が並んで造られ、平坦地には、工房跡と考えられる竪穴や、粘土の採掘坑も発見されている。これら２箇所の埴輪窯は、６世紀前半に操業が始まり、６世紀代後半まで続き、周辺の古墳へ埴輪を供給していた。特に権現坂埴輪窯跡群では、高さ 70 ㎝を超す大型の円筒埴輪が作られており、埼玉古墳群への供給も行われていた可能性が考えられている。市内の古墳群で特筆すべきは、籠原裏古墳群（Ｄ）で墳形が八角形を呈する古墳が検出されたことなどが挙げられ、後述する幡羅官衙遺跡群などと時期的・地理的に近い関係にあり、注目に値する古墳群と言える。

律令体制の始まる奈良・平安時代において熊谷市北部から西部にかけてと深谷市東部を含む一帯は、武蔵国幡羅郡に属したと考えられる。上秦、下秦、広沢、荏原、幡羅、那珂、霜見、余部の八郷からなる中郡である。深谷市幡羅官衙遺跡（153）は、東西 500 m、南北 400 mの範囲をもつ幡羅郡家跡であり、これまでに郡庁を除く正倉、館、厨家、曹司、道路等の施設が検出され、７世紀後半に小規模な倉

庫などの掘立柱建物が建てられ、７世紀末には主要な施設が整えられていったようである。そして、８世紀末には正倉の掘立柱建物から礎石建物への建て替えや敷地の拡張などが行われ、９世紀前半～中葉には二重溝と土塁による区画施設が造られ郡家の様相も大きく変化する。この施設は、10 世紀前半または中頃の正倉院の廃絶後の 11 世紀前半まで存続していたとされ、これが郡家の終焉と考えられている。また、この幡羅官衙遺跡周辺には、西別府遺跡（17）、西別府廃寺（18）、西別府祭祀遺跡（15）が所在し、郡家との関連で注目されおり、2018 年２月にはこの内の、幡羅官衙遺跡と西別府祭祀遺跡が国史跡「幡羅官衙遺跡群」として指定されている。西別府遺跡は、幡羅官衙遺跡と一体の遺跡と捉えることができ、幡羅官衙遺跡と同様な９世紀後半から 11 世紀前半まで存在していたと考えられる二重溝と土塁による区画施設が確認され、幡羅郡家の機能の一部を担っていたと考えられている。西別府廃寺は、郡司が創建に関わったとされる県内でも古い８世紀初頭創建の寺院であり、基壇建物跡、寺域を区画する溝跡、瓦溜り状遺構などが検出され、多数出土している軒丸瓦や軒平瓦などから９世紀後半まで存続していたと考えられている。西別府祭祀遺跡は、７世紀後半から 11 世紀前半まで湧泉で行われた水辺の祭祀跡であり、石製模造品をはじめ、墨書土器等の土器が多数検出されており、祭祀具や場所を時代とともに変えて祭祀が継続的に行われていたと考えられる。また、荒川右岸の江南台地上では、８世紀前半から 10 世紀半ばの時期の古代寺院である寺内廃寺（100）が確認され、寺院の周囲を外界と区切る大溝、伽藍内には基壇をもつ建物跡が４棟検出され、伽藍の東側には 50 軒以上の集落、南側には参道と推定される道路跡も確認されている。この寺内廃寺に隣接する深谷市百済木遺跡（地図未掲載）では、8 世紀初頭に位置づけられる豪族居宅跡と考えられる遺構が検出されている。よって、両遺跡とも古代男衾郡の成立を推定する上で重要な位置付けがなされている。

平安時代末から中世にかけては、武蔵七党やその他在地武士団が台頭してくる時期であり、市内でも館跡が多数みられる。市北部では実盛館、西城城跡、東城城跡（いずれも地図未掲載）、市西部では西別府館跡（19）、別府氏館跡（23）、奈良氏館跡（6）、市中央付近では兵部裏屋敷跡（54）などがあるが、その実態は不明なものが多い。市西部の東別府地区にある別府城跡（22）では、現在も土塁と空堀が一部残っている。三ヶ尻地区では、中世の遺構・遺物が比較的多く検出されている。中でも黒沢館跡（41）は発掘調査の結果、出隅を持ち全周する堀と土塁、虎口などが検出され、渡辺崋山が記した文献『訪瓩録』所収の「黒沢屋敷」の記述と発掘調査成果が一致するという大変貴重な例である。江南台地周辺では中世においても荒神脇遺跡（121）、熊野遺跡（122）、下新田遺跡（118）、丸山遺跡（119）において 50 軒に及ぶ住居跡が検出され、今回報告の元境内遺跡及び野原宮脇遺跡（125）周辺まで広く集落の分布が想定される。特に、丸山遺跡では、郷長の居宅と推定される建物群が確認されている。また、野原古墳群（Ｐ）の古墳が経塚に転用されたと考えられ金銅宝冠阿弥陀如来坐像が出土している。さらに、付近にあったとされる能満寺の伝承から中世後期成立の文殊寺の創建にかかる由来を垣間見ることができる。この周辺には、武蔵国国府から官道への南北ルートとして知られる東山道武蔵路が通っていたと想定されており、古代以降も古街道として、鎌倉道の一つと伝わるなど、地域の主要道としても長く使用されていたことが推定される。中世段階においては、館跡などを中心にその一端が明らかになりつつあるものの、依然として資料が不足している状態である。このことは、近世段階においても同様で、市内ではいくつかの確認例があるが、不明な点が多いというのが実状である。

三ヶ尻古墳群



Ⅱ　三ヶ尻古墳群の調査

1　発掘調査の概要

⑴　調査に至る経過

平成 27 年６月 30 日付けで、埼玉県教育委員会あてに、隣接する２軒分の個人住宅建築に伴う、文化財保護法第 93 条第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出があった。

これを受けて熊谷市教育委員会は、同年７月８日に２箇所においてトレンチによる試掘調査を実施した。その結果、現地表面下 40 ㎝の深度から古墳時代の遺構と共に、縄文時代及び古墳時代の土器などの埋蔵文化財の所在が確認された。

その後、埋蔵文化財の所在が確認された旨を建築主あてに回答するとともに、その保存に関する協議を重ねたが、工事は保護層が設けられない工法で行うものであり、計画の変更はしない方針となったため、記録保存のための発掘調査の措置を講ずることとなった。

発掘調査は、平成 27 年８月３日付け熊教社埋第 217 号、第 218 号で、文化財保護法第 99 条第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を提出し、第１次調査を平成 27 年８月 17 日から開始した。

なお、埼玉県教育委員会から熊谷市教育委員会あてに、平成 27 年８月 24 日付け教生文第 5-606 号、第 5-607 で発掘調査実施の指示通知があった。

⑵　発掘調査、整理・報告書作成の経過

発掘調査は、第１次調査が平成 27 年８月 17 日から９月 18 日にかけて実施した。調査面積は、68.73 ㎡であった。

まず、遺構確認面まで重機による表土剥ぎを行った。表土を剥ぎ終わったのち、遺構確認作業を行った。その際、溝跡、土坑などが確認され、順次遺構の調査に着手した。

そして、平成 27 年９月 18 日、調査のすべてを終了した。

続けて第２次調査は、平成 27 年９月 18 日から平成 27 年 10 月９日にかけて実施した。調査面積は、65.00 ㎡であった。調査は第１次と同様の手順で実施し、平成 27 年 10 月９日、調査のすべてを終了した。整理作業は、第１次、第２次調査ともに平成 30 年４月から始めた。まず、遺物の洗浄・注記・復元を行い、その後 11 月までに順次、遺物の実測、拓本採りを行った。12 月からは遺構の図面整理作業を行い、遺構・遺物図面のトレース、遺構・遺物の図版組を行い、翌年２月下旬には、原稿執筆、割付等の作業をして、報告書の印刷に入り、校正を行った後、３月下旬に本報告書を刊行した。

（３） 発掘調査、整理・報告書作成の組織

主体者　熊谷市教育委員会

ア　発掘調査

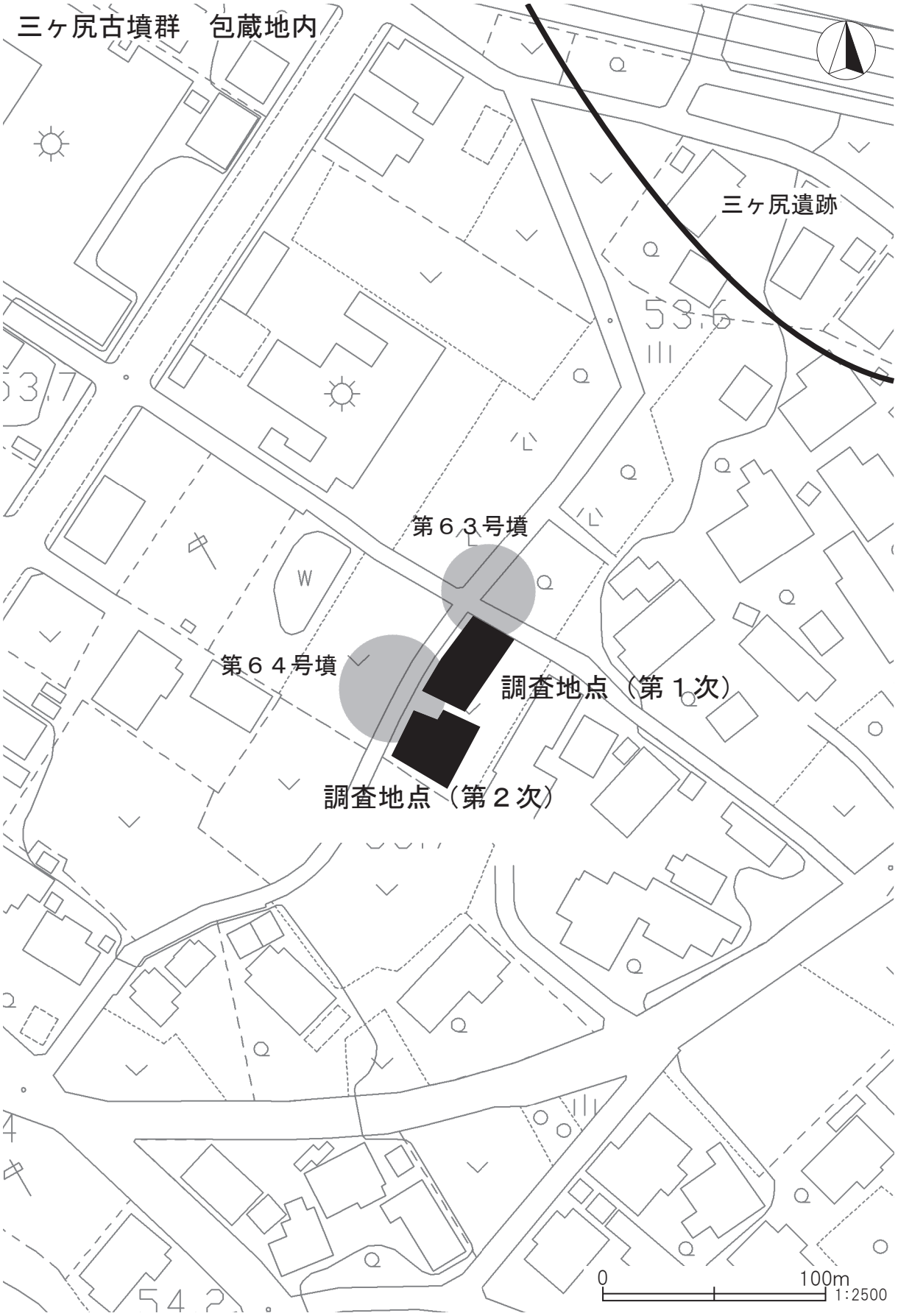
平成 27 年度

教育長	野原　　晃
教育次長	米澤　ひろみ
社会教育課長	山﨑　　実
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	森田　安彦
社会教育課副課長兼文化財保護係長	吉野　　健
主査	松田　　哲
主査	小島　洋一
主任	蔵持　俊輔
主任	山下　祐樹
主任	腰塚　博隆
主任	金子　正之

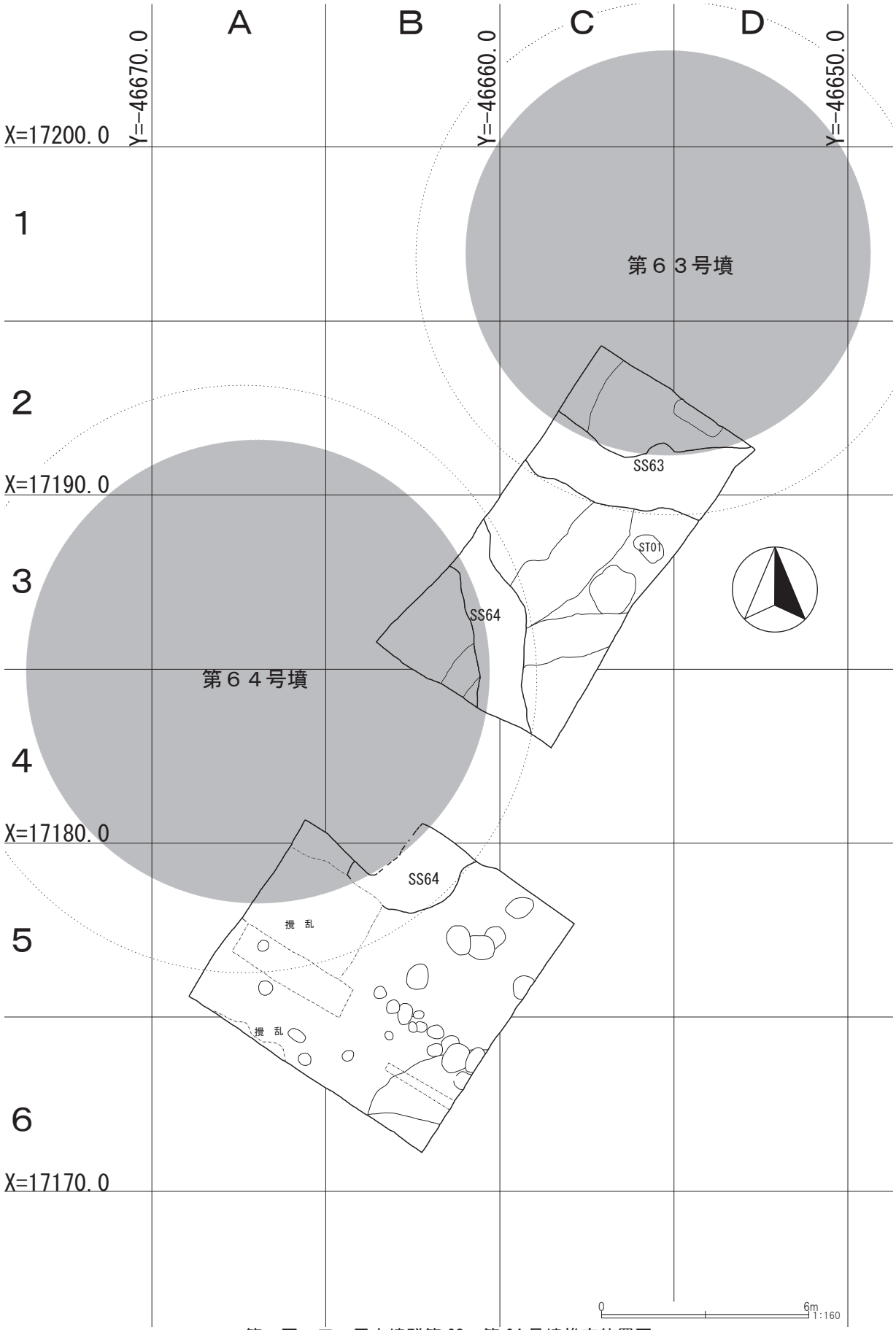
イ　整理・報告書作成

平成 30 年度

教育長	野原　　晃
教育次長	小林　教子
社会教育課長	鶴田　敏男
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	吉野　　健
社会教育課文化財保護係業務主幹	宮前　彰生
係長	松田　　哲
主査	小島　洋一
主査	星　　祥子
主査	蔵持　俊輔
主任	山下　祐樹
主任	腰塚　博隆
主任	新井　　端
主事（任期付任用職員）	武部　喜充
主事（任期付任用職員）	島村　範久
主事（任期付任用職員）	大野　美知子



第３図　三ヶ尻古墳群第 63・64 号墳調査地点位置図



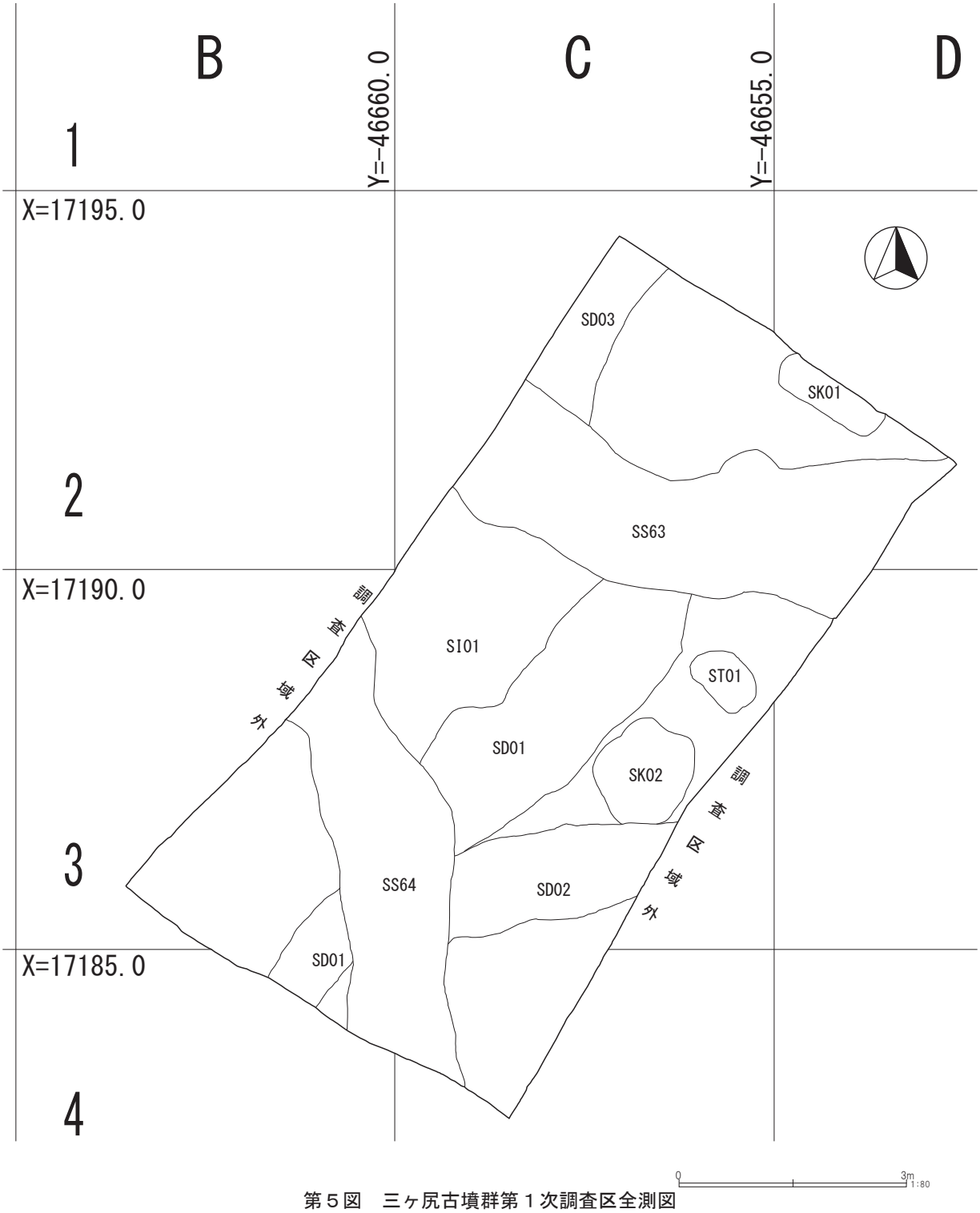
第４図　三ヶ尻古墳群第 63・第 64 号墳推定位置図

2　遺跡の概要

⑴　三ヶ尻古墳群について

三ヶ尻古墳群はかつては多くの古墳が存在していたことが知られており、現在までの調査で 64 基確認されているが、実際に築造された古墳の総数は 100 基を超えていたものと推定される。

発掘調査は、昭和 35 年の小澤國平による三ヶ尻林裏古墳の調査から始まり、昭和 54、55 年には、埼玉県埋蔵文化財調査事業団による上越新幹線建設工事に伴い、字天王において 6 基、字林において 16

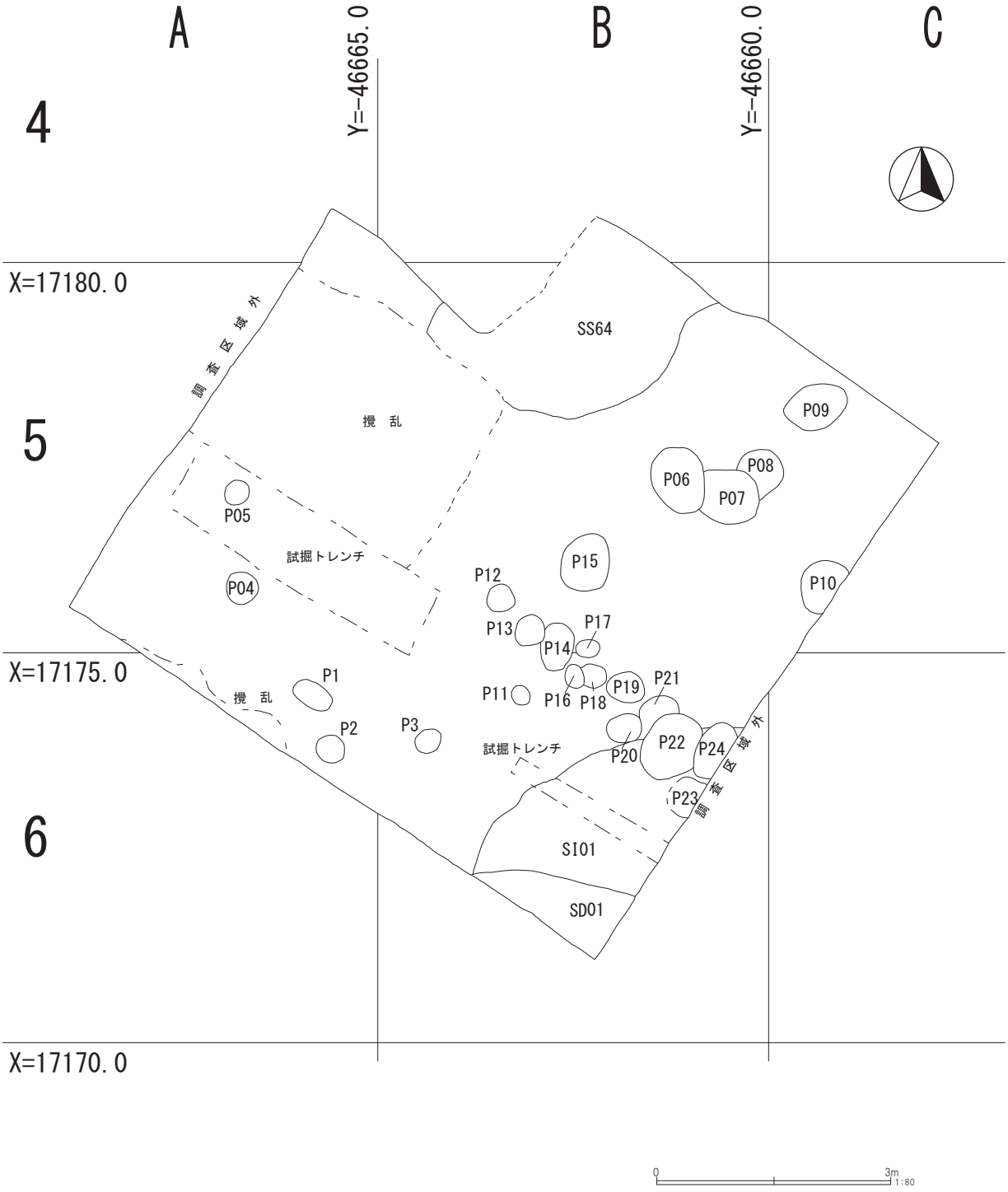


第５図　三ヶ尻古墳群第１次調査区全測図

基の古墳と１基の箱式石棺の調査が行われた。

熊谷市教育委員会においては、昭和 54 年に三ヶ尻 80 号墳の発掘調査が実施されている。

今回の調査では、これまで確認されていなかった古墳の周溝の一部が２箇所で確認されたことから新たに第 63、64 号墳を認識するに至った。



第６図　三ヶ尻古墳群第２次調査区全測図

⑵　調査の方法

発掘調査の方法は、１辺５ｍのグリッド方式を用いて行い、調査区全体を網羅できる様に、北西隅をＡ－１として東へＡ・Ｂ・Ｃ、南へ１・２・３とし、Ａラインは北から南へＡ－１・Ａ－２・Ａ－３・・・と呼称した。Ｂライン以東もＡラインと同様に呼称し、グリッド設定を行った。

なお、座標は、周辺の過去の発掘調査地点との照会を容易にするため、世界測地系による国家方眼座標に基づく基準点測量による。

重機による表土剥ぎを実施し、その後は、人力による遺構確認のための精査を実施し、確認された各遺構は各々手掘りを行った。原則として、遺物は必要に応じて写真撮影後、遺構ごとに一括して慎重に取り上げた。遺構は、写真撮影した後、実測を行った。そして、最後に遺構全体の写真撮影を行い、全測図の実測を行った。

⑶　検出された遺構と遺物

本調査によって検出された遺構は、第１次調査が、住居跡１軒、古墳２基、埴輪棺墓１基、溝跡３条、土坑２基、第２次調査で住居跡１軒、古墳１基、溝跡１条、ピット 24 基であった。なお、第１次調査の古墳は、第 63・第 64 号墳、第２次調査の古墳が第 64 号墳である。

遺物については、縄文時代中期の縄文土器と古墳時代後期の円筒埴輪に大別され、検出した遺物量はコンテナ（大きさ：縦 34 ㎝、横 54 ㎝、深さ 15 ㎝）にして８箱であった。以下、第１次調査、第２次調査の順で詳細を述べる。

３　遺構と遺物（第１次調査）

⑴　住居跡

第１号住居跡（第７～ 11 図）

本調査区の南東に位置し、Ｂ・Ｃ－２・３グリッドから検出した。第 63・64 号墳、第１号溝跡と重複しており、それらすべてに切られていた。

平面プランは、四方が他遺構と未調査区域であるため不明である。

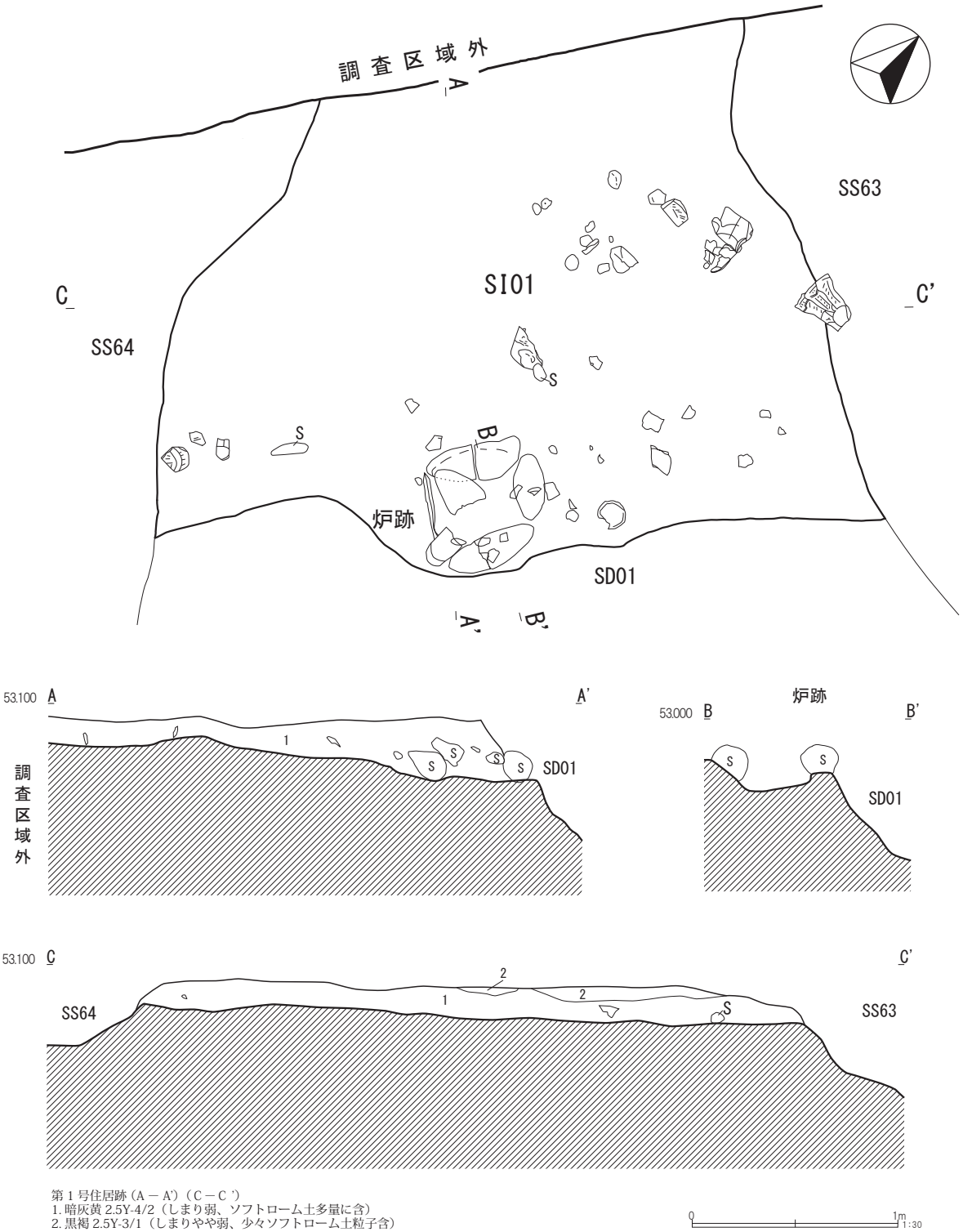
規模は、検出長軸で 3.12 ｍ、短軸で 2.02 ｍ、深さは 14 ㎝を測る。床面は、わずかな凸凹がある程度で、南に検出された炉跡に向かってわずかに傾斜する。埋土は、ほぼ平坦に堆積していた。

炉跡は、第１号溝跡に一部を切られる状態で検出された石囲炉である。掘り方は方形で、長軸 58 ㎝、短軸 55 ㎝、深さ 21 ㎝を測る。石材は、川原石の他、緑泥石片岩も利用されていた。

柱穴などは確認されておらず、詳細は不明だが、周囲の遺構によって消滅したものと推定される。

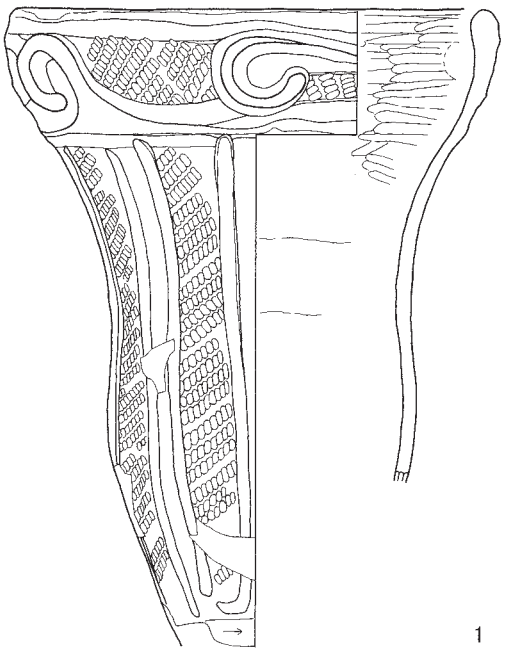
出土遺物は、縄文土器が大量に出土し、その多くが加曾利Ｅ式であった。

時期は、出土土器から縄文時代中期後半と考えられる。

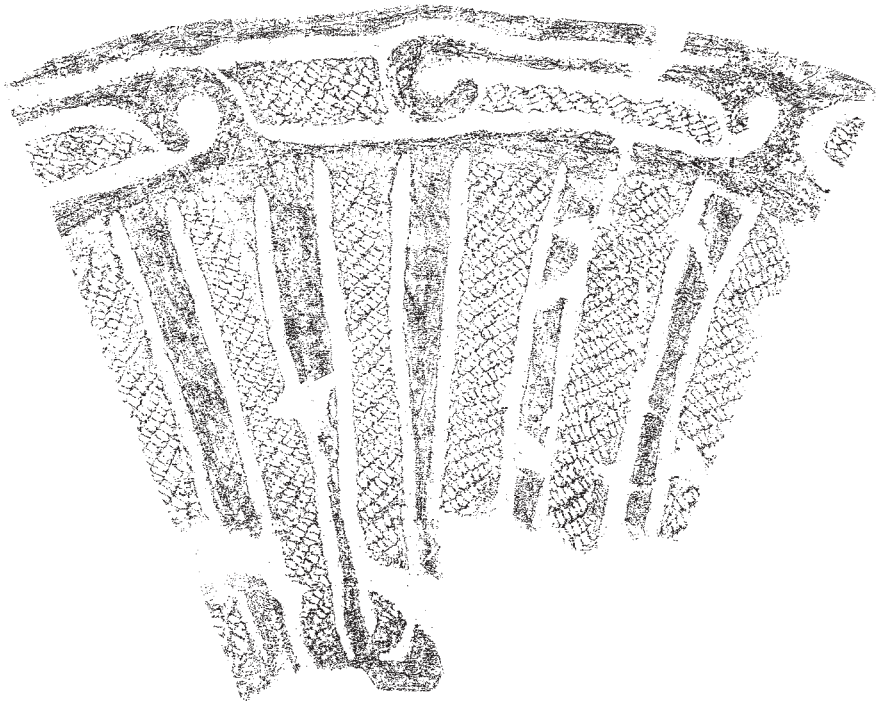


第１号住居跡（A － A'）（C － C '）
1. 暗灰黄 2.5Y-4/2（しまり弱、ソフトローム土多量に含）
2. 黒褐 2.5Y-3/1（しまりやや弱、少々ソフトローム土粒子含）

第７図　三ヶ尻古墳群第１次調査第１号住居跡

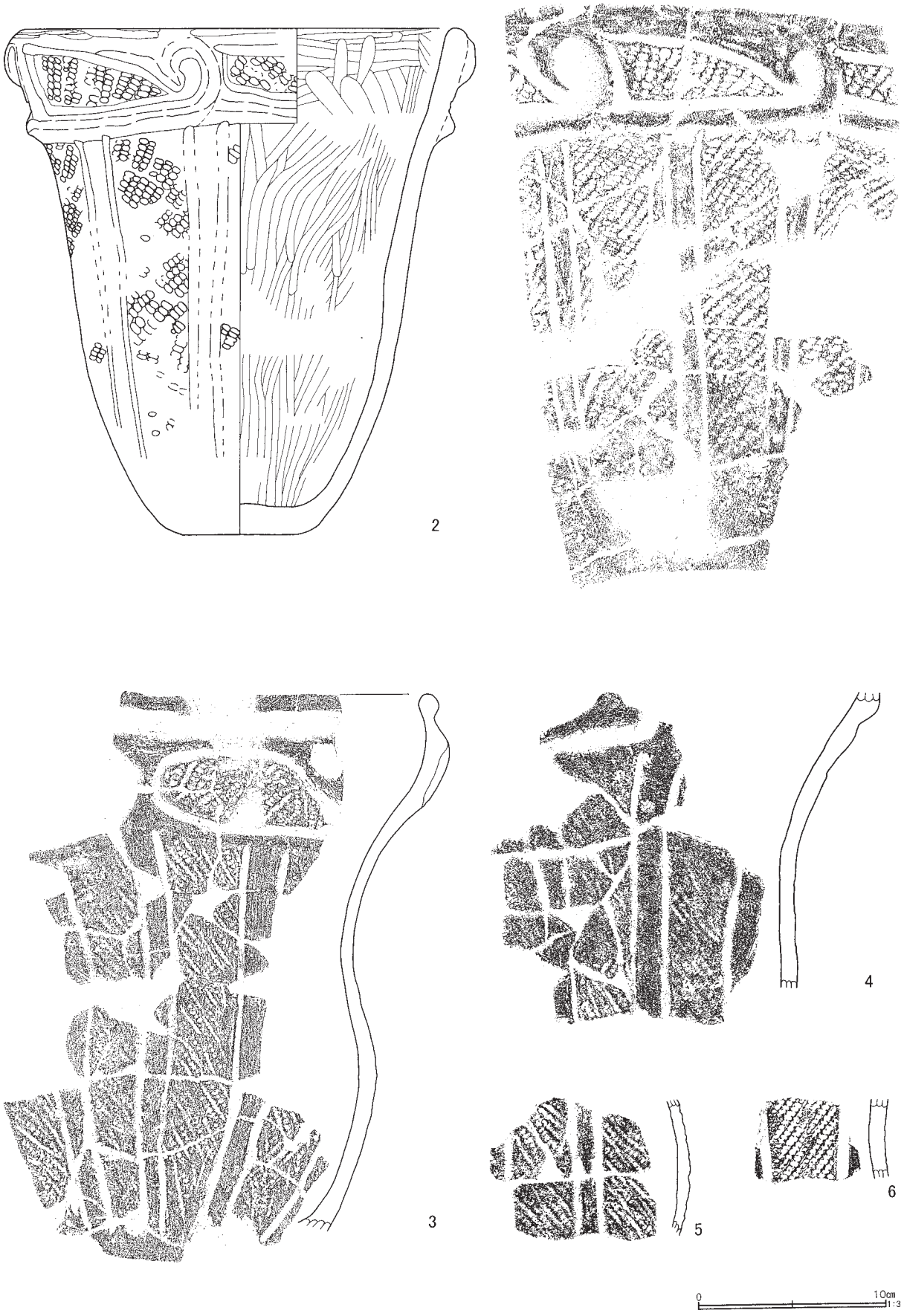


1

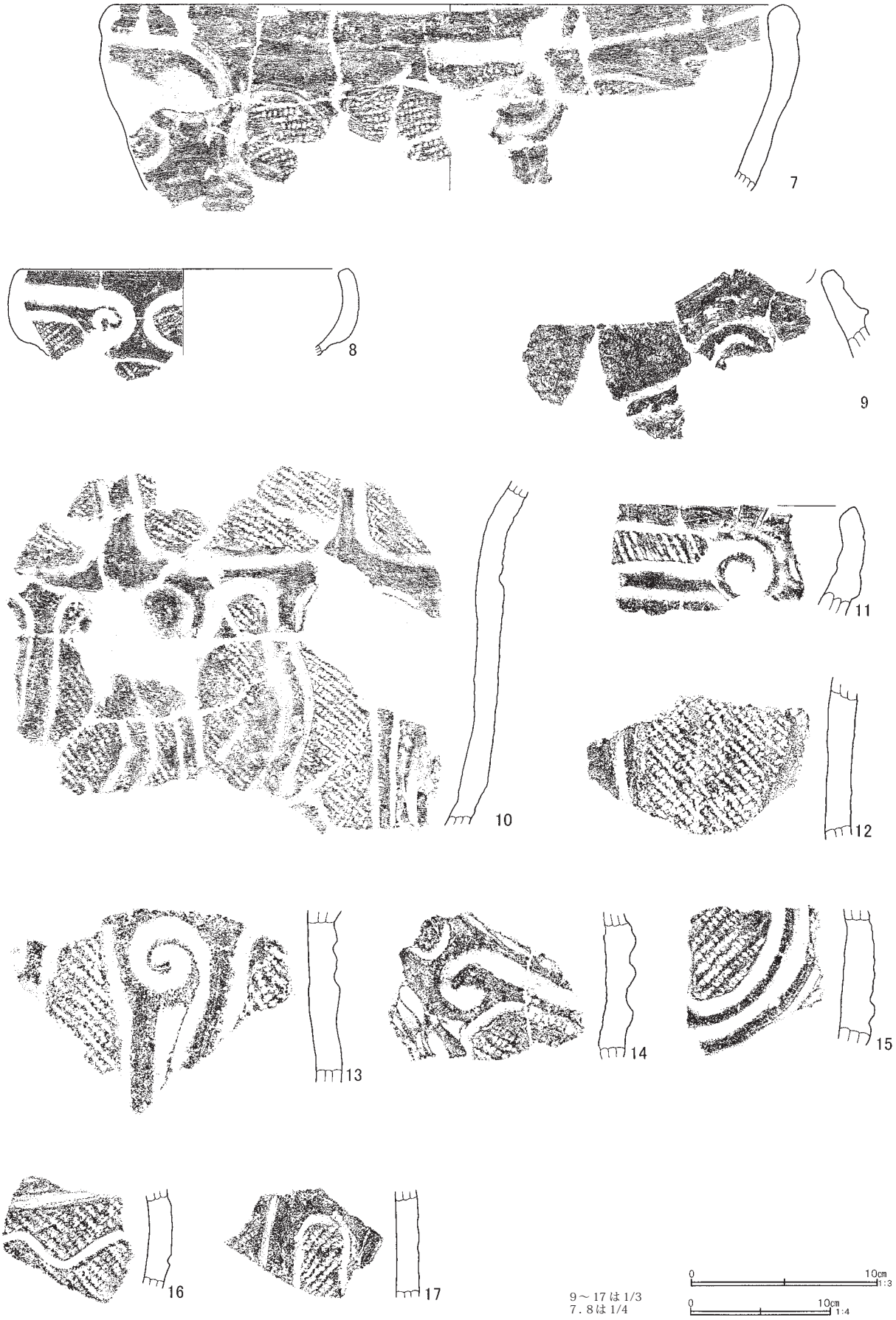


0 10cm
1:3

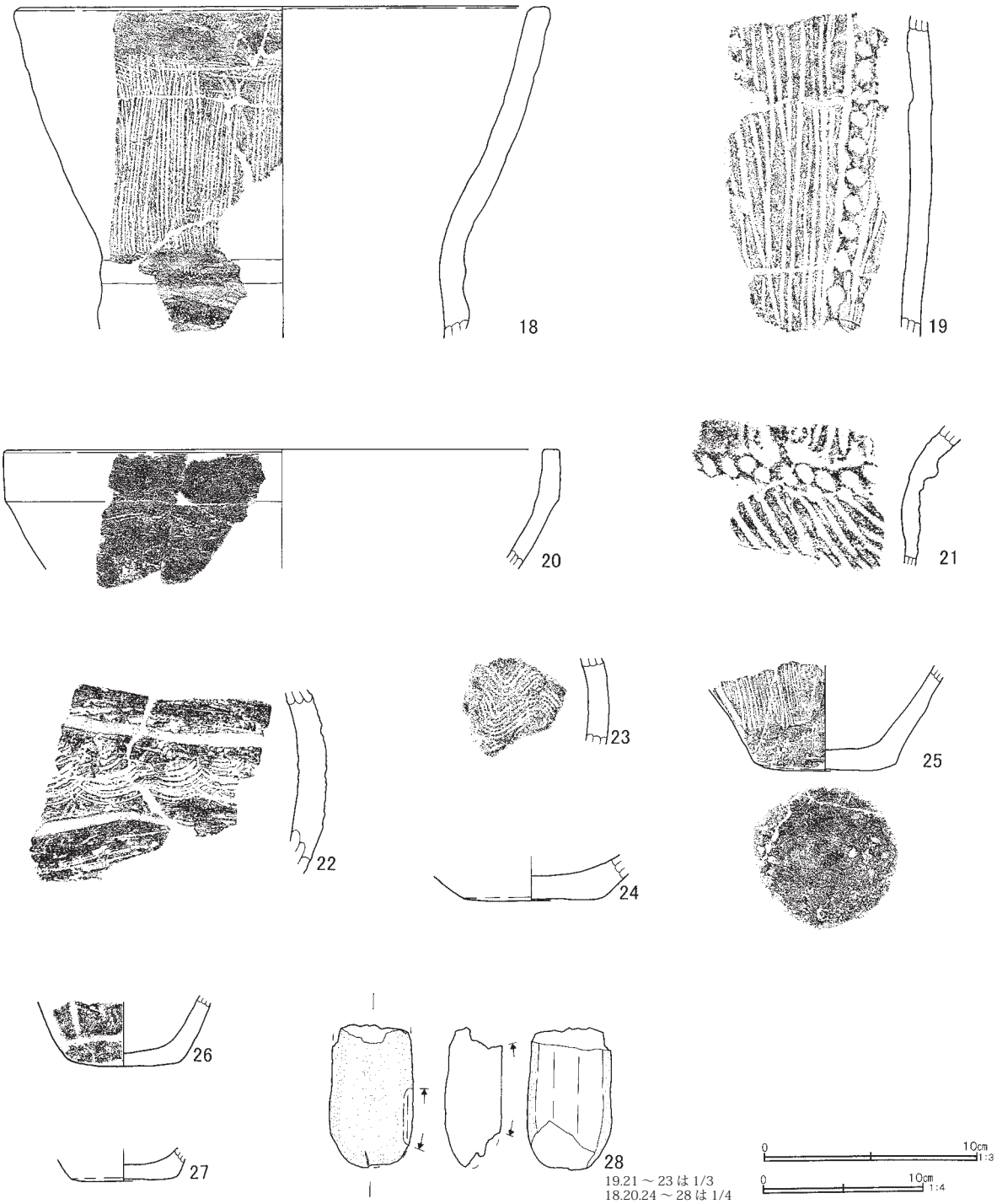
第８図　三ヶ尻古墳群第１次調査第１号住居跡出土遺物(1)



第９図　三ヶ尻古墳群第１次調査第１号住居跡出土遺物(2)



第 10 図　三ヶ尻古墳群第１次調査第１号住居跡出土遺物(3)



第 11 図　三ヶ尻古墳群第 1 次調査第 1 号住居跡出土遺物(4)

第２表　三ヶ尻古墳群第１次調査第１号住居跡出土遺物観察表（第８～ 11 図）

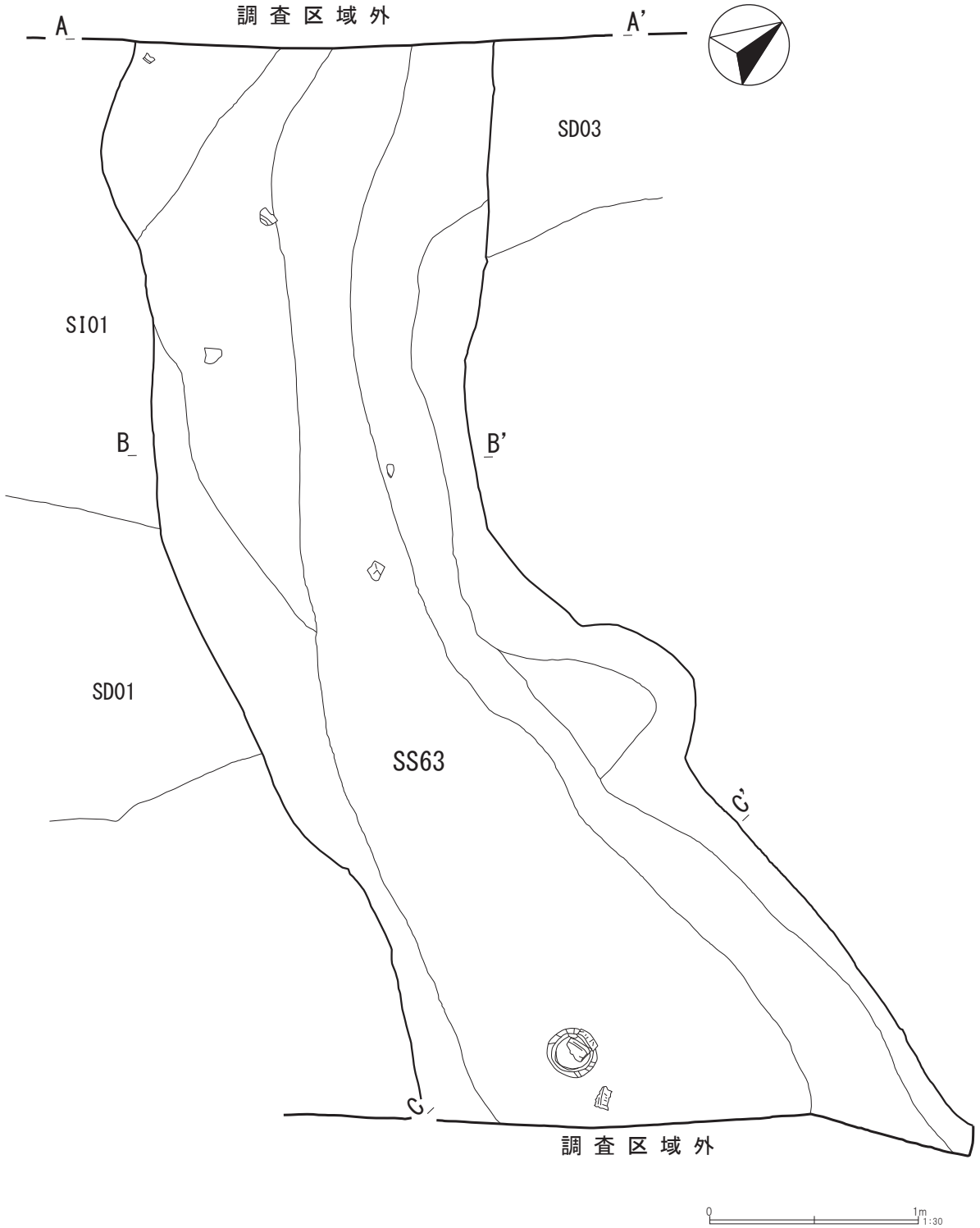
Ｎｏ	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
1	縄文土器 深鉢	19.3	(25.3)	-	-	-	A	80%	口縁部：.隆帯による渦巻文（６単位） 胴部：RL 単節縄文を施した後に縦位ヘラ描による沈線文（２条１節で８単位）	
2	縄文土器 深鉢	(22.6)	(27.1)	6.8	-	-	B	70%	口縁部：隆帯による渦巻文（４単位） 胴部：LR 単節縄文を施した後に縦位ヘラ描による沈線文（２条１節で 10 単位）	
3	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	口縁部～胴部破片	口縁部：隆帯を供える。円形区画分を施し、内部にＬＲ単節縄文を施す。 胴部：ＲＬ単節を施し、ヘラ描による平行沈線文を均等に施文する。	
4	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	胴部破片	縦位平行沈線文（2 条１節で２単位） その間に RL 単節縄文	
5	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	胴部破片	RL 単節縄文を配した後、縦位平行沈線文を施す	
6	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	胴部破片	LR 単節縄文を施した後、ヘラ描による沈線文を縦位に施す	
7	縄文土器 深鉢	(39.0)	(13.4)	-	-	-	B	口縁部 50%	口縁部：文様帯、全体的に平板化。 LR 単節縄文をヘラ描にて区画化した内部に施す。	
8	縄文土器 深鉢	(23.4)	(6.2)	-	-	-	B	口縁部 20%	区画隆帯部をナデ消すように渦巻文の沈線 LR 単節縄文	
9	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	口縁部破片	波状口縁 波状の隆帯を貼りつけ	
10	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	口縁部～胴部破片	LR 単節及び RL 単節縄文痕 隆帯が弧を描くように施され、縦位平行沈線を施す。	
11	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	口縁部破片	外面：隆帯をそなえ、渦巻文を施す 区画沈線文を施し、内に斜位沈線文を施文する	
12	縄文土器	-	-	-	-	-	B	胴部破片	縦位沈線文 RL 単節縄文を施す	
13	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	胴部破片	渦巻沈線文 その両側に区画線を施し、わきに RL 単節縄文を施す	
14	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	口縁部破片	外面：渦巻沈線文 区画内に RL 単節縄文を施す 斜位の刻み	
15	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	胴部破片	平行に二重沈線弧文を施し、内部は LR 単節縄文	
16	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	破片	RL 単節縄文を施し、その後横位沈線文及び波状沈線文が施される	
17	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	破片	縦位沈線文及び「ｎ」字状の沈線文内に LR 単節縄文を施す	
18	縄文土器 深鉢	(33.6)	(20.9)	-	-	-	B	口縁部～肩 15%	口縁部：櫛描状工具による縦位条線	
19	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	胴部破片	1 条の隆帯が縦位に貼付され、刻みを施す その両面に櫛描文を施す（４本１単位）	
20	縄文土器 深鉢	(35.0)	(7.5)	-	-	-	B	破片	内外面：横ナデ調整	
21	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	破片	隆帯を１条貼付し（横位）刻みを施す その上下にヘラ描による羽状沈線文	
22	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	胴部破片	ヘラ描沈線文で区画をし、その間に櫛歯状工具による半円状の条線が施文される（7 本 1 単位）	
23	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	破片	櫛描による波状文（５条１単位）	
24	縄文土器 深鉢	-	(2.8)	8.0	-	-	B	底部 100%	内面：ややナデ痕	
25	縄文土器 深鉢	-	(6.6)	8.8	-	-	B	底部 100%	櫛描による羽状文（6 条１単位）	
26	縄文土器 深鉢	-	(4.4)	7.1	-	-	B	底部～胴部 80%	外面：ヘラ描による沈線（縦位）	
27	縄文土器 深鉢	-	(2.0)	6.6	-	-	B	底部 60%	外面：横位ナデ調整痕 内面：ヘラナデ痕わずかに	
28	磨石	最大長　(9.0)　最大幅　5.2　最大厚　3.6　重量　238 g								砂岩

⑵　古墳

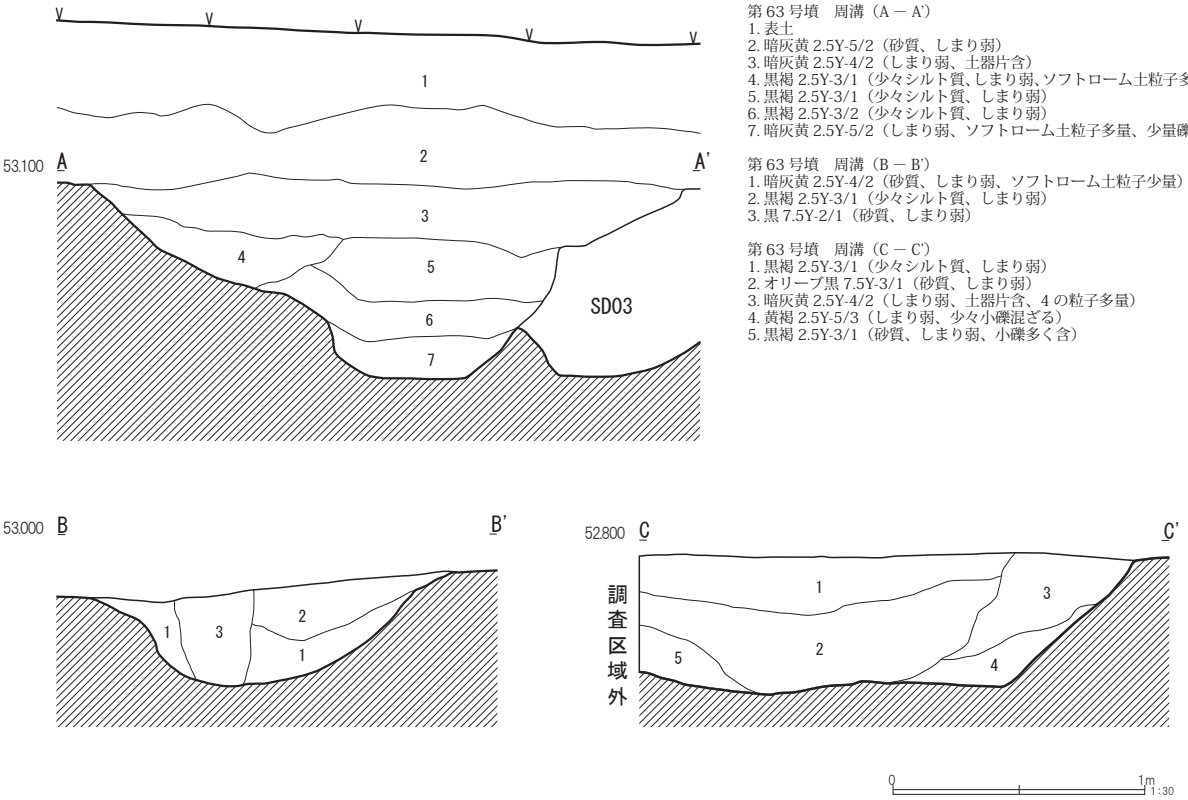
本調査によって新たに第 63・64 号墳が確認できた。検出できたのは周溝のみである。

第 63 号墳（第 12 ～ 14 図）

本調査区の北に位置しており、Ｃ・Ｄ－２・３グリッドから検出した。第１号住居跡、第１・３号溝跡と重複関係にある。



第 12 図　三ヶ尻古墳群第 1 次調査第 63 号墳(1)



第 63 号墳　周溝（A － A'）
1. 表土
2. 暗灰黄 2.5Y-5/2（砂質、しまり弱）
3. 暗灰黄 2.5Y-4/2（しまり弱、土器片含）
4. 黒褐 2.5Y-3/1（少々シルト質､しまり弱､ソフトローム土粒子多量）
5. 黒褐 2.5Y-3/1（少々シルト質、しまり弱）
6. 黒褐 2.5Y-3/2（少々シルト質、しまり弱）
7. 暗灰黄 2.5Y-5/2（しまり弱、ソフトローム土粒子多量、少量礫含）

第 63 号墳　周溝（B － B'）
1. 暗灰黄 2.5Y-4/2（砂質、しまり弱、ソフトローム土粒子少量）
2. 黒褐 2.5Y-3/1（少々シルト質、しまり弱）
3. 黒 7.5Y-2/1（砂質、しまり弱）

第 63 号墳　周溝（C － C'）
1. 黒褐 2.5Y-3/1（少々シルト質、しまり弱）
2. オリーブ黒 7.5Y-3/1（砂質、しまり弱）
3. 暗灰黄 2.5Y-4/2（しまり弱、土器片含、4 の粒子多量）
4. 黄褐 2.5Y-5/3（しまり弱、少々小礫混ざる）
5. 黒褐 2.5Y-3/1（砂質、しまり弱、小礫多く含）

第 13 図　三ヶ尻古墳群第 1 次調査第 63 号墳(2)

いずれの遺構も本遺構が切っている。

墳丘は、削平されており確認できないが、調査区北西角付近を中心に築造されていた円墳と推定される。墳丘径は確認できた周溝から 12 ～ 13 m程度と想定される。今回の調査では墳丘を囲む周溝の一部が検出された。

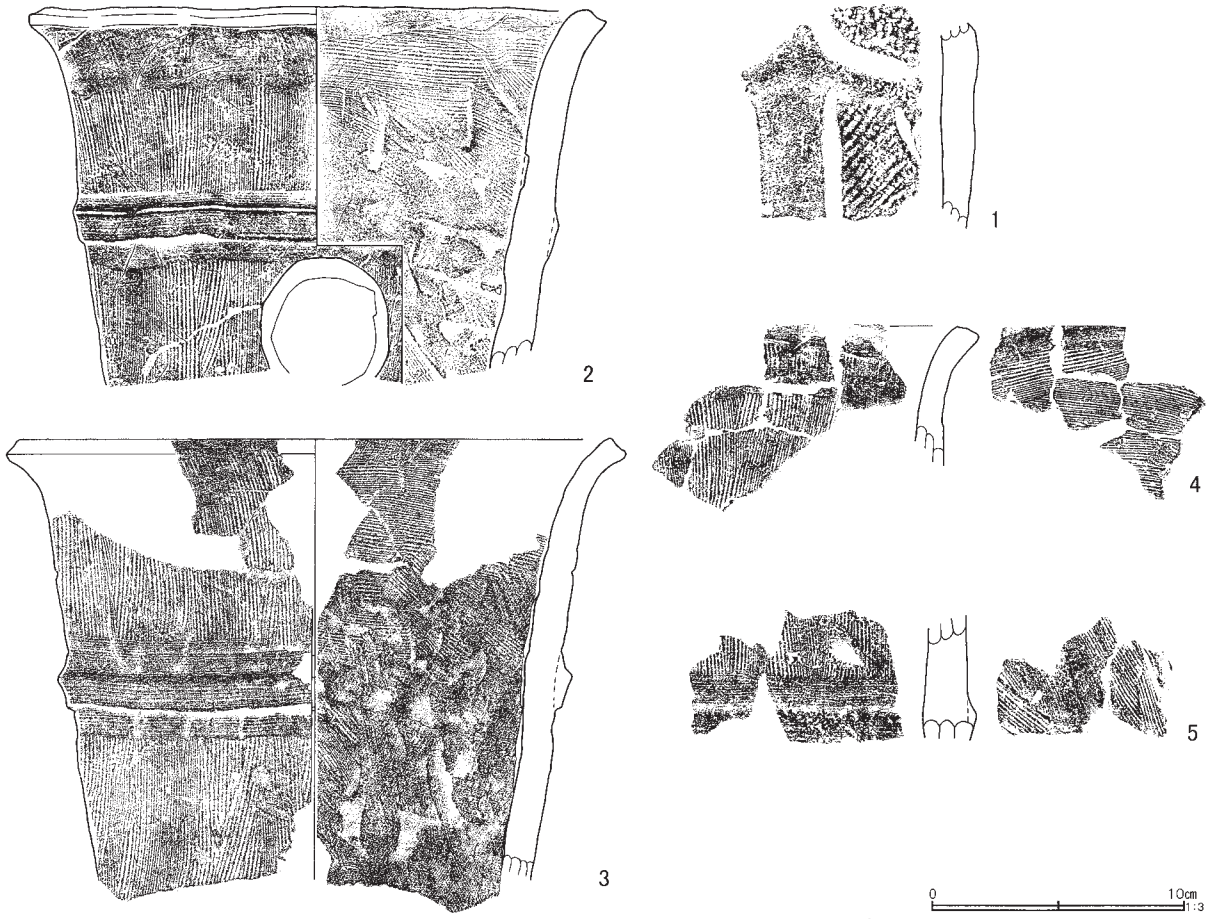
周溝の規模は、検出長 5.3 m、幅 1.4 ～ 1.7 mで、確認面からの深さは 76 ㎝を測る。周溝外側の立ち上がりは緩やかな傾斜であるが、内側はそれに比べやや急である。底面は、ほぼ平坦である。正確な規模は不明であるが、検出された箇所から判断し、周溝部の推定径は 15 ～ 16 m前後であろう。

断面観察から、埋土には、しまりが弱い黒褐色土にソフトロームの粒子、ブロックを含んでいる土層が多くみられ、まず墳丘側から自然堆積により埋没したと推定される。

遺物は、口径が 20 ㎝以上の口縁～胴部が残る円筒埴輪の他、複数の埴輪片などが出土している。

時期は、古墳時代後期であると考えられる。

なお、本調査区に隣接して砂利敷の道路があるが、その道路と調査区の境には 20 ㎝前後の川原石が多数確認できた。そのことから、これらは本墳丘の葺石の可能性が考えられる。



第 14 図　三ヶ尻古墳群第１次調査第 63 号墳出土遺物

第３表　三ヶ尻古墳群第１次調査第 63 号墳出土遺物観察表（第 14 図）

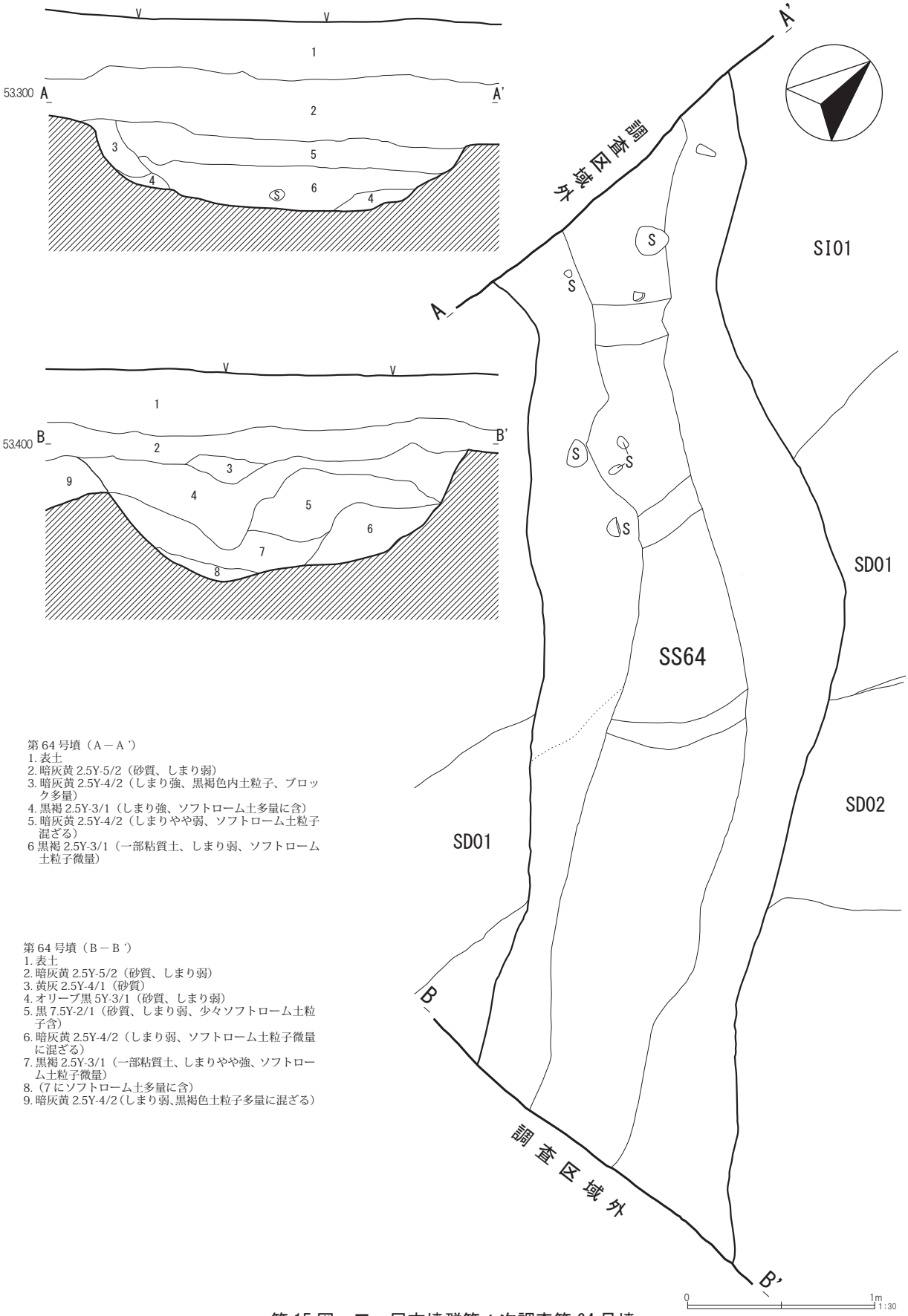
No	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
1	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	胴部破片	沈線による区画内に RL 単節縄文を施す 縦位の沈線内に LR 単節縄文を施す	流れ込みか
2	円筒埴輪	21.7	(15.0)	-	ABDKN	橙 5YR-6/8	B	口縁部 100%	外面：縦位ハケ目、後に口縁部頂横ナデ調整 内面：横・斜ハケ目痕、及び粘土紐積上痕 突帯部：断面台形 透孔	ハケ目 10 本 /cm
3	円筒埴輪	(23.1)	(17.5)	-	ABIKN	明赤褐 2.5YR-5/8	B	口縁部～胴部 30%	口縁部やや外反する 外面：縦位ハケ目 内面：横斜位ハケ目、及び指頭圧痕 粘土紐積上げ痕 突帯部：断面台形	ハケ目 9 本 /cm
4	円筒埴輪	-	-	-	ABDEHK	明赤褐 2.5YR-5/6	B	口縁部破片	口縁部、外反する 外面：縦位ハケ目 内面：横位ハケ目	ハケ目 9 本 /cm
5	円筒埴輪	-	-	-	ABCIJ	橙 2.5YR-6/8	B	突帯部破片	外面：縦位ハケ目 内面：斜位ハケ目 突帯部：断面台形	ハケ目 9 本 /cm

第 64 号墳（第 15 図）

Ｂ・Ｃ－３・４グリッドから検出した。第１号住居跡、第１・２号溝跡と重複関係にあり、いずれの遺構も本遺構が切っていた。

本調査区の南に位置し、北西から南東へ傾斜し延伸する。墳丘は、削平されており、確認できないが、第１次調査区の南西角付近を中心に築造されていた円墳と推定される。墳丘径は確認できた周溝から 15 ～ 16 m程度と想定される。本調査では、墳丘を囲む周溝の一部が検出されている。後述する第２次調査ではこの延長部分が検出されている。

周溝の規模は、検出長 5.2 m程度、検出幅 1.6 m～ 0.96 mの幅で、深さは、遺構確認面から 58 ㎝程



第 64 号墳（A－A ’）
1. 表土
2. 暗灰黄 2.5Y-5/2（砂質、しまり弱）
3. 暗灰黄 2.5Y-4/2（しまり強、黒褐色内土粒子、ブロック多量）
4. 黒褐 2.5Y-3/1（しまり強、ソフトローム土多量に含）
5. 暗灰黄 2.5Y-4/2（しまりやや弱、ソフトローム土粒子混ざる）
6 黒褐 2.5Y-3/1（一部粘質土、しまり弱、ソフトローム土粒子微量）

第 64 号墳（B－B ’）
1. 表土
2. 暗灰黄 2.5Y-5/2（砂質、しまり弱）
3. 黄灰 2.5Y-4/1（砂質）
4. オリーブ黒 5Y-3/1（砂質、しまり弱）
5. 黒 7.5Y-2/1（砂質、しまり弱、少々ソフトローム土粒子含）
6. 暗灰黄 2.5Y-4/2（しまり弱、ソフトローム土粒子微量に混ざる）
7. 黒褐 2.5Y-3/1（一部粘質土、しまりやや強、ソフトローム土粒子微量）
8.（7 にソフトローム土多量に含）
9. 暗灰黄 2.5Y-4/2（しまり弱、黒褐色土粒子多量に混ざる）

第 15 図　三ヶ尻古墳群第 1 次調査第 64 号墳

度を測る。なお、第２次調査区内の規模を合わせると、検出長はおおよそ 17 ～ 18 ｍである。

平面形は不整形で、溝幅は広く、底面は起伏が確認できる。底部付近には川原石の出土が目立ち、墳丘の葺石の可能性がある。断面観察から、北から南に進むにつれ埋土の堆積に乱れが生じ、特に調査区域外に近い南壁付近では、一部人工的な埋土が確認できた。墳丘側からの崩落による埋没と推定できる。

出土遺物は、微細な土器片のみで、図示できるものがなかった。

時期は、判別できるものが検出できなかったため不明であるが、遺構の重複関係から他の遺構より新しいことが分かる。

⑶　埴輪棺墓

第１号埴輪棺墓（第 16・17 図）

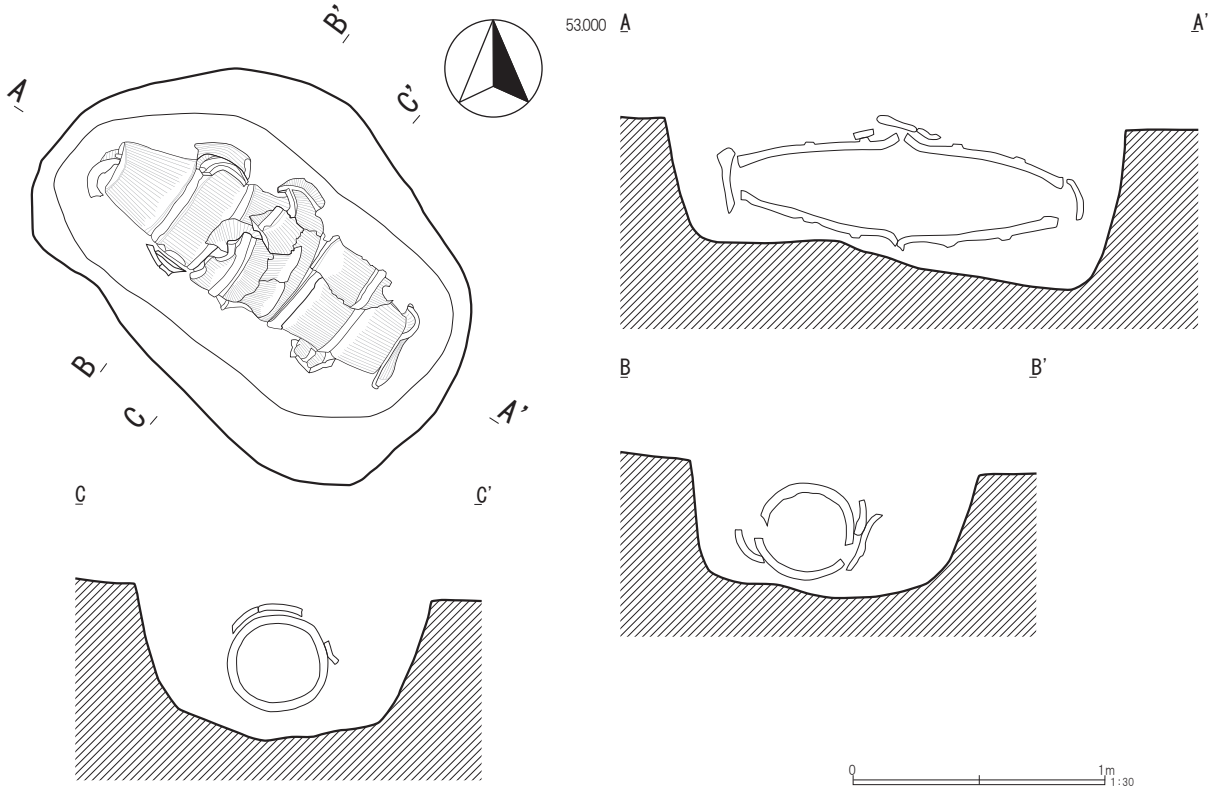
Ｃ－３グリッドから検出した。重複する遺構は確認されていない。

平面プランは、やや不整形な隅丸方形を呈するものである。

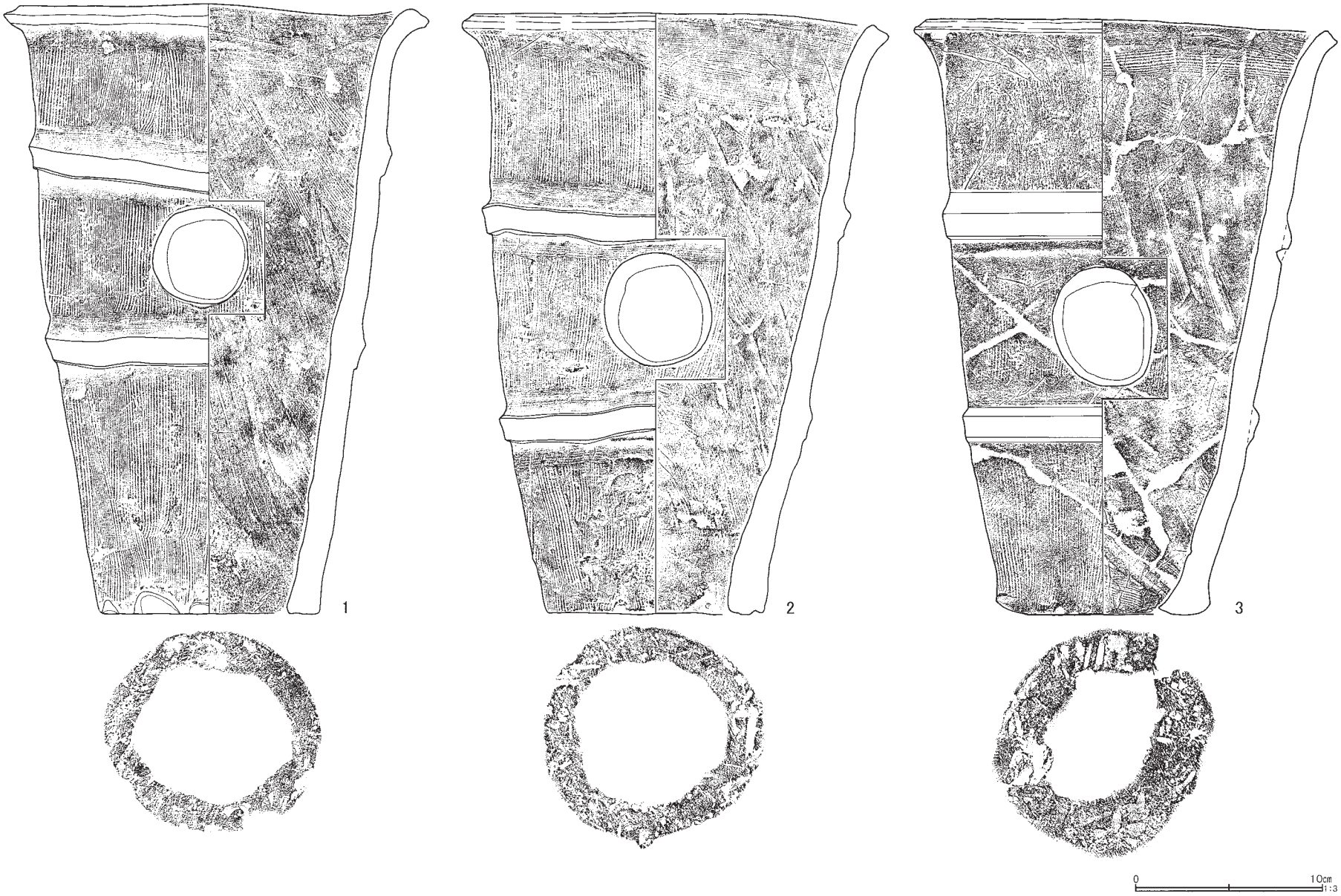
規模は、長軸 0.90 ｍ、短軸 0.62 ｍを測り、深さは 62 ㎝を測る。埴輪棺は、ほぼ完形の円筒埴輪２個体が口縁部を向い合せにして据えられており、棺は北西－南東の軸をもって検出された。土坑の掘り方は、緩やかな箱形または舟底形であり、棺を埋設する目的のみのために掘られたようであった。棺に使用された円筒埴輪２点は、高さ 32 ㎝、径 22 ㎝の同一規模であり、棺の隙間をふさぐ目的で、破壊した円筒埴輪一個体（第 17 図 3）の破片が口縁部、透かし孔部、底部にそれぞれ設置されていた。棺全体の長さは 0.64 ｍ、幅は 0.32 ｍを測ることから、子供の埋葬もしくは再葬が推定される。

出土遺物は、埴輪棺に利用された円筒埴輪以外検出されなかった。

時期は、古墳時代後期と考えられる。



第 16 図　三ヶ尻古墳群第１次調査第１号埴輪棺墓



第 17 図　三ヶ尻古墳群第 1 次調査第 1 号埴輪棺墓出土遺物

第４表　三ヶ尻古墳群第１次調査第１号埴輪棺墓出土遺物観察表（第 17 図）

Ｎｏ	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
1	円筒埴輪（埴輪棺）	22.7	32.5	11.8	ABCIJ	橙 2.5YR-6/6	B	100%	外面：縦位ハケ目 内面：口縁部横位ハケ目、胴部縦位ハケ目 突帯部断面、台形を呈する 透孔 底部付近、工具痕	北側 ハケ目 ８本 /cm
2	円筒埴輪（埴輪棺）	22.7	32.0	11.6	ABN	明赤褐 5YR-5/8	B	100%	外面：ハケ目痕 内面：口縁部横位ハケ目 粘土紐積上げ痕 突帯部断面、台形を呈する 透孔	南側 ハケ目 ９本 /cm
3	円筒埴輪（埴輪棺）	22.6	31.7	11.4	ABDHKN	橙 7.5YR-6/8	B	90%	外面：縦位ハケ目 内面：口縁部横位ハケ目、胴部縦位ハケ目 突帯部断面、台形を呈する 透孔	穿孔閉塞用 ハケ目 ８本 /cm

⑷　溝跡

第１号溝跡（第 18・20 図）

Ｂ・Ｃ－３・４グリッドから検出した。第１号住居跡、第 63・64 号墳、第２号溝跡と重複関係にあり、第１号住居跡を切り、第 63・64 号墳に切られていた。第２号溝跡との切り合い関係は第 64 号墳によって切られているため不明である。

本遺構は、切り合い関係にある第 63 号墳から南西に向かって延伸し、第 64 号墳に切られ、南の調査区域外へ抜けている。

規模は、検出長 6.88 ｍ程度、検出幅 1.6 ｍ～ 0.76 ｍを測り、深さは遺構確認面から 54 ㎝を測った。

平面形は、南進するにつれ溝幅が狭くなり、底部は、平坦ではなく起伏が目立ち、南から北に向かって傾きをもつ。

埋土は、断面観察から、一度埋没した後に掘り直された跡が確認できるが、詳細は不明である。

出土遺物は、縄文土器の深鉢のみであり、大半が加曾利Ｅ式の土器である。これらは、第１号住居跡からの流れ込みと考えられる。

時期は、不明である。

第２号溝跡（第 18・20 図）

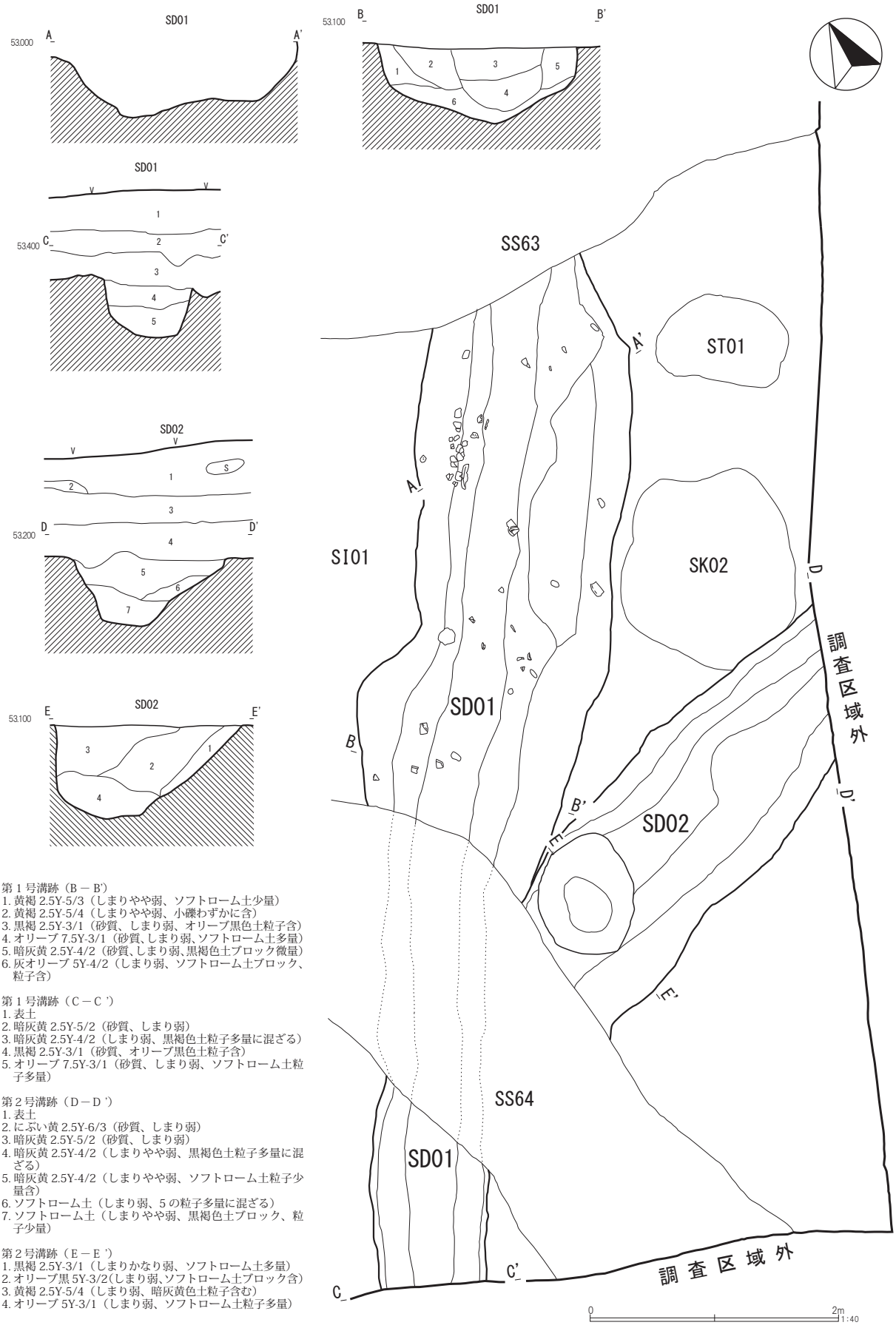
Ｃ－３グリッドから検出した。第 64 号墳、第１号溝跡、第２号土坑と重複関係にあり、第 64 号墳に切られ、第２号土坑の一部を切っていた。第１号溝跡との切り合い関係は第 64 号墳によって切られているため不明である。

本遺構は、調査区の東壁から南西方向に延伸し、第 64 号墳に切られ、その南の詳細は不明である。また、第１号溝跡が二又に分岐していた可能性も考えられる。

規模は、検出長 2.4 ｍ、検出幅 1.2 ｍを測り、深さは遺構確認面から 52 ㎝を測る。平面形は不整形で、底面は途中ピット状の落ち込みが確認でき、南西から北東に向かって傾きをもつ。なお、ピット状の落ち込みの用途は不明であり、断面観察から自然堆積により埋まったものと推測できる。

出土遺物は、縄文土器の深鉢などであり、第１号住居跡と同時期の加曾利Ｅ式が大半を占めていた。

時期は、不明である。



第 1 号溝跡（B － B'）
1. 黄褐 2.5Y-5/3（しまりやや弱、ソフトローム土少量）
2. 黄褐 2.5Y-5/4（しまりやや弱、小礫わずかに含）
3. 黒褐 2.5Y-3/1（砂質、しまり弱、オリーブ黒色土粒子含）
4. オリーブ 7.5Y-3/1（砂質、しまり弱、ソフトローム土多量）
5. 暗灰黄 2.5Y-4/2（砂質、しまり弱、黒褐色土ブロック微量）
6. 灰オリーブ 5Y-4/2（しまり弱、ソフトローム土ブロック、粒子含）

第 1 号溝跡（C － C '）
1. 表土
2. 暗灰黄 2.5Y-5/2（砂質、しまり弱）
3. 暗灰黄 2.5Y-4/2（しまり弱、黒褐色土粒子多量に混ざる）
4. 黒褐 2.5Y-3/1（砂質、オリーブ黒色土粒子含）
5. オリーブ 7.5Y-3/1（砂質、しまり弱、ソフトローム土粒子多量）

第 2 号溝跡（D － D '）
1. 表土
2. にぶい黄 2.5Y-6/3（砂質、しまり弱）
3. 暗灰黄 2.5Y-5/2（砂質、しまり弱）
4. 暗灰黄 2.5Y-4/2（しまりやや弱、黒褐色土粒子多量に混ざる）
5. 暗灰黄 2.5Y-4/2（しまりやや弱、ソフトローム土粒子少量含）
6. ソフトローム土（しまり弱、5 の粒子多量に混ざる）
7. ソフトローム土（しまりやや弱、黒褐色土ブロック、粒子少量）

第 2 号溝跡（E － E '）
1. 黒褐 2.5Y-3/1（しまりかなり弱、ソフトローム土多量）
2. オリーブ黒 5Y-3/2(しまり弱、ソフトローム土ブロック含）
3. 黄褐 2.5Y-5/4（しまり弱、暗灰黄色土粒子含む）
4. オリーブ 5Y-3/1（しまり弱、ソフトローム土粒子多量）

第 18 図　三ヶ尻古墳群第 1 次調査第 1 ・ 2 号溝跡

第３号溝跡（第 19・20 図）

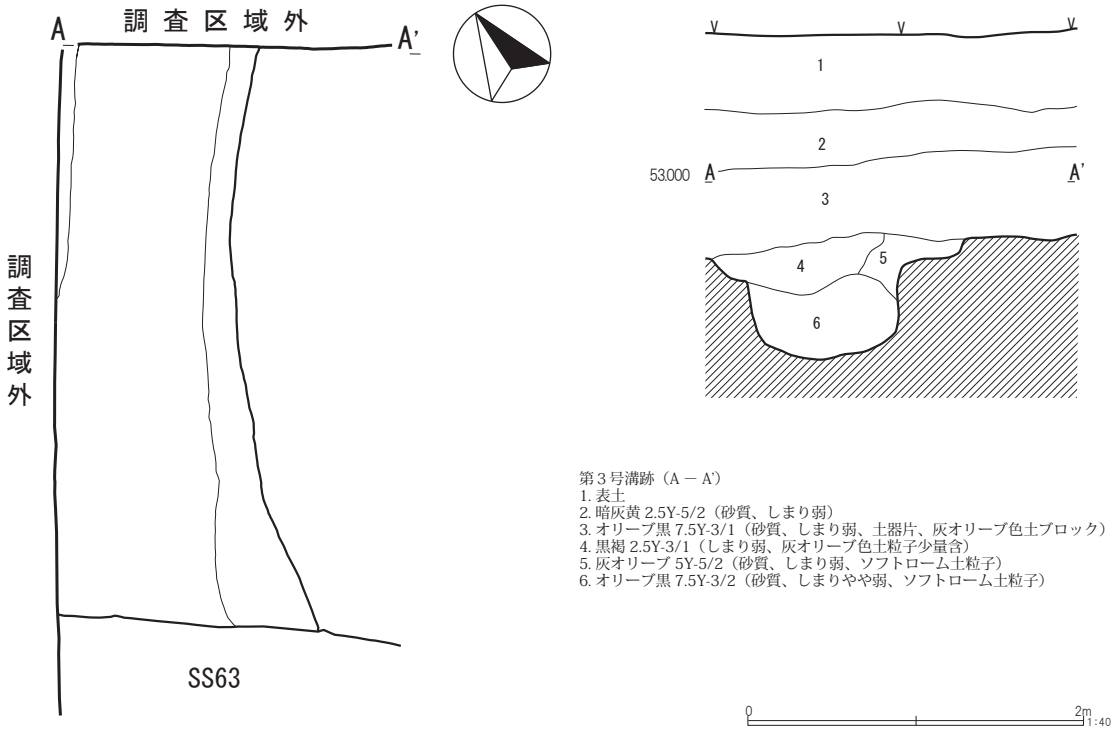
Ｃ－２グリッドから検出した。第 63 号墳と重複関係にあり、第 63 号墳の周溝に切られていた。

規模は、検出長 2.2 ｍ、検出幅１ｍを測り、深さは遺構確認面から 60.2 ㎝程度を測る。

検出された長さが短いため用途不明であるが、埋土は、断面観察から溝の立ち上がりにランダムに堆積していることから人工的に埋め戻されたと推定される。すべての遺構が意図をもって造られる。

出土遺物は、微細な土器片と円筒埴輪のみで、埴輪は古墳からの流れ込みと考えられる。

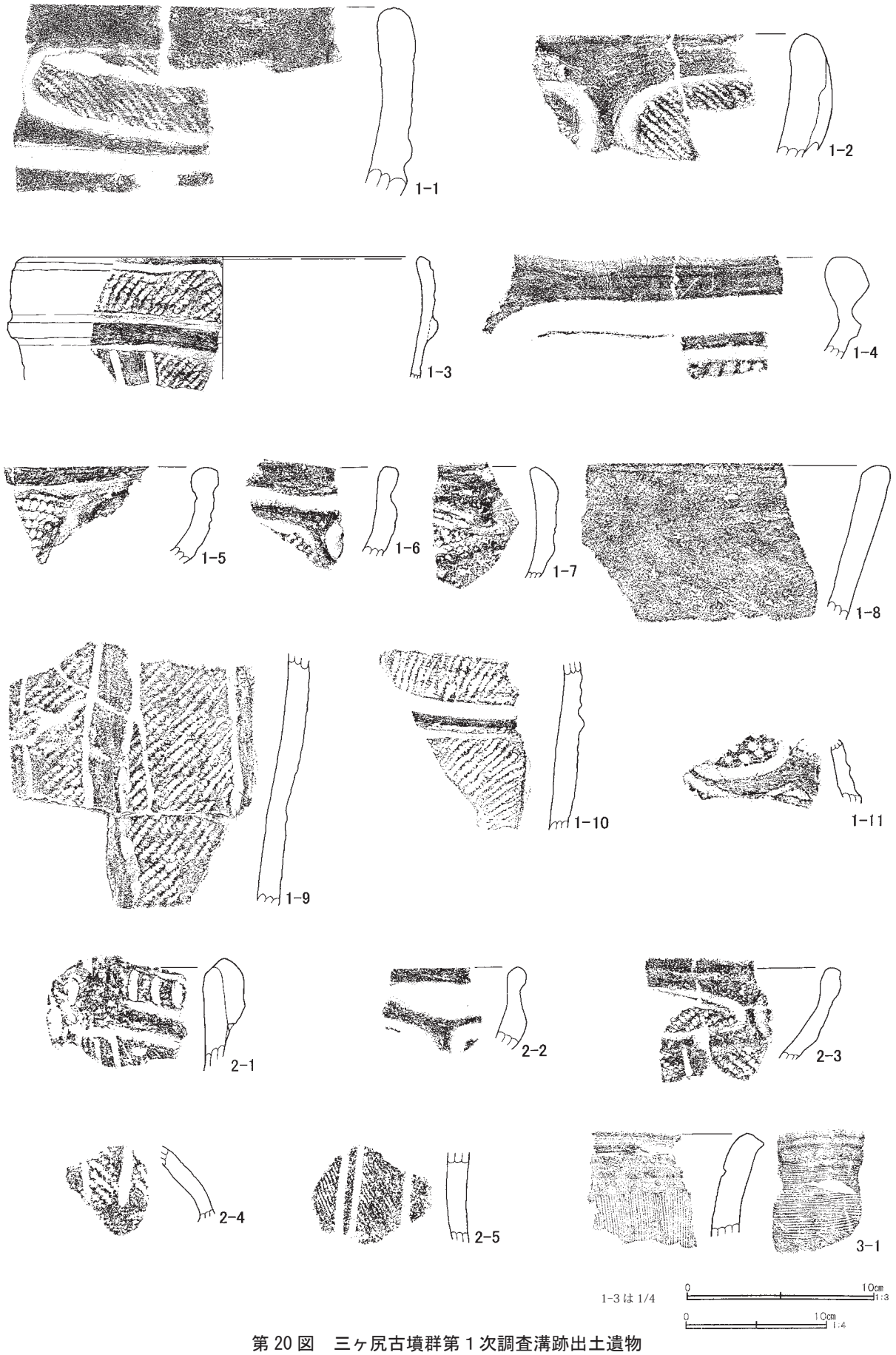
時期は、判別できるものがなく不明である。



第 19 図　三ヶ尻古墳群第１次調査第３号溝跡

第５表　三ヶ尻古墳群第１次調査溝跡出土遺物観察表(1)（第 20 図）

Ｎｏ	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
1-1	SD01	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	口縁部破片	平坦な隆帯を持ち、横に長い楕円形区画文内に RL 単節縄文、その下部には横位沈線文	
1-2	SD01	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	口縁部破片	隆帯をそなえ、楕円形区画文、内に RL 単節縄文を施す	
1-3	SD01	縄文土器 深鉢	(28.2)	(8.8)	-	-	-	B	口縁部 15%	横位の隆帯で区画分けし、上部には楕円形区画内に LR 単節縄文を施す。 下部は磨消し懸垂文を施し、内に LR 単節縄文を施す 内面：横ナデ調整	
1-4	SD01	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	口縁部破片	外面：楕円形区画文 その下部に刻み痕	
1-5	SD01	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	口縁部破片	口端部ヘラナデ調整 隆帯をそなえ、沈線による区画文を施し、内に RL 単節縄文	
1-6	SD01	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	口縁部破片	横位ナデ沈線文 区画文、内に縄文痕	
1-7	SD01	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	口縁部破片	隆帯をそなえ、区画文内に縄文 摩耗著しい	
1-8	SD01	縄文土器	-	-	-	-	-	B	口縁部破片	外面：横位ナデ	
1-9	SD01	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	破片	外面：磨消し懸垂文を施し、区画内に LR 単節縄文施文。	



第 20 図　三ヶ尻古墳群第 1 次調査溝跡出土遺物

第６表　三ヶ尻古墳群第１次調査溝跡出土遺物観察表(2)（第 20 図）

Ｎｏ	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
1-10	SD01	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	破片	横位の隆帯で区画分けし、その上下に LR 単節縄文 一部に弧状の沈線文	
1-11	SD01	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	破片	外面：区画文、内に円形刺突文を施文	
2-1	SD02	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	口縁部破片	隆帯を上下逆さの「T」字状に貼付し、口縁部頂に刻みを施す 隆帯下部にヘラ描沈線文	
2-2	SD02	縄文土器	-	-	-	-	-	B	口縁部破片	口縁部を回る指ナデによる横位沈線文	
2-3	SD02	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	口縁部破片	横位の楕円形区画文内に LR 単節縄文を施す 磨消し懸垂文を施し、区画内に RL 単節縄文？	
2-4	SD02	縄文土器 深鉢？	-	-	-	-	-	B	破片	磨消し懸垂文を施し、区画内に RL 単節縄文？	
2-5	SD02	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	胴部破片	磨消し懸垂文を施し、区画内に RL 単節縄文？	
3-1	SD03	円筒埴輪	-	-	-	-	-	B	口縁部破片	外面：縦位ハケ目調整、後に口縁部頂横ナデ痕 内面：横位ナデ	ハケ目 ９本 /cm

(5)　土坑

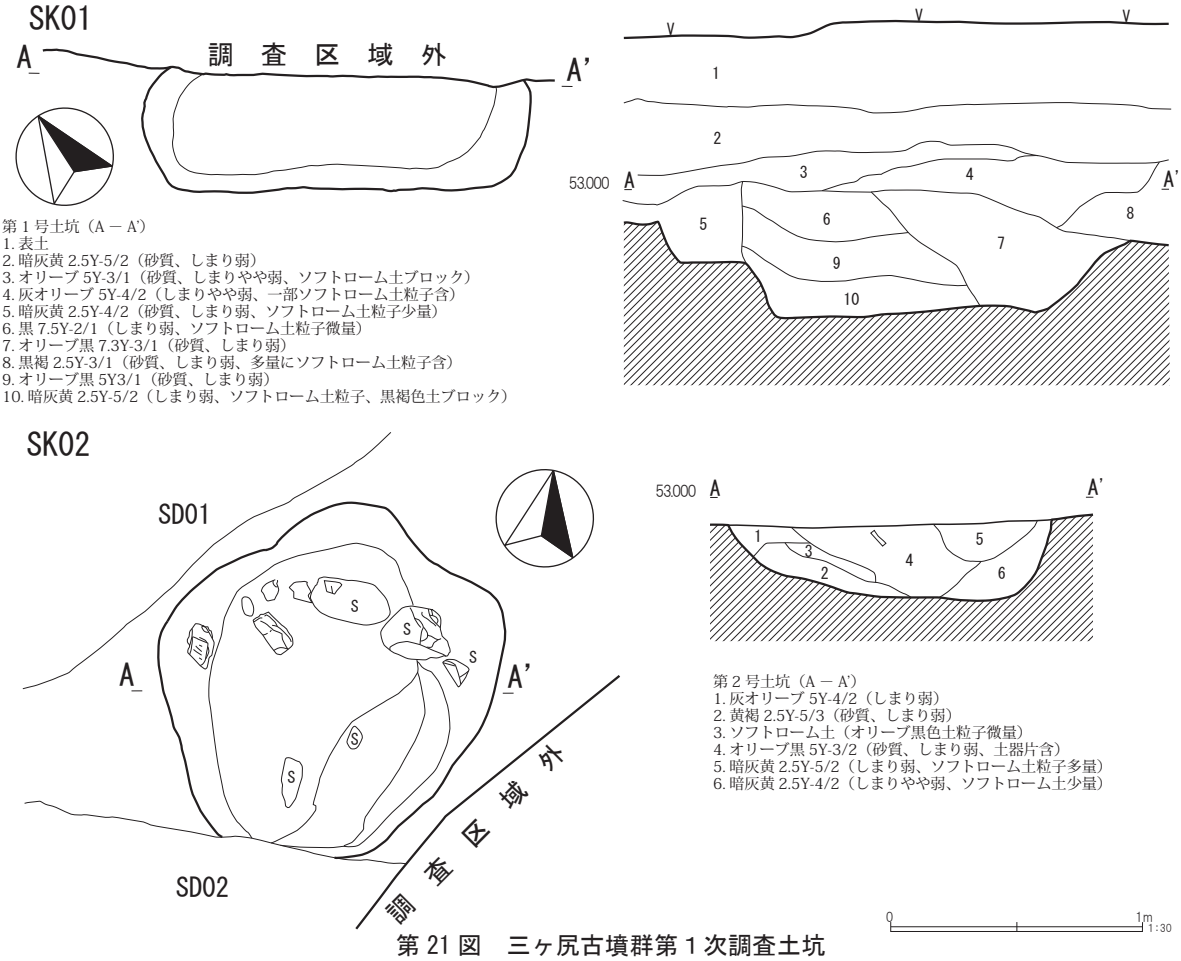
第１号土坑（第 21 図）

Ｄ－２グリッドから検出した。重複する遺構は確認されていない。

平面形は、一部が調査区域外であるが、東西に長い方形を呈するものと推定される。

規模は、長軸が 1.50 ｍ、検出短軸 0.44 ｍを測り、深さは 34 ㎝を測る。

埋土は、断面観察から少なくとも１回は掘り直されたと考えられる。



第１号土坑（A － A'）
1. 表土
2. 暗灰黄 2.5Y-5/2（砂質、しまり弱）
3. オリーブ 5Y-3/1（砂質、しまりやや弱、ソフトローム土ブロック）
4. 灰オリーブ 5Y-4/2（しまりやや弱、一部ソフトローム土粒子含）
5. 暗灰黄 2.5Y-4/2（砂質、しまり弱、ソフトローム土粒子少量）
6. 黒 7.5Y-2/1（しまり弱、ソフトローム土粒子微量）
7. オリーブ黒 7.3Y-3/1（砂質、しまり弱）
8. 黒褐 2.5Y-3/1（砂質、しまり弱、多量にソフトローム土粒子含）
9. オリーブ黒 5Y3/1（砂質、しまり弱）
10. 暗灰黄 2.5Y-5/2（しまり弱、ソフトローム土粒子、黒褐色土ブロック）

第２号土坑（A － A'）
1. 灰オリーブ 5Y-4/2（しまり弱）
2. 黄褐 2.5Y-5/3（砂質、しまり弱）
3. ソフトローム土（オリーブ黒色土粒子微量）
4. オリーブ黒 5Y-3/2（砂質、しまり弱、土器片含）
5. 暗灰黄 2.5Y-5/2（しまり弱、ソフトローム土粒子多量）
6. 暗灰黄 2.5Y-4/2（しまりやや弱、ソフトローム土少量）

第 21 図　三ヶ尻古墳群第１次調査土坑

その用途は、不明である。

出土遺物は検出されなかった。

時期は、不明である。

第２号土坑（第 21・22 図）

Ｃ－３グリッドから検出した。第２号溝跡と重複し、一部を第２号溝跡に切られている。

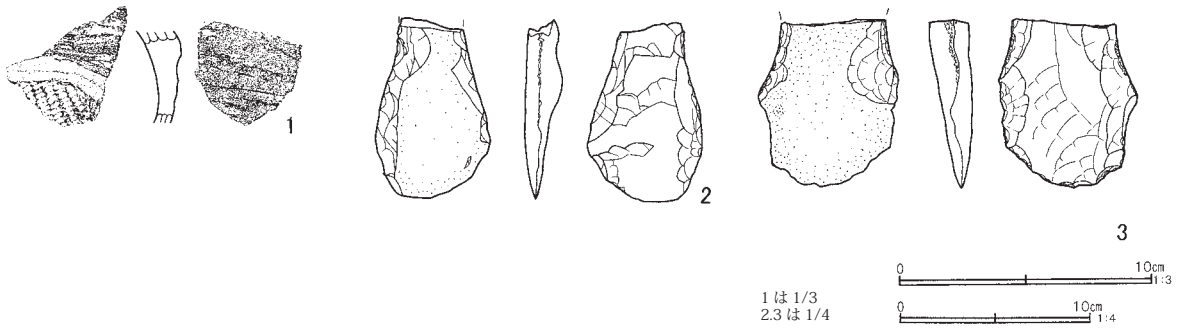
平面プランは、不整形な楕円形を呈するものである。底面は起伏が目立つ。

規模は、長軸 1.3 ｍ、短軸 1.2 ｍを測り、深さは 31 ㎝を測る。

埋土は、レンズ状に堆積していることから自然堆積にであると推定される。

出土遺物は、縄文土器の破片や打製石斧の他、川原石も検出されている。

時期は、縄文時代中期と考えられる。



第 22 図　三ヶ尻古墳群第１次調査第２号土坑出土遺物

第７表　三ヶ尻古墳群第１次調査第２号土坑出土遺物観察表（第 22 図）

Ｎｏ	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
1	縄文土器	-	-	-	-	-	B	破片	ヘラ描沈線文で区画をし、その中に RL 単節縄文を施す	
2	打製石斧	最大長 (9.5)	最大幅 5.1	最大厚 1.8	重さ 110.5 ｇ				側面に使用痕	砂岩
3	打製石斧	最大長 8.8	最大幅 7.4	最大厚 2.1	重さ 153.6 ｇ				側面に使用痕	砂岩

４　遺構と遺物（第２次調査）

⑴　住居跡

第１号住居跡（第 23・24 図）

本調査区の南西に位置し、Ｂ－６グリッドから検出した。第１号溝跡、第 20 ～ 24 号ピットと重複しており、それらすべてに切られていた。

平面形は、一部が調査区域外であるが、円形を呈すると推定される。

規模は、検出長軸 3.44 ｍ、短軸 1.96 ｍで、深さは 52 ㎝を測る。

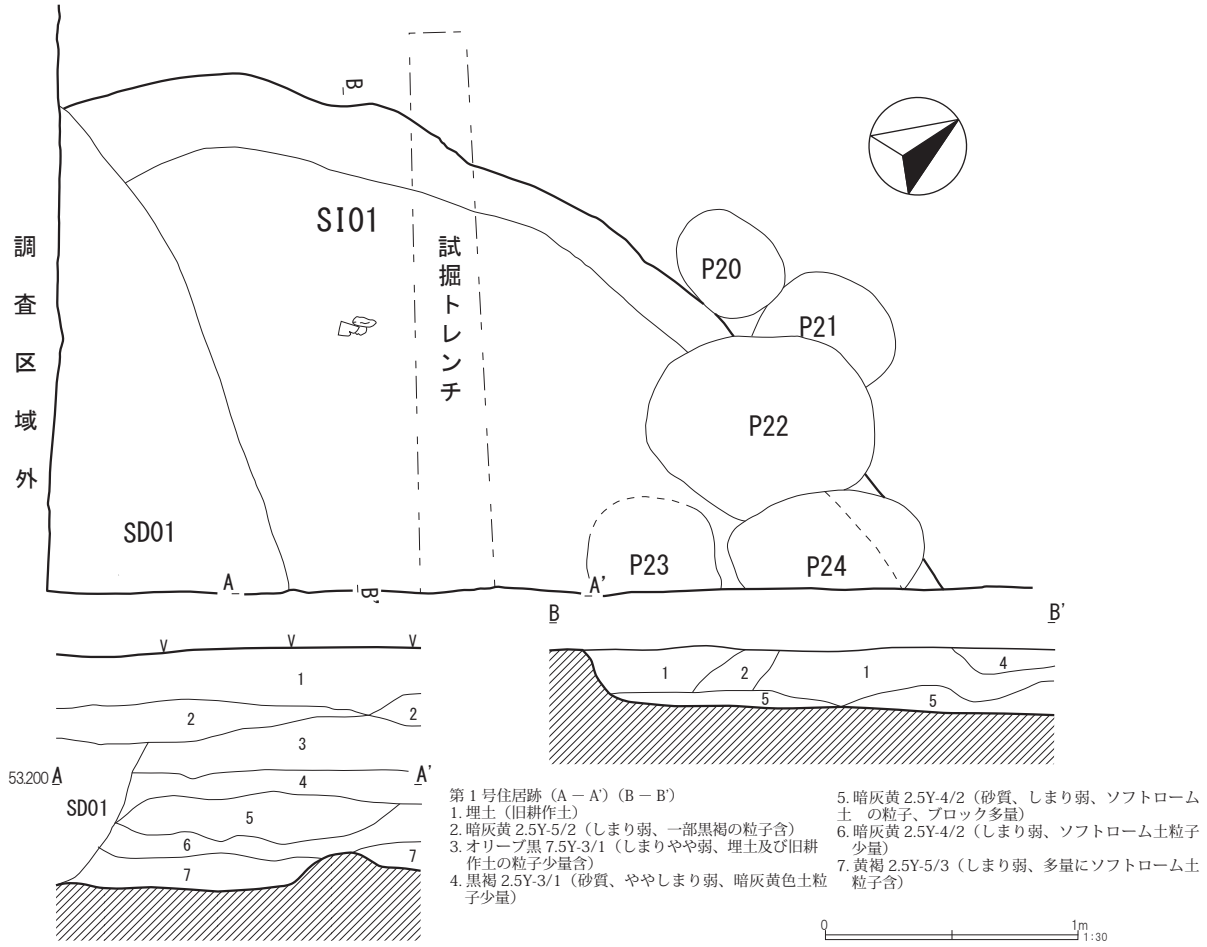
埋土は、ややランダムに堆積していることから、人工的に埋め戻された可能性が考えられる。

床面は、わずかな起伏のみでほぼ平坦であるが、東側の立ち上がりに向かうにつれやや段差をもつ。

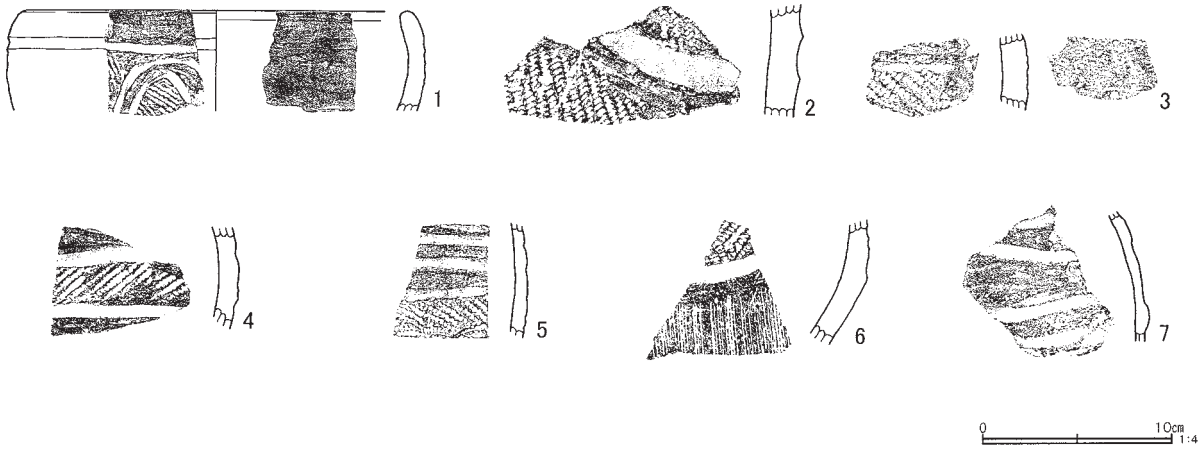
炉跡や柱穴などの施設は、検出されなかった。

出土遺物は、主に縄文土器の深鉢であり、出土量もわずかであった。

時期は、縄文時代中期（加曾利Ｅ式期）であると考えられる。



第 23 図　三ヶ尻古墳群第２次調査第１号住居跡



第 24 図　三ヶ尻古墳群第２次調査第１号住居跡出土遺物

第８表　三ヶ尻古墳群第２次調査第１号住居跡出土遺物観察表（第 24 図）

No	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
1	縄文土器 深鉢	(20.6)	(5.3)	-	-	-	B	口縁部 10%	外面：区画のためのヘラ描沈線 その下に LR 単節縄文を施し、区画のための円文を沈線で施す（２条） 内面：横ナデ調整	
2	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	胴部破片	外面 .：LR 単節縄文 区画円文としてヘラ描による沈線を施す	
3	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	破片	外面：LR 単節縄文	

Ｎｏ	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
4	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	破片	外面．：区画のためのヘラ描による平行沈線を施し、内部に RL 単節縄文	
5	縄文土器	-	-	-	-	-	B	破片	外面：３条のヘラ描平行沈線を施し、LR 単節縄文	
6	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	破片	外面：ヘラ描沈線による円形区画文を施し、内部に RL 単節縄文 下部は９本１節のハケ目調整痕	
7	縄文土器	-	-	-	-	-	B	破片	ヘラ描による沈線文数条	

⑵　古墳

第 64 号墳（第 25・26 図）

本調査区の北西に位置しており、Ｂ－４・５グリッドから検出した。他の遺構と重複関係はないが、攪乱を受けていた一部に位置する。

墳丘は、調査区域外に位置すると推定され、調査区北西方向にあったものと推定される。また、今回の調査では、第１次調査でも周溝の一部が検出されており、南側の周溝が連続しないものと考えられる。

正確には不明であるが、検出された箇所から判断し、周溝の推定径は 17 ～ 18 ｍ前後であろう。

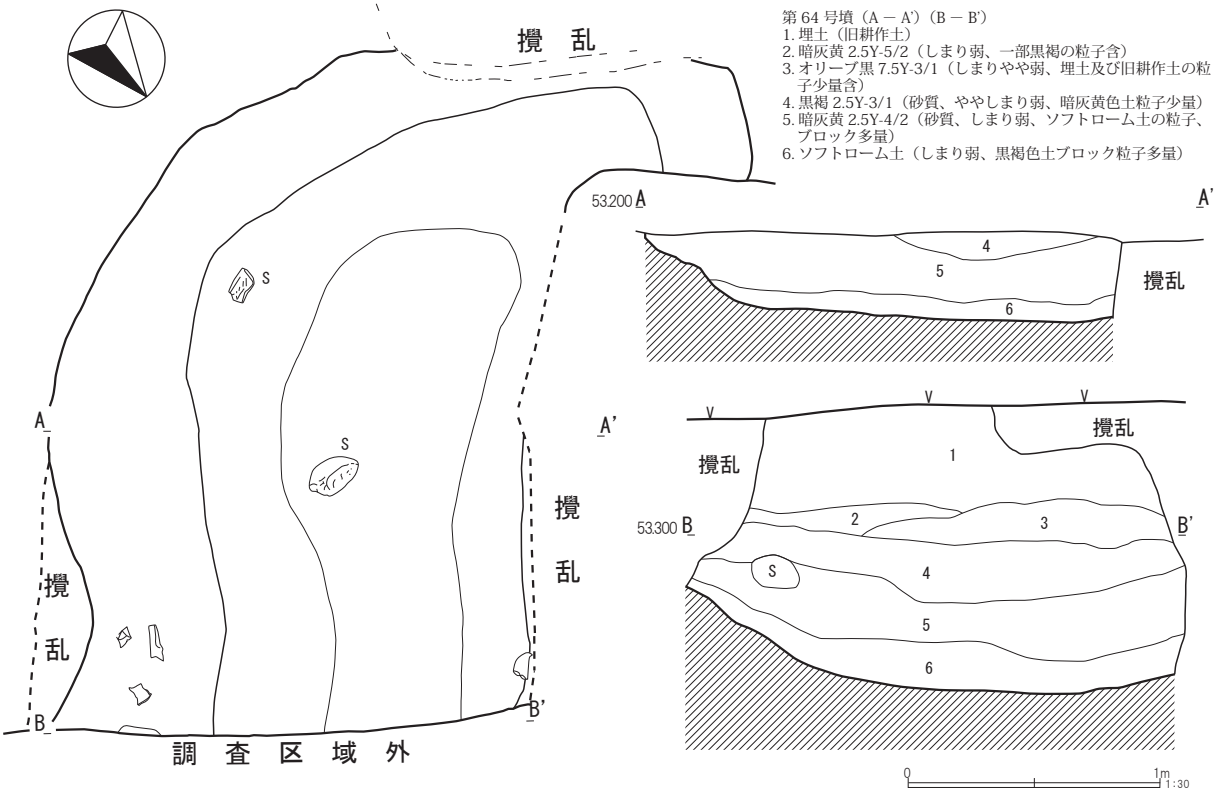
規模は、検出長 2.76 ｍ、幅 1.8 ｍを測り、確認面からの深さは 32 ㎝を測る。

周囲が攪乱されているため、残存状態が悪いが、周溝外側の立ち上がりは緩やかな傾斜であり、底面はほぼ平坦である。

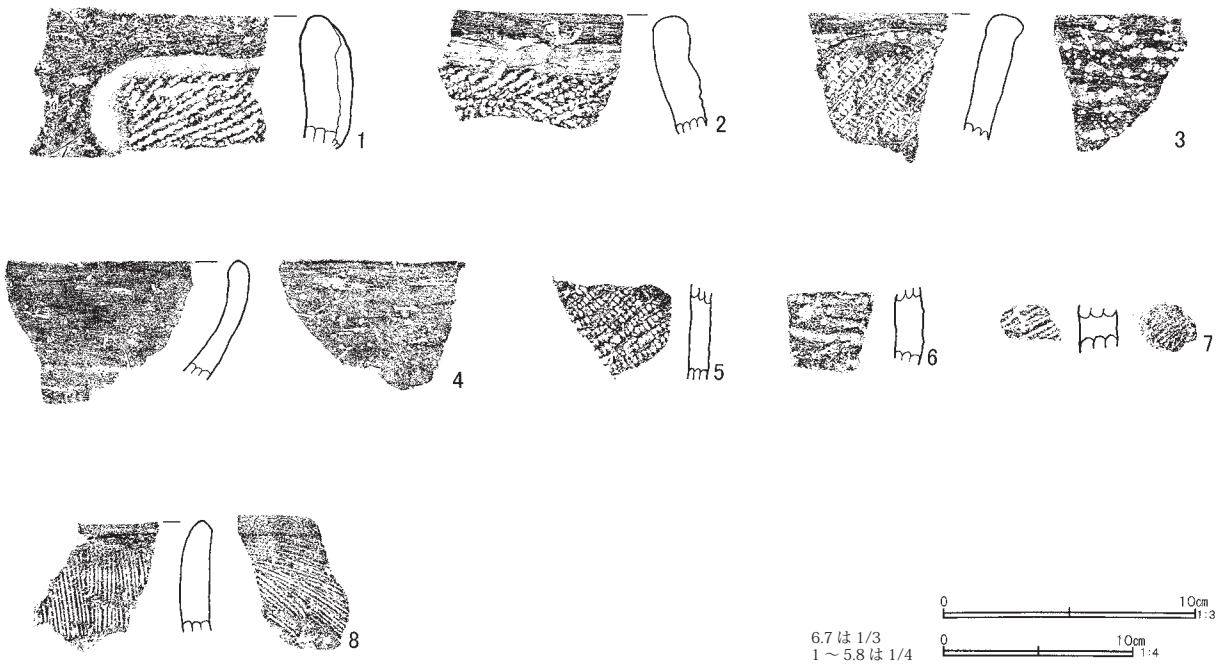
埋土は、断面観察から黒褐色土にソフトロームの粒子、ブロックを含んでいる土層がみられ、レンズ状堆積していることから、墳丘の崩落により埋没したと推定される。

出土遺物は、図示できない細かい円筒埴輪片が主体で、それ以外は加曾利Ｅ式の縄文土器が大半を占めていた。なお、縄文土器は他からの流れ込みと考えられる。

時期は、検出した円筒埴輪から古墳時代後期に帰属すると考えられる。



第 25 図　三ヶ尻古墳群第２次調査第 64 号墳



第 26 図　三ヶ尻古墳群第２次調査第 64 号墳出土遺物

第９表　三ヶ尻古墳群第２次調査第 64 号墳出土遺物観察表（第 26 図）

No	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
1	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	口縁部破片	外面：区画隆帯をそなえ、内部にＲＬ単節縄文	
2	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	口縁部破片	外面：区画のためのヘラ描沈線 内部にＲＬ単節縄文	
3	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	口縁部破片	外面：ＲＬ単節縄文 縄文痕わきに区画の櫛描沈線を施す	
4	縄文土器 深鉢？	-	-	-	-	-	B	破片	波状口縁か？ 内外ともにナデ調整	
5	縄文土器 深鉢？	-	-	-	-	-	B	破片	外面：RL 単節縄文	
6	縄文土器 深鉢？	-	-	-	-	-	B	破片	ヘラ描による沈線	
7	縄文土器 深鉢？	-	-	-	-	-	B	破片	外面：ハケ目痕	
8	円筒埴輪	-	-	-	ADHN	にぶい赤褐 5YR-5/4	B	口縁部破片	外面：縦位ハケ目痕 内面：斜位ハケ目痕	ハケ目 ８本 /cm

⑶　溝跡

第１号溝跡（第 27・28 図）

本調査区の南西に位置し、Ｂ－６グリッドから検出した。第１号住居跡と重複関係にあり、第１号住居跡を切っている。

大部分が調査区域外に位置するため、詳細は不明である。

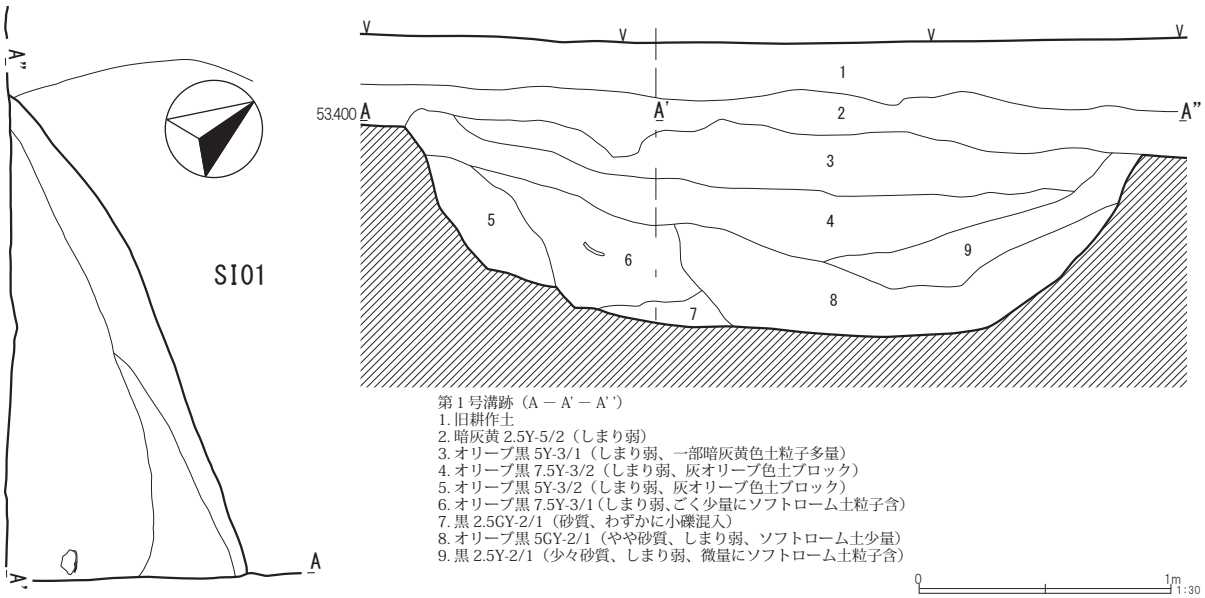
規模は、検出長 2.4 ｍ、検出幅 0.84 ｍを測り、深さは遺構確認面から 55 ㎝を測る。

その用途は、不明である。

埋土は、レンズ状に堆積していることから、自然堆積であると推定される。

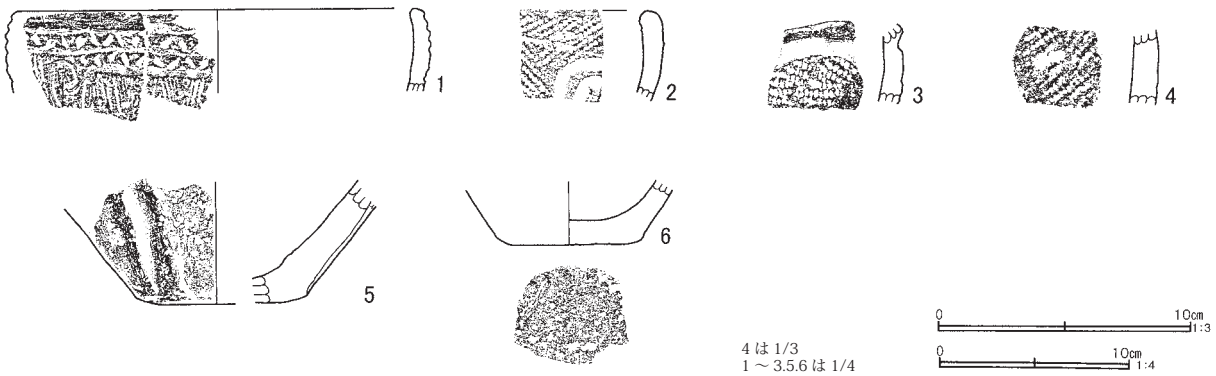
出土遺物は、いずれも縄文土器の深鉢である。

時期は、縄文時代中期（加曾利Ｅ式期）と考えられる。



第 1 号溝跡（A － A' － A''）
1. 旧耕作土
2. 暗灰黄 2.5Y-5/2（しまり弱）
3. オリーブ黒 5Y-3/1（しまり弱、一部暗灰黄色土粒子多量）
4. オリーブ黒 7.5Y-3/2（しまり弱、灰オリーブ色土ブロック）
5. オリーブ黒 5Y-3/2（しまり弱、灰オリーブ色土ブロック）
6. オリーブ黒 7.5Y-3/1（しまり弱、ごく少量にソフトローム土粒子含）
7. 黒 2.5GY-2/1（砂質、わずかに小礫混入）
8. オリーブ黒 5GY-2/1（やや砂質、しまり弱、ソフトローム土少量）
9. 黒 2.5Y-2/1（少々砂質、しまり弱、微量にソフトローム土粒子含）

第 27 図　三ヶ尻古墳群第２次調査第１号溝跡



4 は 1/3
1 ～ 3.5.6 は 1/4

第 28 図　三ヶ尻古墳群第２次調査第１号溝跡出土遺物

第 10 表　三ヶ尻古墳群第２次調査第１号溝跡出土遺物観察表（第 28 図）

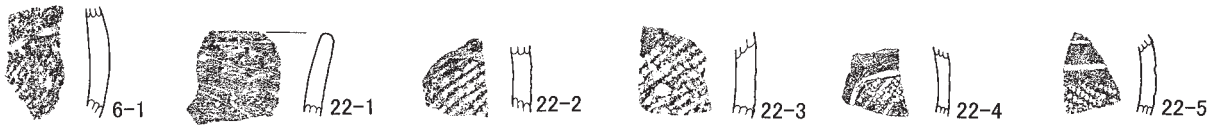
No	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
1	縄文土器 深鉢	(21.4)	(4.4)	-	-	-	B	口縁部 10%	外面：上部ヘラ描による沈線の区画線を施し、その内に左右向きを変えた刺突文列を２段 下部には渦巻文と沈線で区画した内部に条痕を施す	
2	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	口縁部破片	外面：RL 単節縄文 弧を描く２条のヘラ描沈線文	
3	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	胴部破片	外面：ヘラ描による沈線円文内に LR 単節縄文を施す	
4	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	破片	外面：RL 単節縄文を施す	
5	縄文土器 深鉢	-	(6.5)	(6.5)	-	-	B	底部～胴部 20%	外面：突帯を貼りつけた後ヘラ描による沈線を描く 底部やや丸み	
6	縄文土器 深鉢	-	(3.4)	(7.0)	-	-	B	底部 50%	外面：指ナデ調整痕	

⑷　ピット

ピットは、総数にして 24 基検出された。遺物が検出されたのはわずか２基のみであり、出土遺物に乏しく、いずれのピットも時期を特定するに至らなかった。以下、一覧表にて掲載する。

第 11 表　三ヶ尻古墳群第２次調査ピット一覧表（第 30・31 図）

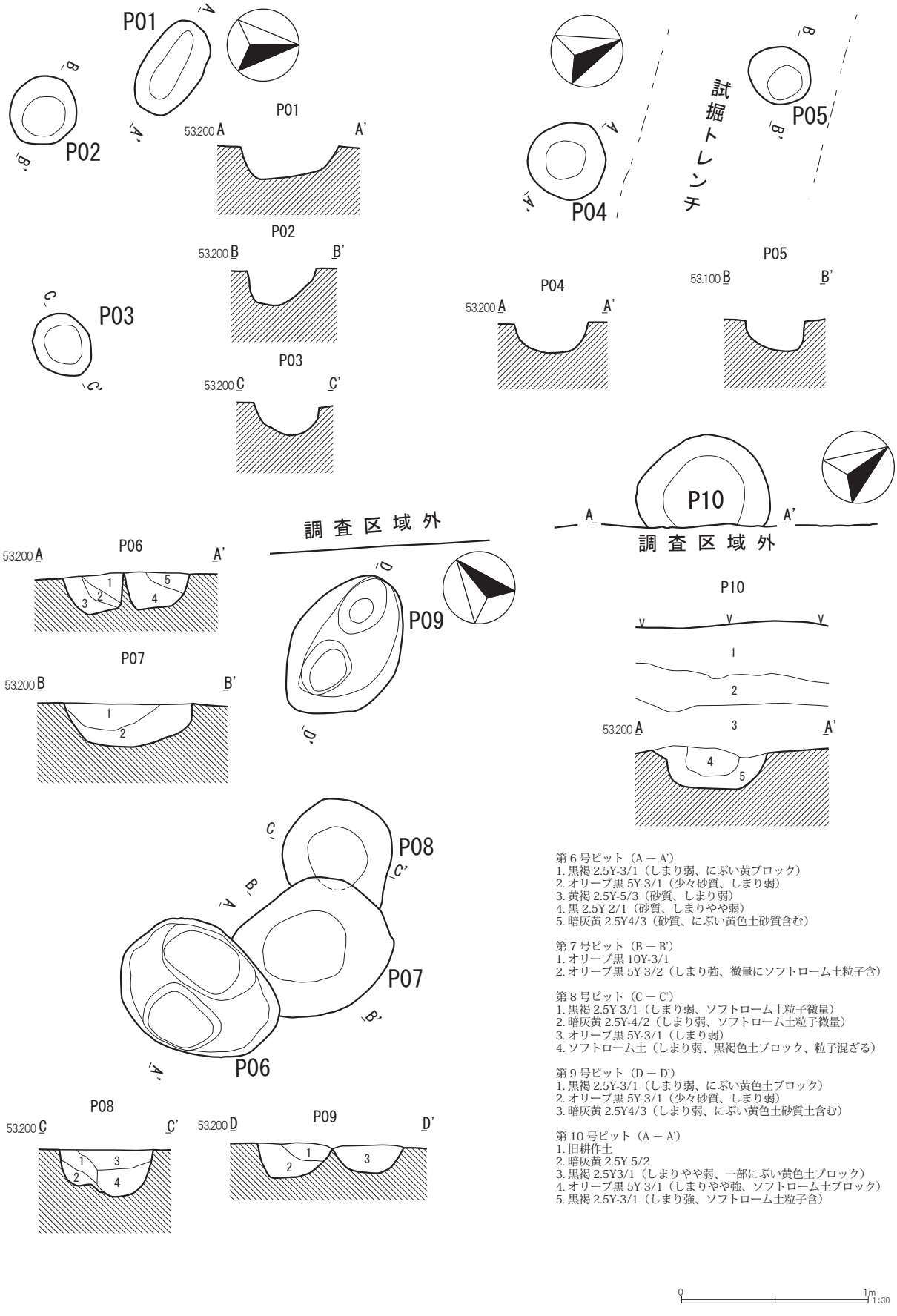
No.	位置	平面形状	長軸×短軸×深さ (m)	出土遺物	重複関係	備考
1	A-6	楕円形	0.52 × 0.32 × 0.16			
2	A-6	円形	0.34 × 0.28 × 0.18			
3	B-6	楕円形	0.35 × 0.31 × 0.15			
4	A-5	円形	0.41 × 0.43 × 0.15			
5	A-5	円形	0.35 × 0.31 × 0.16			
6	B-5	楕円形	0.90 × 0.69 × 0.19	縄文土器	P7	
7	B-5	楕円形	0.68 × 0.68 × 0.28		P6、P8	
8	B・C-5	楕円形	0.58 × 0.43 × 0.24		P7	
9	C-5	楕円形	0.82 × 0.55 × 0.18			
10	C-5	隅丸方形	0.70 × 0.48 × 0.22			
11	B-6	円形	0.25 × 0.24 × 0.12			
12	B-5	楕円形	0.36 × 0.35 × 0.33			
13	B-5	隅丸方形	0.40 × 0.39 × 0.18		P14	
14	B-5・6	隅丸方形	0.61 × 0.43 × 0.41		P13	
15	B-5	楕円形	0.73 × 0.60 × 0.30			
16	B-6	楕円形	0.30 × 0.24 × 0.20		P18	
17	B-5・6	楕円形	0.31 × 0.23 × 0.15			
18	B-6	円形	0.30 × 0.28 × 0.28		P16	
19	B-6	楕円形	0.48 × 0.40 × 0.34			
20	B-6	隅丸方形	0.44 × 0.35 × 0.25		SI01、P21	
21	B-6	（楕円形）	(0.50) × (0.25) × 0.20		SI01、P20、22	
22	B-6	楕円形	0.88 × 0.72 × 0.42	縄文土器	SI01、P21、24	
23	B-6	（隅丸方形）	0.48 × (0.36) × 0.26		SI01	
24	B-6	（楕円形）	0.77 × (0.39) × 0.23		SI01、P22	



第 29 図　三ヶ尻古墳群第２次調査ピット出土遺物

第 12 表　三ヶ尻古墳群第２次調査ピット出土遺物観察表（第 29 図）

出土遺構	No	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
P6	6-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	破片	全体的に摩耗著しい RL 単節縄文痕か？	
P22	22-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	口縁破片		
P22	22-2	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	破片	摩耗著しい RL 単節縄文か？	
P22	22-3	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	破片	摩耗著しい RL 単節縄文痕か？	
P22	22-4	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	破片	外面：区画によるヘラ描沈線文を施し、内部にＲＬ単節縄文をする	
P22	22-5	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	破片	外面：平行沈線によるヘラ描 下部にＬＲ単節縄文痕	



第６号ピット（A － A'）
1. 黒褐 2.5Y-3/1（しまり弱、にぶい黄ブロック）
2. オリーブ黒 5Y-3/1（少々砂質、しまり弱）
3. 黄褐 2.5Y-5/3（砂質、しまり弱）
4. 黒 2.5Y-2/1（砂質、しまりやや弱）
5. 暗灰黄 2.5Y4/3（砂質、にぶい黄色土砂質含む）

第７号ピット（B － B'）
1. オリーブ黒 10Y-3/1
2. オリーブ黒 5Y-3/2（しまり強、微量にソフトローム土粒子含）

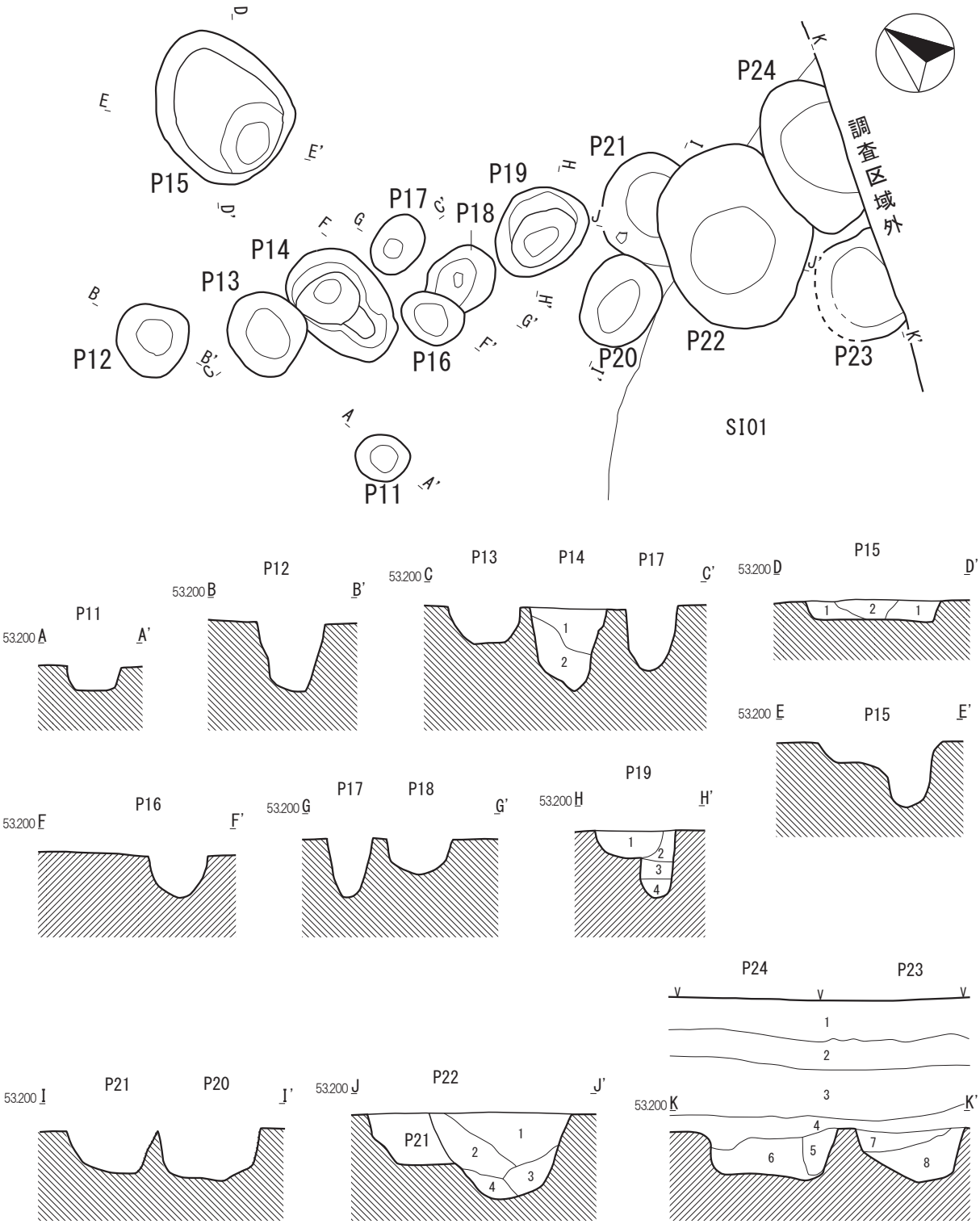
第８号ピット（C － C'）
1. 黒褐 2.5Y-3/1（しまり弱、ソフトローム土粒子微量）
2. 暗灰黄 2.5Y-4/2（しまり弱、ソフトローム土粒子微量）
3. オリーブ黒 5Y-3/1（しまり弱）
4. ソフトローム土（しまり弱、黒褐色土ブロック、粒子混ざる）

第９号ピット（D － D'）
1. 黒褐 2.5Y-3/1（しまり弱、にぶい黄色土ブロック）
2. オリーブ黒 5Y-3/1（少々砂質、しまり弱）
3. 暗灰黄 2.5Y4/3（しまり弱、にぶい黄色土砂質土含む）

第 10 号ピット（A － A'）
1. 旧耕作土
2. 暗灰黄 2.5Y-5/2
3. 黒褐 2.5Y3/1（しまりやや弱、一部にぶい黄色土ブロック）
4. オリーブ黒 5Y-3/1（しまりやや強、ソフトローム土ブロック）
5. 黒褐 2.5Y-3/1（しまり強、ソフトローム土粒子含）

0 1m 1:30

第 30 図　三ヶ尻古墳群第２次調査ピット（第１～ 10 号）



第 14 号ピット（C － C'）
1. 黒褐 2.5Y-3/1（しまりやや弱、小礫が少量混ざる）
2. 暗灰黄 2.5Y-5/2（しまり弱、ソフトローム土粒子少量）

第 15 号ピット（D － D'）
1. 暗灰黄 2.5Y-4/2（砂質、しまりやや弱、微量にソフトローム土粒子少量）
2. 黒褐 2.5Y-3/1（砂質、しまりやや弱、一部に 1 の粒子多量、ソフトローム土多量）

第 19 号ピット（H － H'）
1. 暗灰黄 2.5Y-4/2（しまりやや弱、ソフトローム土粒子多量）
2. オリーブ黒 5Y-3/1（しまり弱）
3. 灰オリーブ 5Y-5/2（しまりやや強、オリーブ色土ブロック）
4. 黒褐 2.5Y-2/1（砂質、しまりやや弱、少量ソフトローム土粒子含）

第 22 号ピット（J － J'）
1. 暗灰黄 2.5Y-4/2（砂質、しまりやや弱、微量にソフトローム土粒子少量）
2. 黒褐 2.5Y-3/1（砂質、しまりやや弱、一部に 1 の粒子多量、ソフトローム土多量）
3. 暗灰黄 2.5Y-5/2（しまり弱、ソフトローム土粒子少量）
4. 黒褐 2.5Y-3/1（砂質、しまりやや弱）

第 23、24 号ピット（K － K'）
1. 旧耕作土
2. 暗灰黄 2.5Y-5/2
3. 黒褐 2.5Y3/1（しまり弱、一部にぶい黄色土ブロック）
4. 黒褐 2.5Y-3/1（しまりやや弱、ソフトローム土粒子多量）
5. オリーブ黒 7.5Y-3/1（しまりやや弱、にぶい黄色土粒子含）
6. 黒 2.5Y-2/1（しまり弱、微量にソフトローム土粒子含）
7. オリーブ黒 10Y-3/1（しまり弱）
8. オリーブ黒 5Y-3/2（微量にソフトローム土粒子含）

0　1m
1:30

第 31 図　三ヶ尻古墳群第２次調査ピット（第 11 ～ 24 号）

⑸　遺構外出土遺物（第１・２次調査）

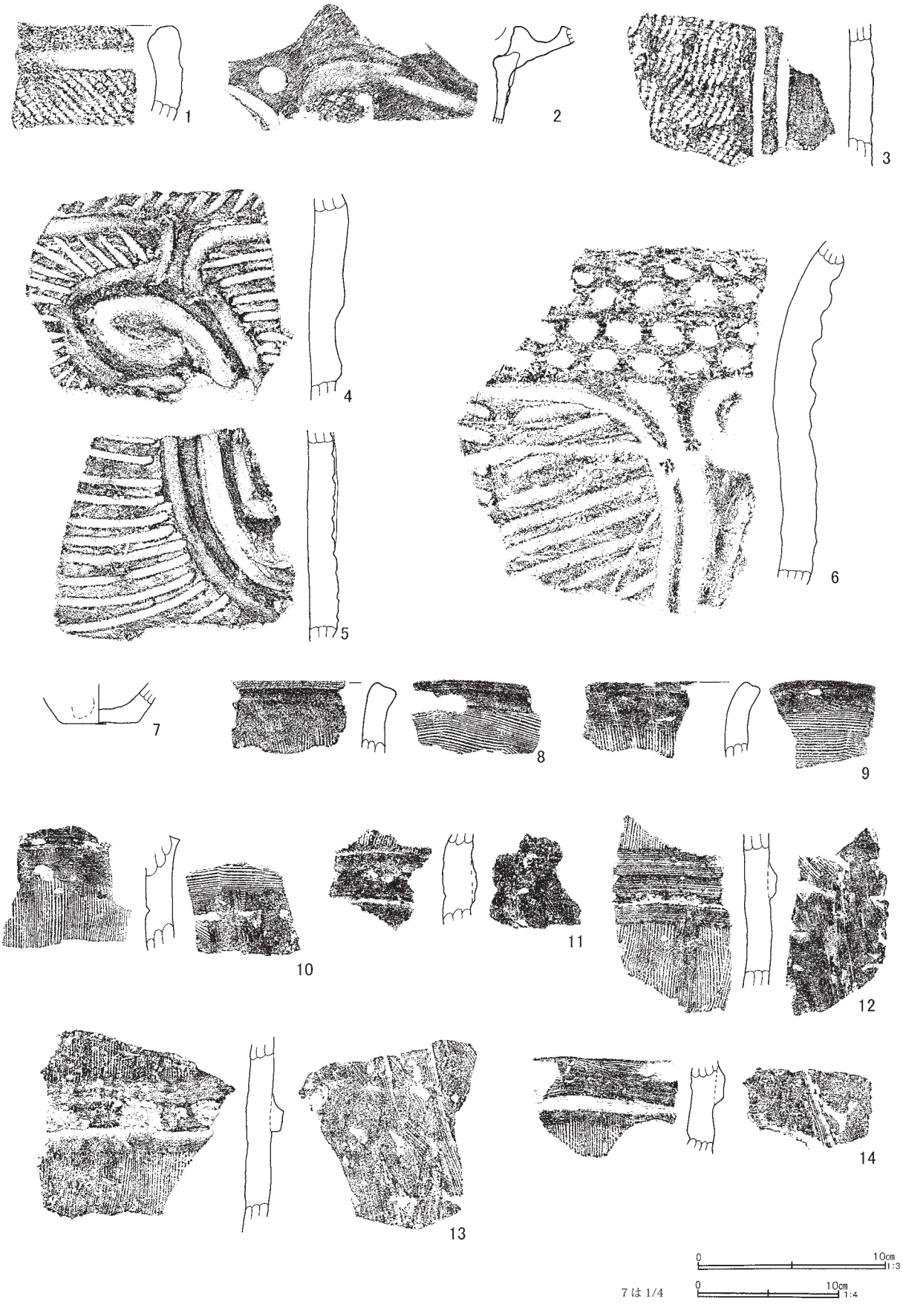
遺構外から出土した遺物は、主に表土剥ぎの際に出土した遺物である。特に、攪乱箇所からの出土が多かった。以下、第１次調査、第２次調査の順に掲載する。

第 13 表　三ヶ尻古墳群第１次調査遺構外出土遺物観察表（第 32・33 図）

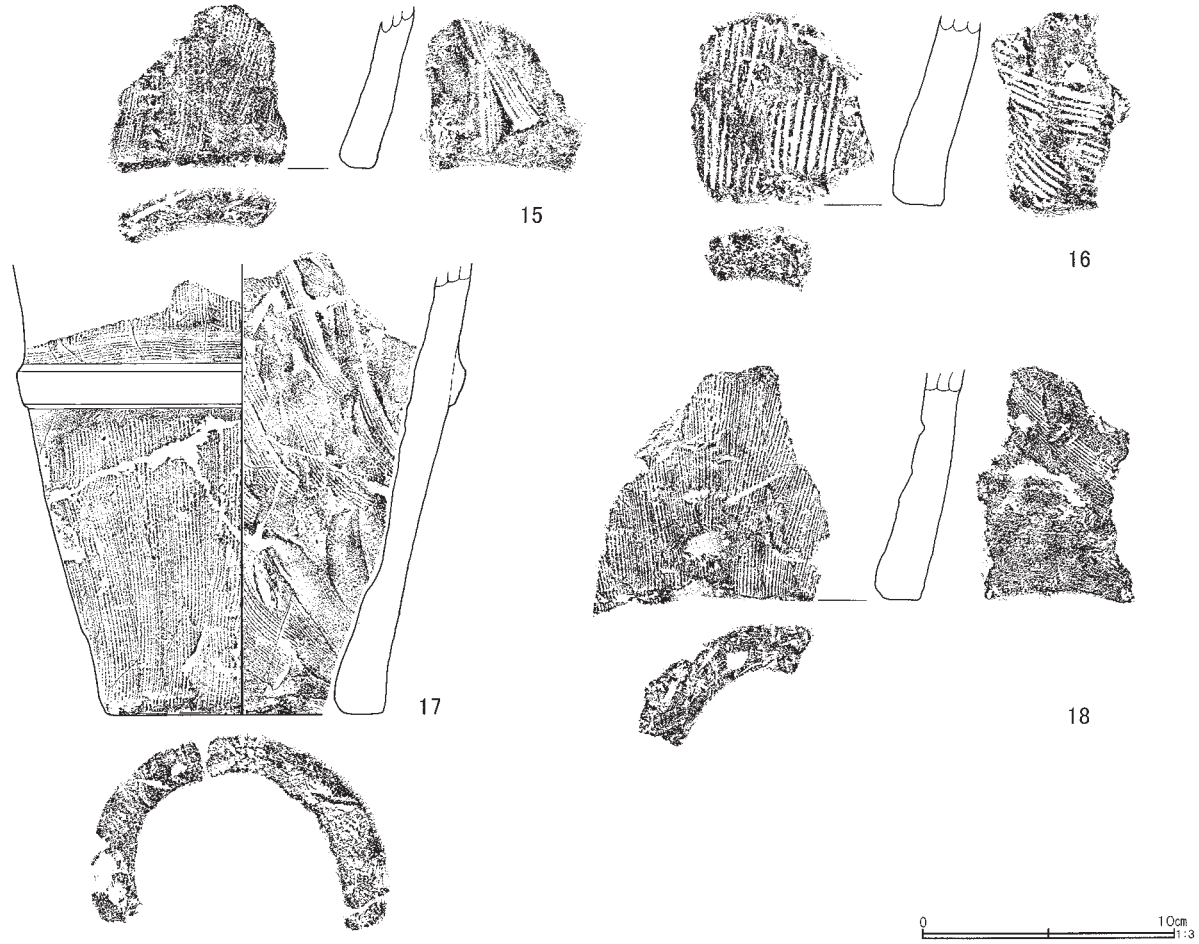
No	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
1	縄文土器 深鉢？	-	-	-	-	-	B	口縁部破片	横位ナデ状沈線文 その直下に RL 単節縄文を施す	
2	縄文土器	-	-	-	-	-	B	口縁部破片	波状口縁 口縁舌部ナデによる沈線を施し、先端部で渦巻状になる 外面はヘラ描沈線文で区画し、その内部に LR 単節縄文を施す 工具によるくぼみ	
3	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	胴部破片	LR 単節縄文を施した後に、縦位平行沈線文を施文する	
4	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	破片	隆帯をそなえ、渦巻文を施す。その周囲に斜位、横位でヘラ状工具で羽状沈線を施す	
5	縄文土器 深鉢？	-	-	-	-	-	B	胴部破片	隆帯をそなえ、三重の区画のためのヘラ描沈線文を施す。その外側にはくし描羽状文を施す	
6	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	口縁　破片	上部、同一工具による刺突列点文４段 ヘラ描沈線文で区画し、内部に斜位の沈線文を施す	
7	縄文土器 深鉢	-	(2.8)	(5.4)	-	-	B	底部 50%	-	
8	円筒埴輪	-	-	-	ABCJ	明赤褐 5YR-5/8	B	口縁部破片	口舌部：溝状にくぼみ 外面：縦位ハケ目 内面：斜、横位ハケ目	ハケ目 8 本 /cm
9	円筒埴輪	-	-	-	ABCI	明赤褐 2.5YR-5/6	B	口縁部破片	口舌部：溝状にくぼみ 外面：縦位ハケ目 内面：横位ハケ目	ハケ目 10 本 /cm
10	円筒埴輪	-	-	-	ABCI	橙 5YR-6/8	B	口縁部破片	外面：縦位ハケ目痕 内面：横位ハケ目痕 粘土紐積上げ痕	ハケ目 8 本 /cm
11	円筒埴輪	-	-	-	ABCJ	橙 5YR-6/8	B	突帯部破片	外面：縦位ハケ目 内面：斜位ハケ目 突帯部断面台形を呈する	ハケ目 - 本 /cm
12	円筒埴輪	-	-	-	ABCKN	明赤褐 2.5YR-5/8	B	胴部破片	外面：縦位ハケ目 内面：縦・斜位ハケ目 粘土紐積上げ痕 突帯部断面台形を呈する	ハケ目 9 本 /cm
13	円筒埴輪	-	-	-	ABCKN	橙 5YR-6/8	B	胴部破片	外面：縦位ハケ目 内面：斜位ハケ目 粘土紐積上げ痕 突帯部断面台形を呈する	ハケ目 9 本 /cm
14	円筒埴輪	-	-	-	ABEJN	橙 2.5YR-6/8	B	胴部破片	外面：縦位ハケ目 内面：斜位ハケ目 突帯部断面台形を呈する	ハケ目 9 本 /cm
15	円筒埴輪	-	-	-	ABDHN	橙 7.5YR-7/6	B	底部破片	外面：ハケ目痕 内面：斜位ハケ目 底部に工具による沈線	ハケ目 7 本 /cm
16	円筒埴輪	-	-	-	ABDKN	にぶい橙 5YR-7/4	B	底部破片	外面：縦位ハケ目 内面：横位ハケ目 ハケ目痕他と異なる→古式か？	ハケ目 4 本 /cm
17	円筒埴輪	-	(17.8)	(11.0)	ABDHKN	明赤褐 2.5YR-5/6	B	底部 60%	外面：縦位ハケ目 内面：縦、斜位ハケ目、底部端面取りのためのナデ調整 突帯部断面台形を呈する	ハケ目 8 本 /cm
18	円筒埴輪	-	-	-	AIJN	明赤褐 5YR-5/8	B	底部破片	外面：縦位ハケ目 内面：斜位ハケ目 粘土紐積上げ痕	ハケ目 9 本 /cm

第 14 表　三ヶ尻古墳群第２次調査遺構外出土遺物観察表⑴（第 34 図）

No	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
1	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	破片	口縁部外面：指頭による長方形の区画沈線文、内に LR 単節縄文	
2	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	口縁部破片	円形区画文 円文内に LR 単節縄文	
3	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	破片	波状口縁舌部ナデによるミガキ、工具によるくぼみ ヘラ描による沈線の下に L R 単節縄文	
4	縄文土器	-	-	-	-	-	B	口縁破片	口縁部に突帯 下部に RL 単節縄文	
5	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	破片	円形区画文 突帯円文内に LR 単節縄文を施す	
6	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	胴部破片	突帯を貼りつけ、下部に 4 本 1 節の櫛描文を施す	
7	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	胴部破片	区画のための沈線 内部に LR 単節縄文を施す	



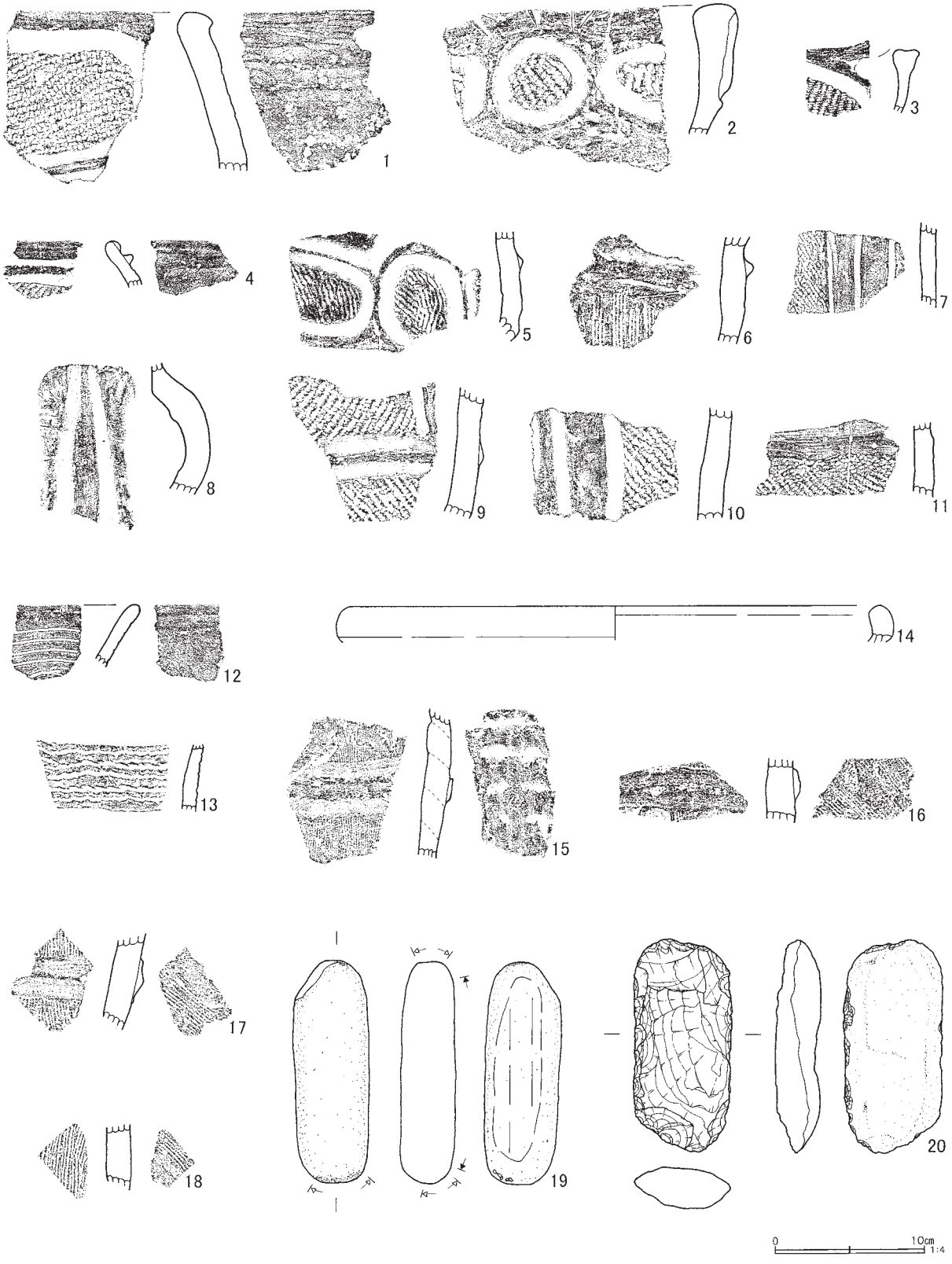
第 32 図　三ヶ尻古墳群第 1 次調査遺構外出土遺物(1)



第 33 図　三ヶ尻古墳群第 1 次調査遺構外出土遺物(2)

第 15 表　三ヶ尻古墳群第 2 次調査遺構外出土遺物観察表(2)（第 34 図）

No	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
8	縄文土器 深鉢？	-	-	-	-	-	B	破片	両耳壷の取手か？	
9	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	胴部破片	中央に区画突帯をそなえ、上部は RL 単節縄文に縦位沈線 下部は LR 単節縄文	
10	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	破片	区画のための沈線 内部に LR 単節縄文を施す	
11	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	破片	上部：区画のための横ナデ 下部：LR 単節縄文	
12	縄文土器 深鉢	-	-	-	-	-	B	口縁部破片	櫛描による平行沈線（４条）	
13	縄文土器	-	-	-	-	-	B	破片	櫛描による波状平行文（５条）	
14	土師器 壷	(36.0)	(2.4)	-	ABCJ	橙 5YR-6/6	B	口縁部破片	段口縁か？ 外面：横ナデ調整	
15	円筒埴輪	-	-	-	ＡＢＪ	明赤褐５ＹＲ -5/8	B	胴部破片	外面：縦位ハケ目調整後、断面台形の突帯を貼りつける 内面：粘土紐積上げ痕	ハケ目 10 本 /cm
16	円筒埴輪	-	-	-	ＡＢ IN	橙 5YR-6/6	B	破片	外面：縦位ハケ目調整後、突帯貼りつけ、横ナデ	ハケ目 - 本 /cm
17	円筒埴輪	-	-	-	ＡＢＤＮ	橙 5YR-5/6	B	胴部破片	外面：縦位ハケ目調整後、やや断面が三角の突帯貼付 内面：斜位ハケ目調整	ハケ目 ９本 /cm
18	円筒埴輪	-	-	-	ABCKN	明赤褐５ＹＲ -5/8	B	胴部破片	外面：縦位ハケ目調整痕 内面：斜位ハケ目調整	ハケ目 ９本 /cm
19	磨石	最大長　15.0　最大幅　5.2　最大厚　3.9　重さ　543 g							上部：一部敲打痕 下部：敲打痕	凝灰岩
20	打製石斧	最大長　14.5　最大幅　6.6　最大厚　3.0　重さ　385 g								チャート



第 34 図　三ヶ尻古墳群第２次調査遺構外出土遺物

5 調査のまとめ

三ヶ尻古墳群は、三ヶ尻地区の櫛挽台地上に分布する古墳群で、かつては 100 基以上の古墳が築造されていたと推定されている。今回報告分を含め、これまでに 64 基が確認されているが、削平を受けた古墳や、消滅した古墳も多数ある。

本調査によって、三ヶ尻古墳群において、新たに第 63 号墳、64 号墳を確認することができたことは、三ヶ尻古墳群を考える上で貴重な発見となった。

墳丘は、いずれにおいても検出されていないが、周辺で確認されているものと同様に円墳と推定され、検出された埴輪から古墳時代後期（６世紀中頃～後半）に属するものと考えられる。

はじめに、第１号埴輪棺墓は、やや小ぶりな円筒埴輪を棺に利用し、底及びすかし孔などは円筒埴輪の破片で塞ってあった。閉塞の為に使用されていた埴輪は、破片を接合した結果一個体に復元ができ、棺に用いられたものとほぼ同規模であった。このことから閉塞のための埴輪は、既に破片となっていたものを利用したわけではなく、閉塞の目的で故意に割り、使用したものと推定される。また、棺を含めて３個体ともほぼ同規模であることから、いずれも埴輪棺として利用する目的で製作された可能性も考えられる。

埴輪棺内部には被葬者が埋葬されていたと考えられるが、内部からは、何も検出されていない。

なお、被葬者は、埴輪の大きさから子供、もしくは成人の遺骸が再葬されたものと判断され、さらには、第 63 号墳に寄り添う状態で埋葬されていることから、第 63 号墳被葬者の近親者がこの埴輪棺にて埋葬されたことが想像される。

次に、１次調査地点では、周溝や溝跡に切られる状態で、縄文時代中期の竪穴住居跡を検出することができた。遺物は、加曾利Ｅ式の深鉢２個体分が、その全容が判断できるものであり、住居の廃絶時に廃棄されたものと考えられる。以前の調査では、調査区から 100 ｍ程離れた北側において、同期の住居跡が３軒検出されていることから、本地区周辺には、縄文時代中期後半の拠点的集落が存在していたことが推定される。

本地区は、縄文時代中期後半の集落と古墳時代後期の古墳群が所在する地区であり、今後も、調査により、新たな知見が得られることが考えられることから、今回の調査成果と併せて検討することにより、本地区の歴史的全貌が明らかになることを期待したい。

引用・参考文献

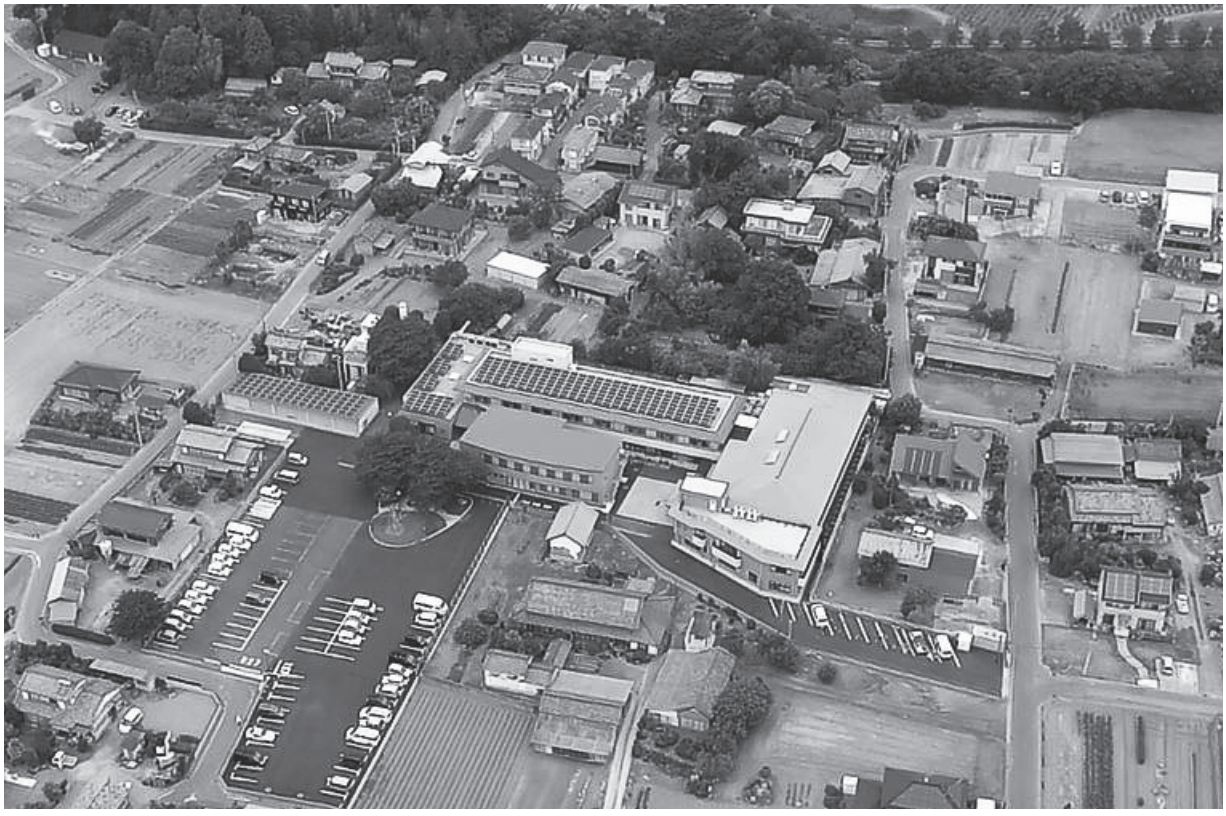
熊谷市　1963『熊谷市史』前編

加藤隆則　吉野健　2003『三ヶ尻遺跡Ⅲ』熊谷市教育委員会

㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1983 『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ』三ヶ尻天王・三ヶ尻林(1)

㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1984 『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ』三ヶ尻林(2)・台

西 別 府 館 跡



Ⅲ 西別府館跡の調査

1　発掘調査の概要

⑴ 調査に至る経緯

平成 23 年 10 月 5 日、事業者より熊谷市西別府字天神 2225 番 28 地内における埋蔵文化財発掘の届出が提出された。工事内容は、個人専用住宅建築である。これを受け、熊谷市教育委員会では、工事予定箇所が周知の埋蔵文化財包蔵地（埼玉県遺跡番号№ 59 － 039　西別府館跡）に該当し、周辺には西別府祭祀遺跡や西別府廃寺など古代の重要な遺跡が所在することから、詳細な状況を把握するため、平成 23 年 10 月 18 日に試掘調査を実施した。その結果、住宅建築箇所については、全面撹乱を受けていた状況が確認されたが、付随する浄化槽埋設箇所では、現地表面下 70 ㎝で奈良・平安時代の遺構・遺物が確認された。

浄化槽埋設箇所については、掘削深度が現地表面下 2 m近くまで達することから遺跡が破壊されてしまうため、熊谷市教育委員会では事業者に事前に発掘調査を実施する必要がある旨を伝え、同日中に浄化槽埋設箇所のみ記録保存の措置を講ずることとなった。この結果を基に、平成 23 年 10 月 21 日付け熊教社発第 1491 号で埼玉県教育委員会教育長へ埋蔵文化財発掘の届出を送付し、事業者あてに平成 23 年 10 月 26 日付け教生文第 4 － 873 号で発掘調査実施の指示通知がなされた。

発掘調査の通知は、熊谷市教育委員会から平成 23 年 10 月 21 日付け熊教社発第 1490 号で埼玉県教育委員会教育長あてへ送付した。

⑵ 発掘調査、整理・報告書作成の経過

発掘調査は、試掘調査と同日の平成 23 年 10 月 18 日に実施した。調査面積は約 2 ㎡である。調査は、重機で表土掘削を行った際に確認された遺構を人力で掘削し、土層断面図の作成を行った。そして、写真撮影、重機による調査箇所の埋め戻しを行い、現場におけるすべての作業を終了した。

整理・報告書作成作業は、平成 30 年 4 月から平成 31 年 3 月まで実施した。4 月から 5 月までは、遺物の洗浄、注記、接合、復元などの作業を行い、併行して遺構の図面整理とデジタルトレースを行った。6 月は遺物の実測・拓本作業を行い、終了後に遺物の版組を作成した。7 月は遺物の写真撮影、写真図版の割付け、原稿執筆を行い、大方の作業を終了した。そして、12 月に他の遺跡を含めた報告書の編集作業を行った後、印刷業者を選定・印刷に入り、数回の校正を行って 3 月下旬に報告書を刊行した。

⑶ 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

発掘調査は平成 23 年度、整理・報告書作成は平成 30 年度に実施し、いずれも熊谷市教育委員会が主体者となって実施した。なお、組織については、発掘調査及び整理・報告書作成については、次の通りである。

主体者　熊谷市教育委員会

ア　発掘調査

平成 23 年度

教育長	野原　　晃
教育次長	藤原　　清
社会教育課長	斉木　千春
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	根岸　敏彦
社会教育課副課長兼文化財保護係長	森田　安彦
副課長	出縄　康行
副課長	石井　　茂
社会教育課文化財保護係主幹	吉野　　健
主査	鯨井　敬浩（～ H23. 6.30）
主査	松田　　哲
主査	杉浦　朗子
主任	蔵持　俊輔
主事	山下　祐樹

イ　整理・報告書作成

平成 30 年度

教育長	野原　　晃
教育次長	小林　教子
社会教育課長	鶴田　敏男
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	吉野　　健
社会教育課文化財保護係業務主幹	宮前　彰生
係長	松田　　哲
主査	小島　洋一
主査	星　　祥子
主査	蔵持　俊輔
主任	山下　祐樹
主任	腰塚　博隆
主任	新井　　端
主事（任期付任用職員）	武部　喜充
主事（任期付任用職員）	島村　範久
主事（任期付任用職員）	大野　美知子

2　遺跡の概要

西別府館跡は、熊谷市西部の西別府地内に所在する。地形的には櫛挽台地北東端に立地し、標高は約33 mを測る。遺跡は、東西約 350 m、南北約 500 mの範囲に広がっており、西側には平成 30 年 2 月 13 日付で国指定史跡となった「幡羅官衙遺跡群」（深谷市幡羅官衙遺跡・熊谷市西別府祭祀遺跡）及び関連遺跡（熊谷市西別府廃寺、西別府遺跡）、東側には別府古墳群、そして、南側には「幡羅官衙遺跡群」に伴う集落跡である深谷市下郷遺跡、熊谷市大竹遺跡などが所在しており、遺跡が密集する地域にある。

西別府館跡における発掘調査は、これまでに計 4 回実施されているが、熊谷市教育委員会が実施したものと財団法人（現公益財団法人）埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施したものの 2 つに大別される（第35 図）。以下、各調査の概要について述べる。

熊谷市教育委員会が 2009（平成 21）年度に実施した調査は、個人専用住宅建築に伴い、2009（平成21）年 9 月 2 日から 10 月 9 日まで行われた。調査面積は 71.5 ㎡である（熊谷市教委 2013）。

調査地点は、遺跡範囲北側の中央よりやや西側に位置する。検出された遺構は、平安時代の竪穴建物跡 3 棟、掘立柱建物跡 1 棟、土坑 2 基、溝跡 3 条、ピット 29 基、近世の井戸跡 1 基である。これらの遺構からは、平安時代の須恵器、土師器、ロクロ土師器、灰釉陶器、瓦、土錘、近世の陶磁器などが出土している。

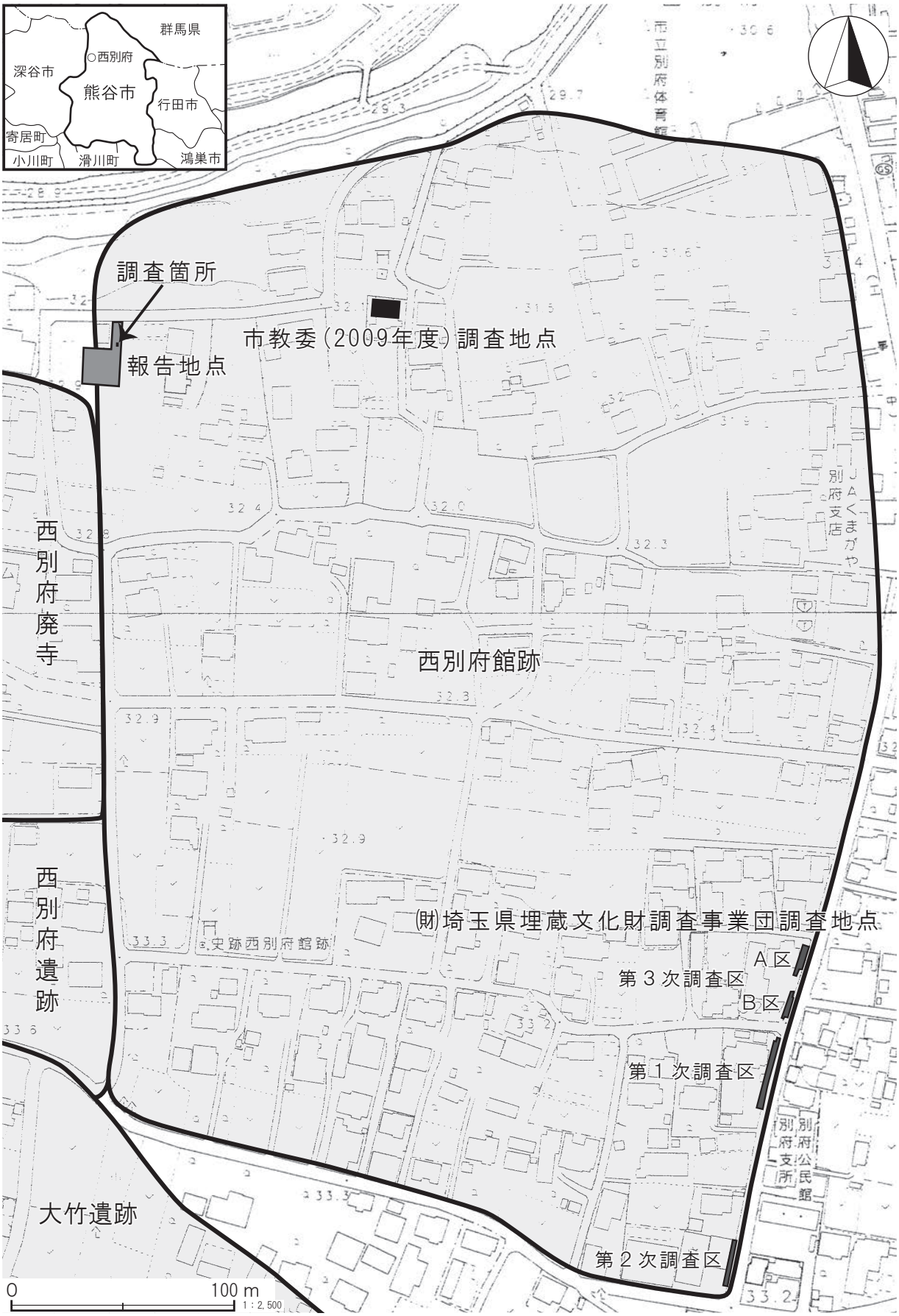
財団法人（現公益財団法人）埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した調査は、一般県道新堀尾島線の自転車歩行者道整備工事に伴い、第 1 次調査が 2006（平成 18）年度、第 2 次調査が 2008（平成 20）年度、第 3 次調査が 2009（平成 21）～ 2010（平成 22）年度に行われた（㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団2010）。いずれも調査地点は、遺跡範囲の南東端に位置する。

第 1 次調査は、2007（平成 19）年 1 月 4 日から 3 月 23 日まで行われた。調査面積は、195 ㎡である。検出された遺構は、奈良・平安時代の竪穴建物跡 4 棟、土坑 3 基、近世の溝跡 1 条、土坑 3 基、時期不明のピット 18 基である。出土遺物は、奈良・平安時代の須恵器、土師器、鉄製品、近世の陶器、焙烙、かわらけがある。

第 2 次調査は、2008（平成 20）年 8 月 1 日から 9 月 19 日まで行われた。調査面積は、140 ㎡である。検出された遺構は、奈良時代の溝跡 1 条、土坑 1 基、柱列 1 列、中～近世の火葬跡 2 基、時期不明のピット 28 基である。遺物は、溝跡と土坑から須恵器、土師器が出土している。

第 3 次調査は、2010（平成 22）年 3 月 29 日から 5 月 21 日まで行われた。第 3 次調査は、調査区が南北 2 つに分かれており、北側がＡ区、南側がＢ区となっている。調査面積は、Ａ・Ｂ区合わせて計164 ㎡である。検出された遺構は、奈良時代の竪穴建物跡 1 棟、近世の溝跡 3 条（うち 1 条は第 1 次調査と同一。）、土坑 11 基、時期不明のピット 18 基である。遺物は、奈良時代の竪穴建物跡から土師器、近世の溝跡から陶器、かわらけ、砥石が出土している。

以上、過去に実施された発掘調査の概要について述べたが、西別府館跡では発掘調査だけでなく、試掘調査の成果を踏まえても、これまで確認されているのは古代と近世が主体であり、考古資料から館跡に直接繋がる遺構・遺物は確認されていないのが実状である。

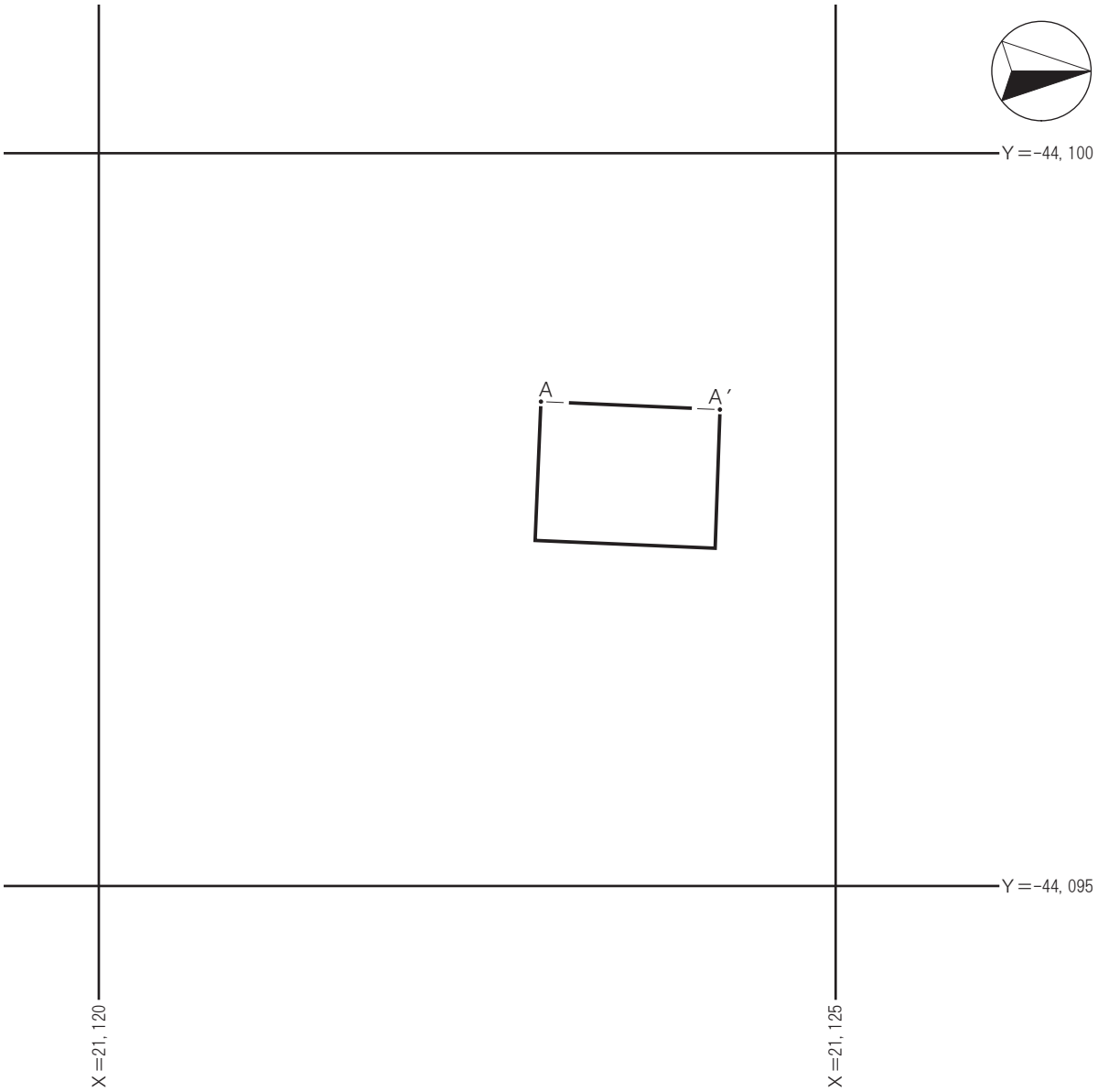


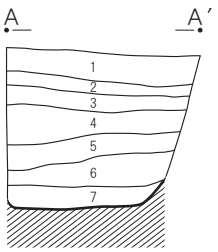
第 35 図　西別府館跡調査地点位置図

3　遺構と遺物

西別府館跡における発掘調査は、今回で５回目となる。今回報告するのは、個人専用住宅建築に付随する浄化槽埋設箇所のみであることから、調査面積は約２㎡と極めて小さい（第 36 図）。

検出された遺構は、大溝と思われる遺構のみであり、調査範囲に制約があったことから詳細は把握できなかったが、本遺構からは須恵器、土師器、平瓦が少量出土した。以下、詳細について述べる。





土層説明（ＡＡ′）

1 表　　土
2 暗褐色土
3 褐 色 土：焼土粒、ローム粒少量含む。
4 明褐色土：焼土粒、ローム粒少量含む。
5 褐 色 土：焼土粒、炭化物、ローム粒少量含む。
6 暗褐色土：焼土粒、炭化物、ローム粒少量含む。
7 暗褐色土：しまり弱。炭化物、ローム粒少量含む。６層より暗い。

0　2m　1:60

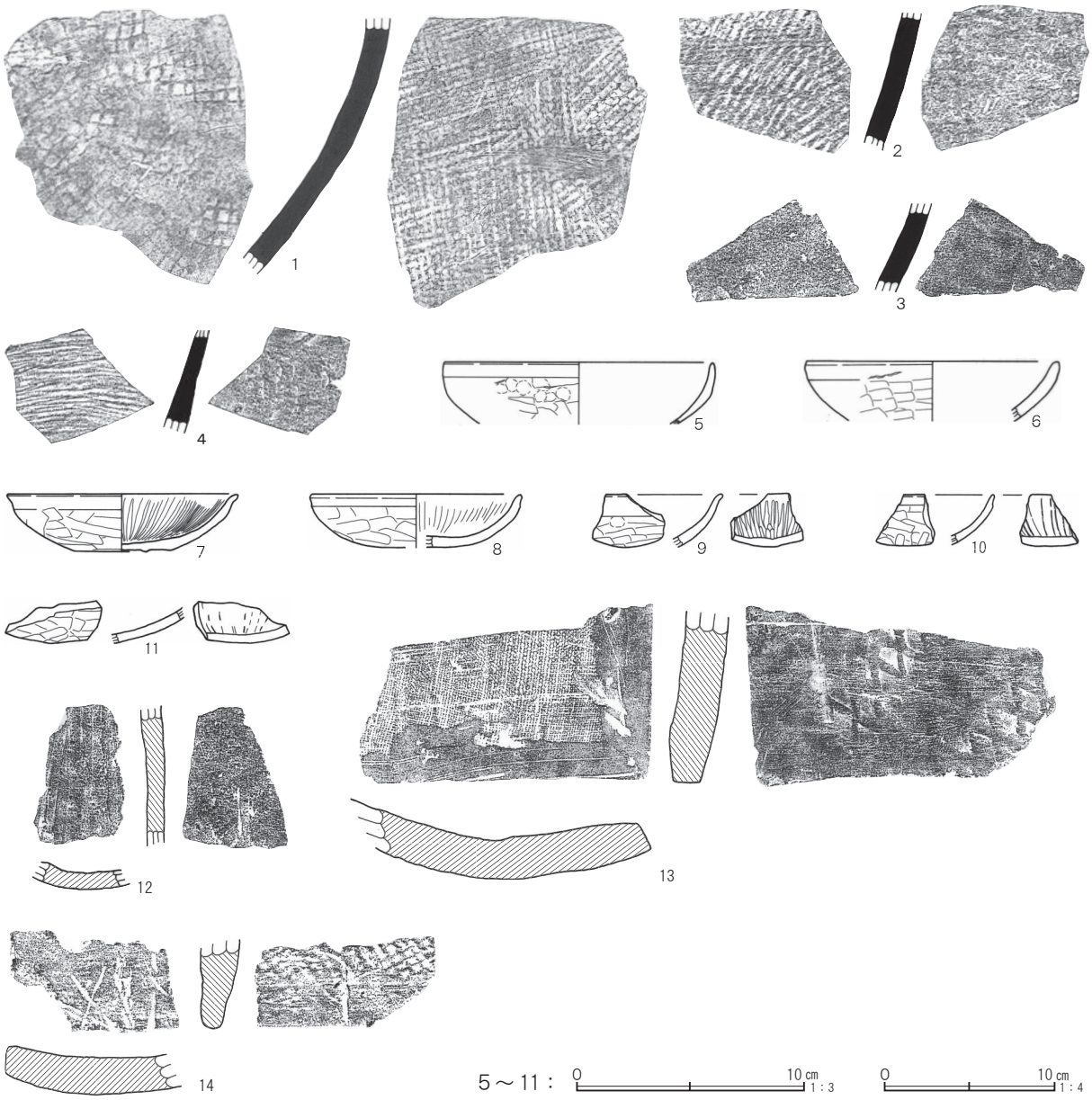
第 36 図　西別府館跡調査区（第１号溝跡）全測図・土層断面図

⑴ 溝跡

第１号溝跡（第 36・37 図）

本遺構は、浄化槽埋設範囲を超える規模のものであり、前述のとおり、調査範囲に制約があったことから立ち上がりなどを確認することはできなかったが、検出された底面で南北がやや立ち上がる状況が確認されたことから東西方向に走る大溝と判断した。底面までの深さは、現地表面から最大 1.25 mと非常に深い。層位は、表土も含めて 7 層確認された。確認面は明確に把握できていないが、3 層以下には焼土粒やローム粒を含んでいた。ほぼ水平に堆積していたが、自然堆積と思われる。

出土遺物は、須恵器甕（第 37 図 1 ～ 4）、土師器坏（5 ～ 11）、平瓦（12 ～ 14）がある。すべて覆土からの検出である。



第 37 図　西別府館跡第１号溝跡出土遺物

第 16 表　西別府館跡第 1 号溝跡遺構出土遺物観察表（第 37 図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　甕	-	-	-	ADL	外：灰黄色 内：にぶい褐色	B	胴下部片	末野産。
2	須恵器　甕	-	-	-	ABL	灰色	B	胴下部片	外面自然釉付着。末野産。
3	須恵器　甕	-	-	-	ADF	灰色	B	胴下部片	南比企産。
4	須恵器　甕	-	-	-	ABL	灰色	B	胴下部片	末野産。
5	土師器　坏	(15.9)	(3.6)	-	ABKN	橙色	B	10%	体部外面輪積痕有。
6	土師器　坏	(15.0)	(3.5)	-	ABCKN	橙色	B	10%	口縁部外面輪積痕有。
7	土師器　坏	(13.5)	3.4	(5.6)	ABDEHK	橙色	B	30%	内面放射状暗文有。
8	土師器　坏	(12.4)	3.1	-	ABDGK	明赤褐色	B	30%	放射状暗文有。内面剥離顕著。
9	土師器　坏	-	-	-	ABDK	にぶい褐色	B	口～体部片	内面放射状暗文有。
10	土師器　坏	-	-	-	ABDGHK	橙色	B	口～体部片	内面放射状暗文有。
11	土師器　坏	-	-	-	ABDHK	橙色	B	体部片	内面放射状暗文有。内面摩耗顕著。
12	平　瓦	最大長（8.3）cm、最大幅（5.8）cm、最大厚（1.2）cm。胎土 :ADL。色調：灰色。大半欠。粘土紐桶巻造り。							
13	平　瓦	最大長（10.1）cm、最大幅（17.8）cm、最大厚（2.5）cm。胎土 :ABCKL。色調：橙色。大半欠。粘土紐桶巻造り。							
14	平　瓦	最大長（5.3）cm、最大幅（10.3）cm、最大厚（2.3）cm。胎土 :ABCDKLN。色調：浅黄橙色。大半欠。粘土紐造り。							

１～４は、すべて須恵器甕の胴下部片である。１・２・４は末野産、３のみ南比企産である。１は、外面にタタキ目が残るが、ヘラナデを一部施している。内面には、あて具痕が残る。２も外面にタタキ目が残るが、内面は横・斜位のヘラナデが施されている。外面には自然釉が付着している。３は、内外面ともにロクロナデ後、横･斜位のヘラナデが施されている。４は、外面にタタキ目が残り、内面は横･斜位のヘラナデが施されているが、一部にあて具痕が残る。なお、須恵器では、図示不可能なかえりを持つ蓋の小片も出土している。

５～ 11 は土師器坏。このうち、７～ 11 は暗文坏である。５・６は、後述する暗文坏よりも法量がやや大きく、口径 15 ㎝代、器高４㎝程を測ると思われる。器形は、口縁部がほぼ直立し、体部は底部に向かって内湾する。調整は、いずれも口縁部が内外面ともに横ナデ、体部はヘラ削りを施しているが、５は指オサエも認められた。また、５は体部、６は口縁部に輪積痕も認められた。７～ 11 は、暗文坏である。内面に放射状暗文が描かれており、９のみ太い。法量は、口径 13 ㎝前後、器高３㎝代を測り、前述の５・6 に比べて小振りである。器形は、口唇部がわずかに外反し、体部から底部にかけて内湾する。底部は７のみ平底であるが、その他は丸底である。調整は、５・６と同じく口縁部が内外面ともに横ナデ、体部から底部はヘラ削りが施されている。

12 ～ 14 は平瓦片。12・13 は、粘土紐桶巻造り、14 のみ粘土紐造りである。12 は、凹面に模骨痕が残り、凸面は縦位のヘラナデが施されている。13 は、凹面に布目痕、粘土板糸切痕、模骨痕が残り、凸面は横位のヘラナデが施されているが、部分的に斜格子の大きいタタキ痕が残る。14 は、凹面に横位のヘラナデが施され、ヘラによる格子状の刻みがみられる。凸面は、斜格子の小さいタタキ痕が残り、縁は横位のヘラナデが施されている。

これらの遺物から本溝跡の主体となる時期は、７世紀末から８世紀初頭と思われる。

４　調査のまとめ

西別府館跡は、平安時代末頃、在地の武士である成田氏から分家した別府次郎行隆の二男、次郎行助が構えた館とされ、行助から５代あとの甲斐守頼重まで居住したことが伝わっている。しかし、第２項及び過去の報告（熊谷市教委 2013）（㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2010）でも述べているとおり、発掘及び試掘調査の結果では、主に奈良・平安時代か江戸時代の遺構・遺物が確認されているだけで肝心の館跡については全く未確認の状況にあり、館跡の痕跡を示すものとしては、小字に出口、西方、北方などの関連する地名が残っているにすぎない。

西別府館跡における発掘調査は、今回で５回目となるが、第３項でも述べたとおり、今回の報告箇所は、調査面積が極めて小さいため、検出された遺構の性格については、不明と言わざるを得ない。しかし、大溝と判断した遺構からは、少量ながら遺物が出土しており、それらはすべて律令期に属するものである。当地域における律令期と言えば、本遺跡の西側に国指定史跡「幡羅官衙遺跡群」及び関連遺跡が広がっていることから、今回検出された遺構・遺物は、これらの遺跡群に付随するものであることは間違いない。

「幡羅官衙遺跡群」（深谷市幡羅官衙遺跡、熊谷市西別府祭祀遺跡）は、熊谷市西別府と深谷市東方の市境に広がる遺跡であり、本遺構の西側には行政区分上、名称は異なるが、幡羅官衙遺跡と同一の遺跡である西別府遺跡や古代寺院跡である西別府廃寺が所在する。役所、祭祀場、寺院の３つがそろって確認された官衙遺跡では、岐阜県関市弥勒寺官衙遺跡群、神奈川県茅ケ崎市下寺尾官衙遺跡群（いずれも国指定史跡）と全国でも３例しかない稀有な例である。また、「幡羅官衙遺跡群」の南側には、付随する集落跡である深谷市下郷遺跡、熊谷市大竹遺跡なども所在しており、当地域一帯が律令期の中心地であったことは疑う余地がない。

今回検出された遺構は、大溝と判断したが、報告地点の北側約 20 ｍには櫛挽台地の崖線が東西に走る。こうした地形を考慮するならば、今回検出された遺構は、この崖線に沿って走る大溝の可能性が考えられる。時期については、特定し得る遺物が土師器坏のみであるが、これらは７世紀末～８世紀初頭に相当し、本遺跡で実施された過去の調査例に比べると最も古い。過去の調査地点は、今回の報告箇所よりも東側に位置しており、検出された竪穴建物跡は、深谷市下郷遺跡や熊谷市大竹遺跡と同じく「幡羅官衙遺跡群」に付随する集落と思われるが、今回検出された遺構・遺物は、８世紀初頭創建とされる西別府廃寺に時期的、かつ空間的にも近い。果たして本報告の遺構・遺物が「幡羅官衙遺跡群」初期段階の集落に付随するものか、あるいは西別府廃寺に付随するものかは残念ながら定かではない。しかし、いずれにしても現段階において西別府館跡の実態は、官衙関連遺跡の１つとみなせる成果ばかりであり、館跡そのものについては、不明と言わざるを得ない。

引用・参考文献

熊谷市　1963 『熊谷市史　前篇』

熊谷市教育委員会　2013 『前中西遺跡　西別府館跡　王子西遺跡　立野遺跡』

㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　2010 『西別府館跡』

上 前 原 遺 跡



Ⅳ　上前原遺跡の調査

1　発掘調査の概要

⑴　調査にいたる経過

上前原遺跡の調査は、建築主（柴﨑　真也氏）との調整を経て、個人専用住宅に伴う浄化槽埋設工事により埋蔵文化財の現状保存が困難と判断されたため、国庫･県費補助事業として実施したものである。経過については、次のとおりである。

平成 23 年 7 月 11 日付けで、文化財保護法第 93 条第 1 項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出される。これを受けて、熊谷市教育委員会は、届出のあった熊谷市千代字代 63 番 12・13 地内は、埋蔵文化財包蔵地（県遺跡番号 65 - 022　上前原遺跡）に該当することから、埋蔵文化財の詳細な状況を把握するため、平成 23 年 7 月 26 日に試掘調査を実施した。この調査により、現地表面下 73 ㎝～ 98 ㎝で縄文時代中期の遺構・遺物が確認された。

個人専用住宅建築は、その建物基礎の掘削深度が現地表面下 40㎝であった。当該箇所で確認された土坑または竪穴遺構の遺構確認面は、現地表面下 73 ㎝であったことから遺構確認面までは 33 ㎝の保護層が設けられるため工事立会の措置が適当であると考えられた。また、本建築には、砕石空隙貯留浸透施設及び浄化槽埋設が予定されていた。前者箇所については攪乱が激しく、ローム土やその下層に堆積する礫や白色粘土が露出して堆積していたため、慎重工事の措置が適当と考えられた。一方、後者箇所については、現地表面下 98 ㎝において土坑または竪穴遺構及びピットを確認した。掘削工事は現地表面下 186 ㎝に及ぶことから、遺構確認面までの保護層を設けることができないと判断したため、即日記録保存のための発掘調査の措置を講じた。そして、これらの旨の副申を付して、平成 23 年 7 月 29 日付けで埼玉県教育委員会あてに送付した。その後、建築主あてに埼玉県教育委員会教育長から周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知がなされ、既に必要な措置が講じられたことから、工事立会実施の指示がなされた。

発掘調査は、発掘調査に先立ち、文化財保護法第 99 条第 1 項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を、平成 23 年 7 月 26 日付け熊教社発第 1363 号で提出し、熊谷市教育委員会が実施した。

⑵　発掘調査、整理・報告書作成の経過

発掘調査は、平成 23 年 7 月 26 日に実施した。調査面積は、浄化槽埋設予定箇所全面の 2.4 ㎡である。

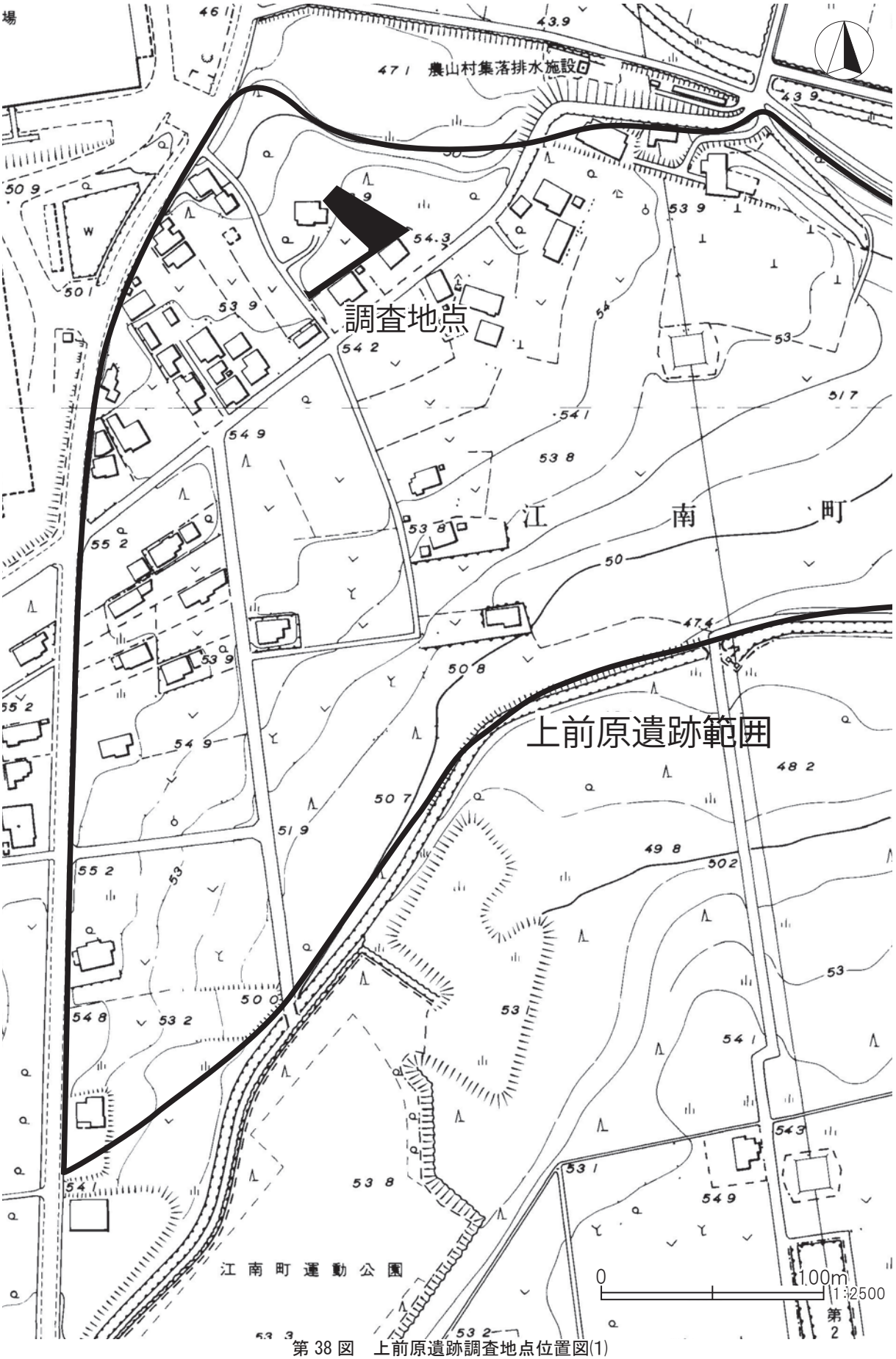
まず、重機による表土除去を行い、その後人力による遺構確認作業を行った。検出された遺構は、竪穴遺構及びピットで、順次掘り下げを行った。

そして、掘り下げ作業と並行して、土層断面図の作成、適宜写真撮影を行った。

また、遺構の分布状況については、平面図を作成した。遺構の写真撮影については、遺構を含めて調査区全景について写真撮影を行った。

整理・報告書作成作業は、平成 30 年 4 月から平成 31 年 3 月にかけて実施した。

まず、遺物の洗浄、注記作業を行った。その後、遺物の分類を行い、実測作業を開始した。また、これらと並行して遺構の図面整理を行った。



第 38 図　上前原遺跡調査地点位置図(1)

次に、土器遺物のトレース・拓本を採り図版を作成し、併せて遺構等のトレース・図版の作成を行った。そして、遺構の写真整理・遺物写真撮影を行い、写真図版の割付をした。また、これと並行して原稿執筆を行った。

最後に、印刷業者の選定を行い、校正を経て本報告書を刊行した。

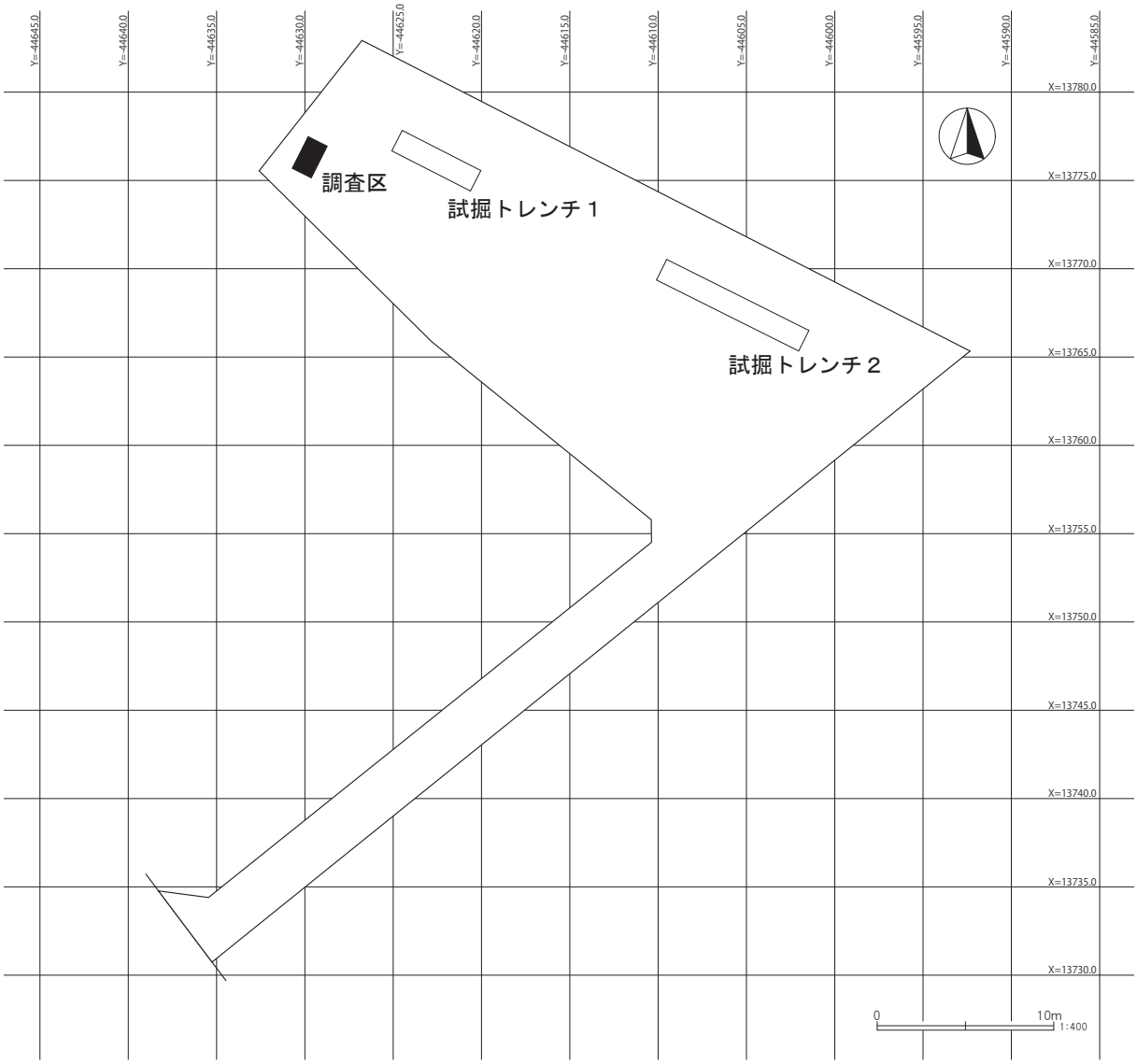
⑶　発掘調査、整理・報告書作成の組織

発掘調査は平成 23 年度に、整理・報告書作成は平成 30 年度に実施し、いずれも熊谷市教育委員会が主体者となって実施した。なお、組織については、第Ⅲ章の西別府館跡と同一であることから記述を省略するため、第Ⅲ章の記述を参照されたい。

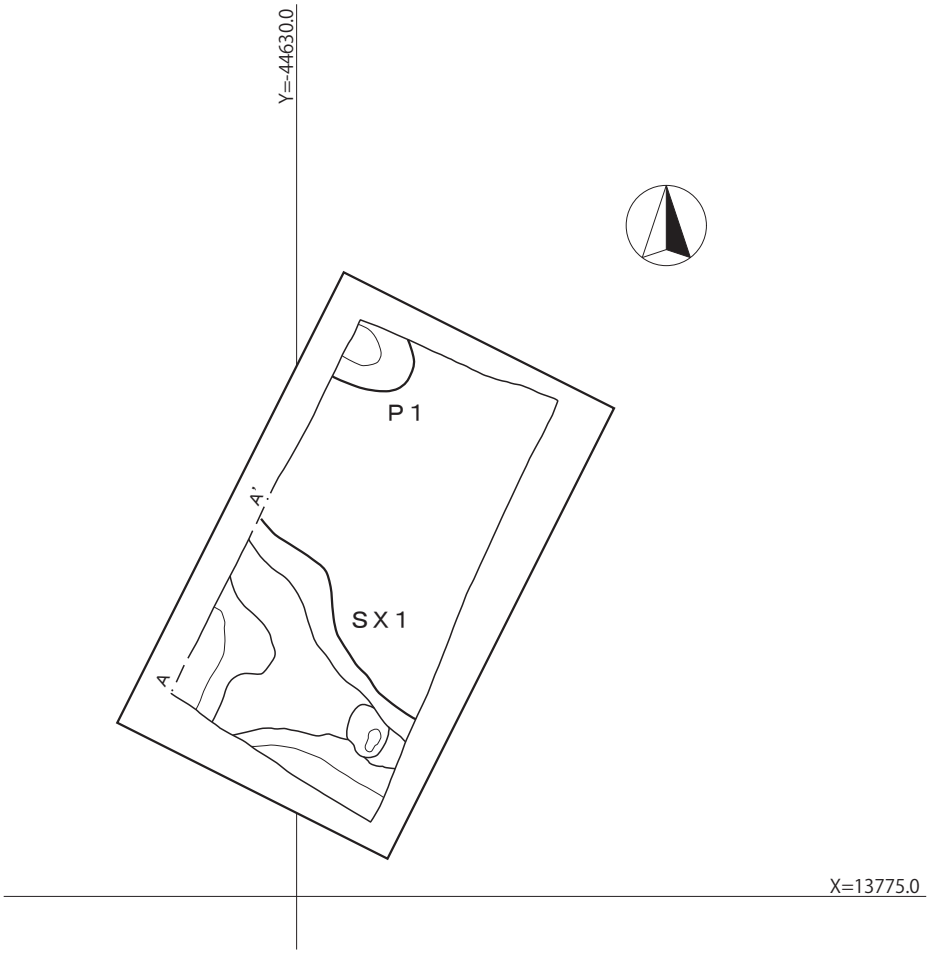
2　遺跡の概要

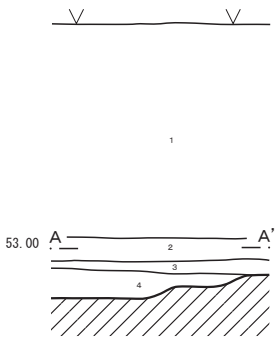
⑴　上前原遺跡について

上前原遺跡は、荒川を臨む江南台地の北縁部に立地し、標高は 45 m～ 54 mを測る。台地は、東側が荒川に注ぐ谷によって開析され、半島状に突き出した地形となっている。



第 39 図　上前原遺跡調査地点位置図⑵





土層説明（A-A'）
1 盛土
2 黒褐色土（遺物包含層） ソフトローム土ブロック・粒子少量含
3 黒褐色土 ソフトローム土ブロック少量含
4 黒褐色土



第 40 図　上前原遺跡調査区・遺構全測図

本遺跡における調査は、昭和60年の調査を皮切りに、平成15・16・18年と４次に亘る発掘調査が、旧江南町教育委員会により実施されてきた。よって、今回の調査は、第５次調査に当たる。

これまでの調査では、縄文時代中期～後期の竪穴住居跡５軒、集石土坑46基等が検出され、いずれの調査も、調査面積が小さいながら数多くの遺構が検出されていることから、規模の大きな集落の存在が推定されている。なお、平成28年度には、本調査地点に程近い、台地の中寄りの地点で予定された開発行為に伴う試掘調査を実施しているが、その際も、埋甕、土坑、ピット等の遺構、縄文土器や石器の遺物が検出され、同時期の集落跡の広がりが確認されている。

⑵　調査の方法

調査の方法は、現地での基準点測量については道路境界杭・民家建物を基準点、見返点として任意の測量を行った。そして、整理・報告書作成の際には、世界測地系国家方眼座標（国土標準平面直角座標第Ⅸ系）に合わせた。

実測作業にあたっては、任意の基準点を基点にして、簡易遣り方による方法で行った。

なお、調査地点の呼称については、試掘調査時に本調査に移行したため、試掘調査当初の第１号トレンチを調査区に、第２号トレンチを試掘トレンチ１、第３号トレンチを試掘トレンチ２と名称変更した。

⑶　検出された遺構と遺物

本調査地点は、遺跡範囲の北西隅付近の箇所で、調査地点のすぐ北は崖線となる。その崖線は、比高差約７ｍをもって斜面低地となり、さらに約３ｍの比高差をもって低地となる。

本報告の調査地点では、調査区出土遺物から縄文時代中期に該当すると考えられる竪穴遺構１基及びピット１基が検出された。遺物については、縄文土器深鉢破片１点が出土し、試掘トレンチ２の攪乱土中からは縄文土器深鉢破片２点が出土し、総数にして３点の出土量であった。

３　遺構と遺物

⑴　竪穴遺構

第１号竪穴遺構（第40図）

調査区のほぼ南隅に位置する。座標Ｘ＝13,775～13,780、Ｙ＝－44,625～－44,635内にある。重複関係にある遺構はない。

規模は、検出最大長軸0.92ｍ、検出短軸0.44ｍ～0.78ｍを測り、平面プランは、検出された部分において、一部が突出する不整形な方形を呈する。

埋土は、黒褐色土がほぼ水平に堆積していた。

床面は、西隅及び南隅に向かって二段の段差をもっていた。また、南東部の一段下がった平坦部に、径16㎝前後のピットがあった。

出土遺物は検出できなかったが、時期は、調査区における出土遺物から、縄文時代中期であると推定される。

⑵　ピット

第１号ピット（第40図）

調査区の北西隅に位置する。座標Ｘ＝ 13, 775 ～ 13, 780、Ｙ＝－ 44, 625 ～－ 44, 630 内にある。重複関係にある遺構はない。

規模は、検出最大長軸 0. 28 ｍ、検出短軸 0. 25 ｍを測った。

出土遺物はなかったが、時期は、調査区における出土遺物から、縄文時代中期であると推定される。

⑶　出土遺物

調査区遺構外及び試掘トレンチ２からの出土遺物を掲載する（第 41 図）。いずれも縄文時代中期と考えられる。

１は縄文土器深鉢の胴部破片である。磨消し懸垂文を施す土器であり、区画内にＬＲ単節縄文を施文する。加曾利Ｅ式。調査区遺構外出土。

２は縄文土器深鉢の口縁部～胴部上半破片である。楕円形隆帯区画文を有するキャリパー類深鉢。区画内にＲＬ単節縄文を施文する。胴部は、磨消し懸垂文を施し、区画内にＬＲ単節縄文を施文する。加曾利Ｅ式。試掘トレンチ２出土。

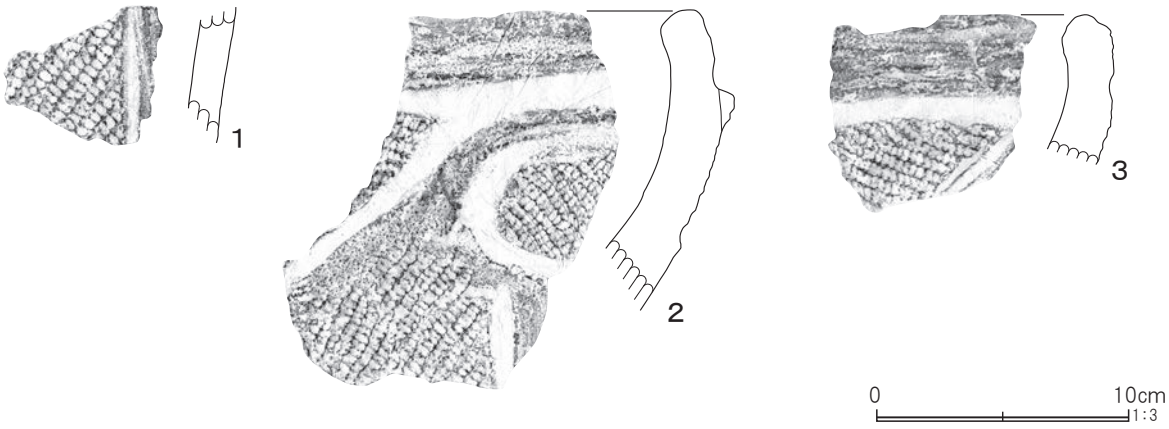
３は縄文土器深鉢の口縁部破片である。楕円形区画文を有する深鉢。区画内にＲＬ単節縄文を施文する。加曾利Ｅ式。試掘トレンチ２出土。

４　調査のまとめ

上前原遺跡における調査は、過去に４次に亘る調査が実施され、今回の調査は、第５次調査に当たる。それでは、まず第１～４次調査の成果を概観しておきたいと思う。

第１次調査は、遺跡範囲のほぼ中央部、台地の中程の地点を調査している。調査区の南東側は埋没谷の谷地形、東半には竪穴住居跡１軒、土坑 21 基の土坑群が検出された。調査区の大半を占める埋没谷は、多量の土器・石器等を含む遺物包含層となっていた。竪穴住居跡は縄文時代中期前半と考えられ、土坑群はほとんど遺物が出土していないが、縄文時代中期と考えられている。一方、埋没谷からは、縄文時代早期から後期の土器（早期 120 点、前期 25 点、中期 16, 099 点、後期 20 点）、石器等が検出されている。

第２次調査は、遺跡範囲の西端付近中央部、台地の中程の地点を調査している。縄文時代中期の竪穴住居跡２軒が検出された。１軒は、床面に石囲炉が検出され、土器が埋設されていた。もう１軒は、炉



第 41 図　上前原遺跡出土遺物

が未発見な上に柱穴の配置も不規則で、詳細は不明であるが住居跡と推定されたものである。

第３次調査は、遺跡範囲の北西端、本調査地点の北側に近接する、台地の先端部で北斜面に当たる地点を調査している。縄文時代時代中期の竪穴住居跡２軒、埋甕１基、集石土坑 46 基が検出された。住居跡のうち１軒は、平面プランが明確ではなく、炉と柱穴３基が検出されたにすぎないが、炉の周辺から土器がまとまって出土し、打製石斧や磨石の石器が見られた。もう１軒は、勝坂式土器が石器と伴に出土した。１基検出された埋甕は、掘り込み内に勝坂式粗製深鉢が埋設されていた。集石土坑からは、勝坂式土器、連弧文系土器、加曾利ＥⅡ式土器、称名寺式土器が出土している。

第４次調査は、遺跡範囲の西端付近、台地のやや南寄り（奥部）、第３次調査地点のやや東の地点を調査している。縄文時代後期の竪穴住居跡１軒のほか、遺物包含層が検出された。遺物包含層からは、縄文時代後期の堀之内式土器や称名寺式土器と伴に、縄文時代早期と考えられる礫器が出土している。

次に、今回の第５次調査であるが、直接遺構からの出土ではないが、縄文時代中期（加曾利ＥⅡ式期）の深鉢片が３点出土している。このことから、当該地及び近隣に当該期の集落が展開していたことが推定できるが、事実、近接する第３次調査地点において同時期の遺構・遺物が検出されていることからも証明できよう。

第５次調査で検出された遺構はいずれも、特に竪穴遺構については、狭小面積による調査が故に遺構の全体が不明な上に遺物も伴わないことから、当該期の集落に形成された人々の生活痕跡には間違いないと考えるが、性格については残念ながら言及できない。

最後に、遺跡全体の集落について言及すれば、縄文時代中期に台地の縁辺部付近（北縁）に造営された集落は、縄文時代後期になると、台地の奥（内陸部）へ移動または拡張していったことが想定される。

なお、本遺跡が立地する台地は、冒頭にも記述したが、半島状に突き出したものとなっているため、南にも北から南に向かって開析谷が入っている。その北縁の台地南斜面での試掘調査では、極小によるものではあるが、遺構・遺物が検出されていない状況が見られる。

主な引用・参考文献

新井　端他　1988　『本田・東台　上前原』 江南町教育委員会

森田　安彦　2006　『上前原遺跡第２次発掘調査報告書』 江南町教育委員会

寺社下　博、新井　端　2008　『箕輪遺跡　上前原遺跡３次、４次』 熊谷市教育委員会

元 境 内 遺 跡



Ⅴ　元境内遺跡の調査

1　発掘調査の概要

⑴　調査にいたる経過

元境内遺跡の調査は、建築主（生方　秀樹氏）との調整を経て、地盤改良（柱状改良）工事を伴う個人専用住宅の建築により埋蔵文化財の現状保存が困難と判断されたため、国庫・県費補助事業として実施したものである。経過については、次のとおりである。

平成 26 年 7 月 24 日付けで、文化財保護法第 93 条第 1 項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出される。これを受けて、熊谷市教育委員会は、届出のあった熊谷市野原字持橋ノ道上 668 番 3 地内は、埋蔵文化財包蔵地（県遺跡番号 65 - 039　元境内遺跡）に該当することから、埋蔵文化財の詳細な状況を把握するため、平成 26 年 8 月 7 日に試掘調査を実施した。この調査により、現地表面下 45 ㎝で古墳時代後期の遺構・遺物が確認された。

個人専用住宅建築は、前述のとおり地盤の柱状改良工事を伴うもので、基礎の掘削深度は現地表面下 22㎝に及び、さらに、最大径 60 ㎝、深さ 3 ｍの柱を 24 本地中に埋める工法を、建物の範囲全面に施工するものであったため、発掘調査の措置が適当である旨副申を付して、平成 26 年 9 月 3 日付けで埼玉県教育委員会あてに送付した。その後、建築主あてに埼玉県教育委員会教育長から周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知がなされ、発掘調査実施の指示がなされた。

発掘調査は、発掘調査に先立ち、文化財保護法第 99 条第 1 項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を、平成 26 年 9 月 25 日付け熊教社埋発第 288 号で提出し、熊谷市教育委員会が実施した。

⑵　発掘調査、整理・報告書作成の経過

発掘調査は、平成 26 年 9 月 27 日から 10 月 20 日にかけて実施した。調査面積は、家屋建築予定箇所全面の 57.54 ㎡である。

まず、重機による表土除去を行い、その後人力による遺構確認作業を行った。検出された遺構は、竪穴建物跡 1 棟、竪穴遺構 2 基、土坑 2 基、ピット 3 基で、順次掘り下げを行った。

そして、掘り下げ作業と並行して、土層断面図の作成、遺物出土状況の分布図を作成し、適宜写真撮影を行った。

また、遺構の分布状況については、平面図を作成した。遺構の写真撮影については、遺構ごとに行い、最後に調査区全景について写真撮影を行った。

整理・報告書作成作業は、平成 30 年 4 月から平成 31 年 3 月にかけて実施した。

まず、遺物の洗浄、注記、接合、復元作業を行った。その後、遺物の分類を行い、実測作業を開始した。また、これらと並行して遺構の図面整理を行った。

次に、土器等の遺物のトレース・拓本を採り図版を作成し、併せて遺構等のトレース・図版の作成を行った。そして、遺構の写真整理・遺物写真撮影を行い、写真図版の割付をした。また、これと並行して原稿執筆を行った。

最後に、印刷業者の選定を行い、校正を経て本報告書を刊行した。

⑶　発掘調査、整理・報告書作成の組織

主 体 者　　熊谷市教育委員会

ア　発掘調査

平成 26 年度

教育長	野原　　晃
教育次長	米澤　ひろみ
社会教育課長	岩上　精純
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	森田　安彦
社会教育課副課長兼文化財保護係長	吉野　　健
社会教育課文化財保護係主査	杉浦　朗子
主査	松田　　哲
主査	小島　洋一
主任	蔵持　俊輔
主任	山下　祐樹
主任	腰塚　博隆
発掘調査員	原野　真祐

イ　整理・報告書作成

平成 30 年度

教育長	野原　　晃
教育次長	小林　教子
社会教育課長	鶴田　敏男
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	吉野　　健
社会教育課文化財保護係業務主幹	宮前　彰生
係長	松田　　哲
主査	小島　洋一
主査	星　　祥子
主査	蔵持　俊輔
主任	山下　祐樹
主任	腰塚　博隆
主任	新井　　端
主事（任期付任用職員）	武部　喜充
主事（任期付任用職員）	島村　範久
主事（任期付任用職員）	大野　美知子

2　遺跡の概要

⑴　元境内遺跡について

元境内遺跡は、和田川を南に臨む江南台地に立地し、和田川が開析する帯状の沖積地を挟んで江南台



第 42 図　元境内遺跡調査地点位置図

地南縁の比企丘陵が立地する。標高は 40 m～ 54 mを測る。

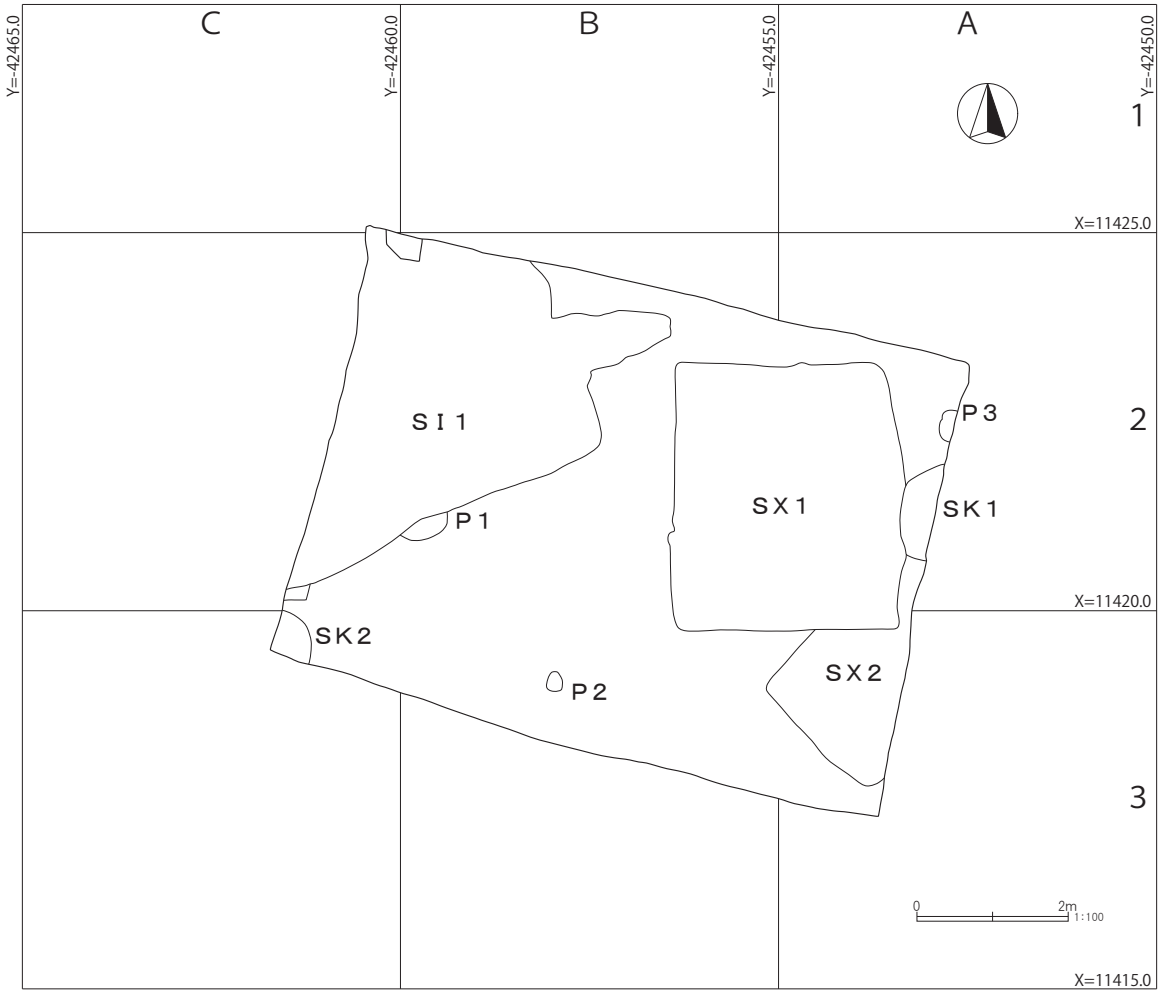
本遺跡における調査は、昭和 57 年の埼玉県立歴史資料館（現、埼玉県立嵐山史跡の博物館）による範囲内容確認調査（第１次調査）を皮切りに、昭和 57 年、平成８・11 年と４次に亘る発掘調査（第２～５次調査）が旧江南町教育委員会により実施されてきた。よって、今回の調査は、第６次調査に当たる。

これまでの調査では、古墳時代から近世に至る遺構・遺物が確認されている。その主なものは、古墳時代後期の竪穴住居跡 29 軒、平安時代の竪穴住居跡２軒、中世の館跡に伴う土塁や堀、中・近世の廃棄土坑や溝跡等が検出されている。調査の原因は様々であり、第１次調査が範囲内容確認調査、第２次調査が道路拡張工事、第３次調査が寺院建物建設、第４次調査が福祉施設建設、第５次調査が個人専用住宅建設である。

⑵　調査の方法

調査の方法は、世界測地系国家方眼座標（国土標準平面直角座標第Ⅸ系）による基準点測量を委託して行い、建築物予定地全体を網羅できるように一辺５mのグリッドを設定して行った。

実測作業にあたっては、交点を基準に水糸で１m間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による方法で行った。

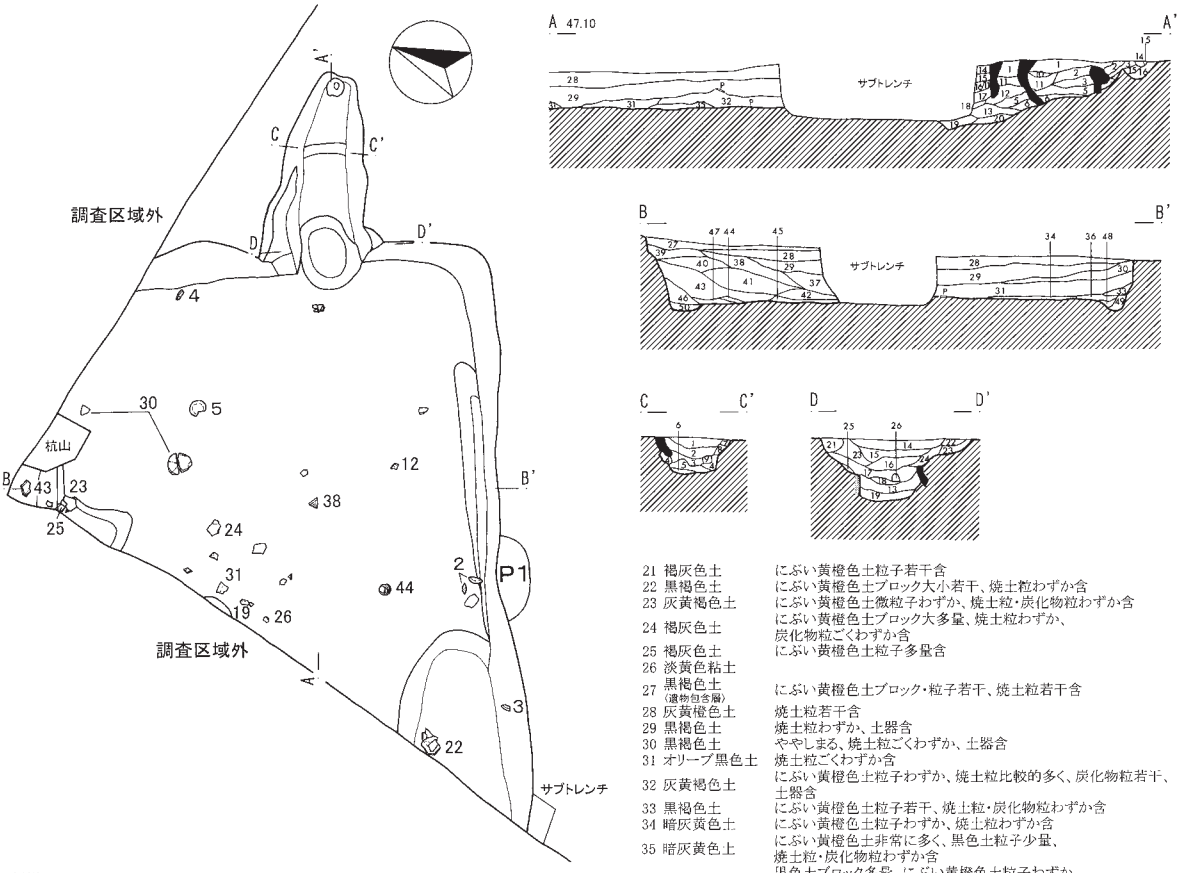


第 43 図　元境内遺跡調査区全測図

⑶　検出された遺構と遺物

本調査地点は、遺跡範囲の中央部南寄りの箇所、台地の南斜面で、調査地点の南は河川が開析した低地となる。その比高差は７～８ｍである。

本報告の調査地点では、奈良時代前半に該当すると考えられる竪穴建物跡１棟のほか、時期不明の竪穴遺構２基、土坑２基、ピット３基が検出された。遺物については、土師器坏・甕・台付甕・甑、須恵器蓋・坏・甕・長頸壺、土錘、刀子、磨石等が出土し、その出土量は、コンテナ（大きさ：縦 34 ㎝、横 54 ㎝、深さ 15 ㎝）にして１箱であった。特筆すべきは、須恵器脚付小埦の出土であるが、これは仏具の供物をのせた器の如くである。



土層説明（A–A'、B–B'、C–C'、D–D'）
SI1埋土

1	浅黄色土（カマド構築土崩落土）	焼土粒わずか、炭化物粒若干含
2	にぶい赤褐色土	焼土塊・粒多量、炭化物粒わずか含
3	にぶい褐色土	焼土粒多量含
4	灰黄褐色土	焼土粒わずか含
5	褐灰色土	焼土粒多量含、灰混
6	暗灰黄色土	にぶい黄橙色土粒子若干、焼土粒わずか含、灰混
7	灰黄褐色土	焼土粒わずか含
8	灰褐色土	焼土粒若干含
9	灰黄褐色土	焼土粒わずか含
10	褐灰色土	焼土粒わずか含
11	灰黄褐色土	浅黄色粘質土ブロック小少量、焼土塊・粒多量、炭化物粒若干含
12	黒褐色土	浅黄色粘質土粒子多量、焼土粒少量含
13	灰黄褐色土	黄灰色土ブロック若干、焼土粒多量含
14	灰褐色土	にぶい黄橙色土微粒子わずか、焼土粒若干、炭化物粒わずか含
15	黒褐色土	にぶい黄橙色土微粒子若干、焼土粒・炭化物粒若干含
16	黒褐色土	にぶい黄橙色土ブロック大・粒子わずか、焼土粒若干、炭化物粒わずか含
17	黒褐色土	にぶい黄褐色帯びる、にぶい黄橙色土ブロック小わずか、淡黄色粘土ブロック小わずか、焼土粒少量、炭化物粒若干含
18	黒褐色土	にぶい黄橙色土微粒子若干、焼土粒少量、炭化物粒若干含
19	灰褐色土	にぶい黄橙色土微粒子若干、焼土粒多量、炭化物粒わずか含
20	黒褐色土	にぶい黄橙色土粒子若干、焼土粒・炭化物粒若干含、灰混
21	褐灰色土	にぶい黄橙色土粒子若干含
22	黒褐色土	にぶい黄橙色土ブロック大小若干、焼土粒わずか含
23	灰黄褐色土	にぶい黄橙色土微粒子わずか、焼土粒・炭化物粒わずか含
24	褐灰色土	にぶい黄橙色土ブロック大多量、焼土粒わずか、炭化物粒ごくわずか含
25	褐灰色土	にぶい黄橙色土粒子多量含
26	淡黄色粘土	
27	黒褐色土（遺物包含層）	にぶい黄橙色土ブロック・粒子若干、焼土粒若干含
28	灰黄褐色土	焼土粒若干含
29	黒褐色土	焼土粒わずか、土器含
30	黒褐色土	ややしまる、焼土粒ごくわずか、土器含
31	オリーブ黒色土	焼土粒ごくわずか含
32	灰黄褐色土	にぶい黄橙色土粒子わずか、焼土粒比較的多く、炭化物粒若干、土器含
33	黒褐色土	にぶい黄橙色土粒子若干、焼土粒・炭化物粒わずか含
34	暗灰黄色土	にぶい黄橙色土粒子わずか、焼土粒わずか含
35	暗灰黄色土	にぶい黄橙色土非常に多く、黒色土粒子少量、焼土粒・炭化物粒わずか含
36	黒褐色土	黒色土ブロック多量、にぶい黄橙色土粒子わずか、焼土粒・炭化物粒わずか含
37	灰黄褐色土	にぶい黄橙色土微粒子若干、焼土塊・粒若干含
38	にぶい黄褐色土	灰黄褐色帯びる、にぶい黄橙色土粒子・微粒子若干、焼土塊・粒若干、炭化物粒わずか含
39	黒褐色土	焼土粒少量含
40	にぶい黄褐色土	にぶい黄橙色土粒子若干、焼土粒多量、炭化物粒わずか含
41	黒褐色土	にぶい黄橙色土ブロック大小少量、焼土粒若干、炭化物粒わずか含
42	黒褐色土	にぶい黄橙色土ブロック大・粒子多量、焼土粒・炭化物粒若干含
43	褐灰色土	にぶい黄橙色土ブロック大少量、黒褐色土粒子わずか、焼土粒若干含
44	灰黄褐色土	比較的しまる、炭化物多量に帯状に入る
45	黒褐色土	にぶい黄橙色土粒子若干、焼土粒わずか、黒褐色土粒子若干含
46	暗褐色土	にぶい黄橙色土粒子・微粒子若干、焼土粒若干含
47	黒褐色土	にぶい黄橙色土粒子少量、焼土粒・炭化物粒若干含
48	灰黄褐色土	にぶい黄橙色土ブロック小わずか含
49	にぶい黄褐色土	焼土粒わずか含
50	にぶい黄褐色土	にぶい黄橙色土微粒子多量含

黒塗り：根の攪乱　　焼土壁

0　2m　1:60

第 44 図　元境内遺跡第１号竪穴建物跡

3　遺構と遺物

⑴　竪穴建物跡

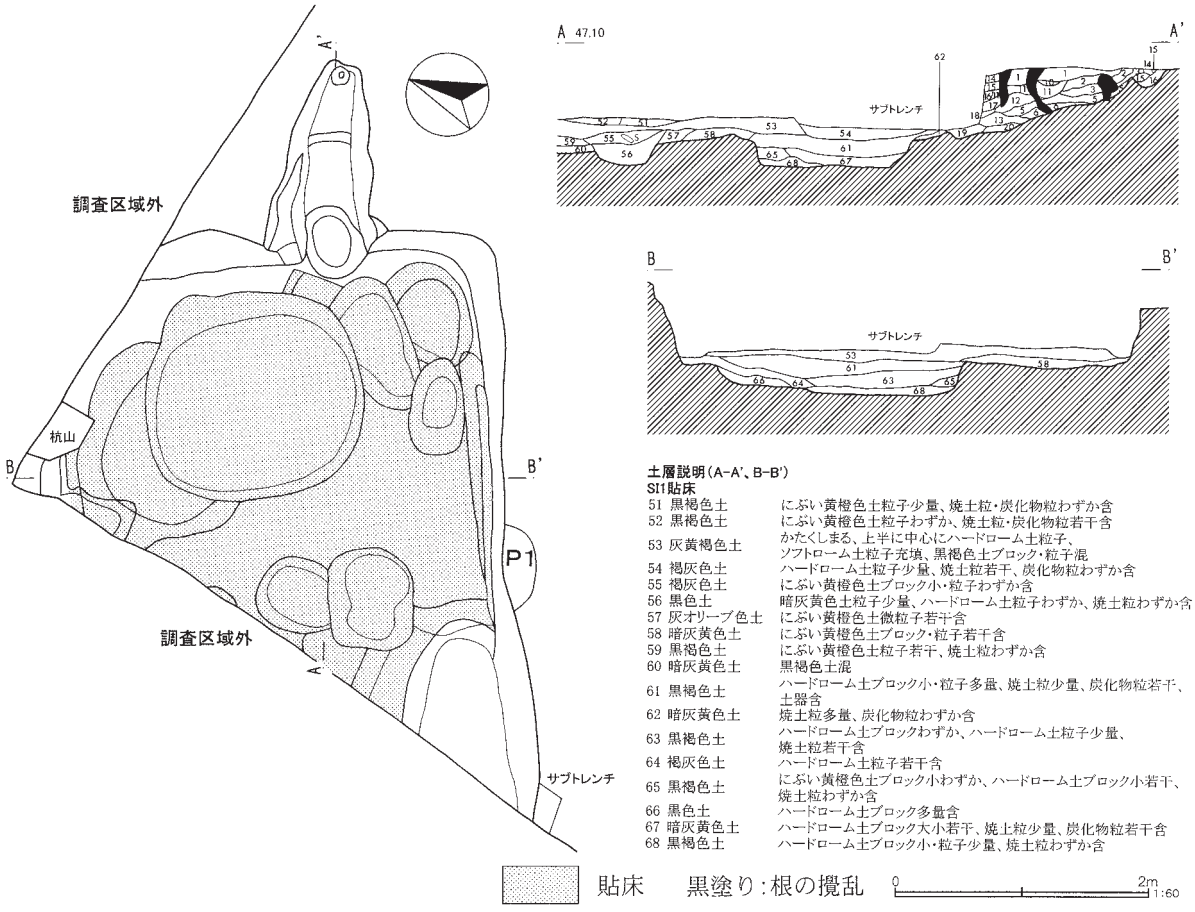
第１号竪穴建物跡（第 44 ～ 47 図、第 17 表）

調査区の西半部に位置する。ほぼＢ・Ｃ－２グリッド内にある。第１号ピットと重複関係にあり、第１号ピットを切っている。

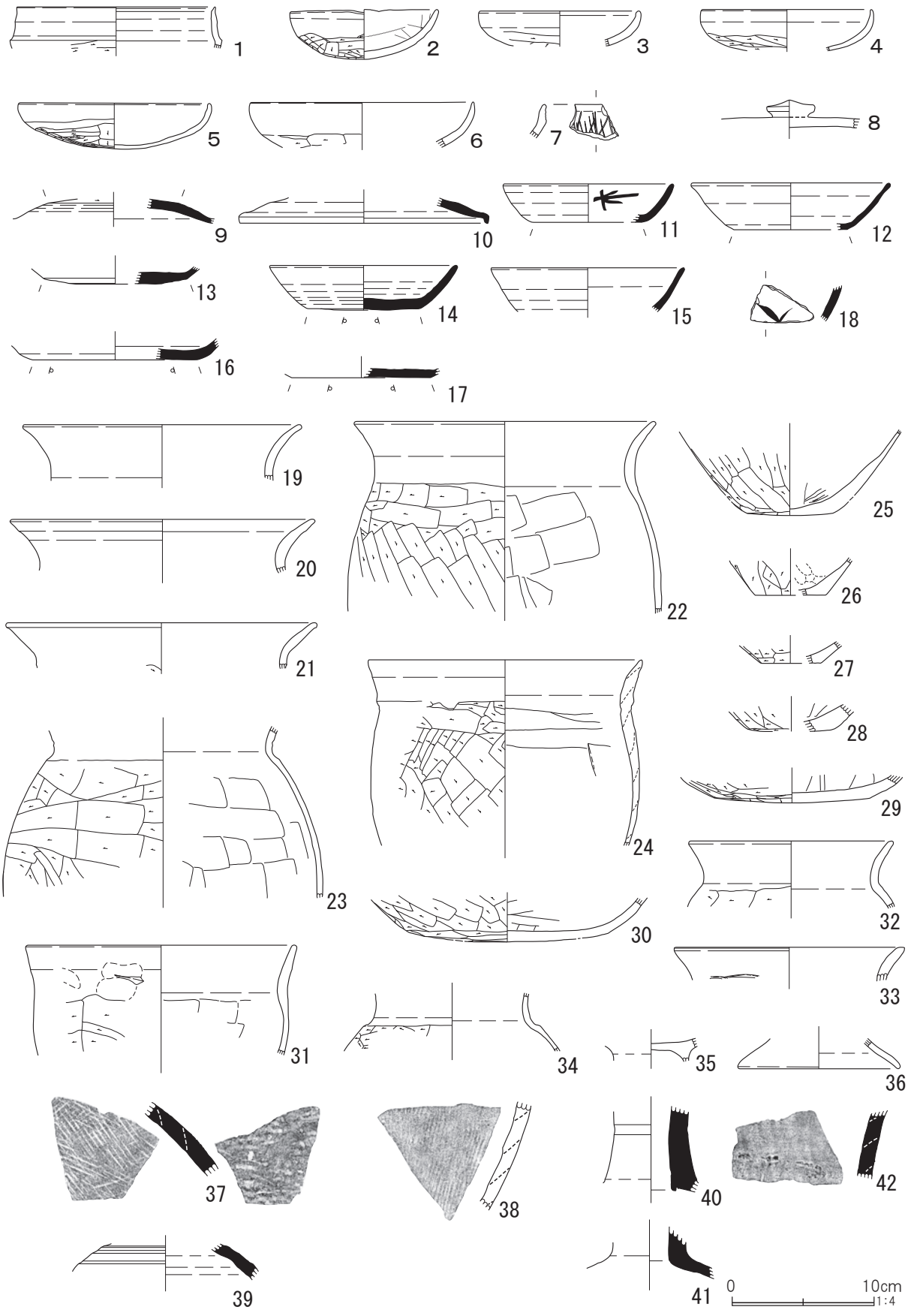
規模は、西部及び北部が調査区域外となっており、検出長軸最大 4.68 m（カマドの煙道部を含めると 6.03 m）、同短軸最大 3.87 mを測り、平面プランは、長方形を呈すると推定される。主軸方位は、N―70゜―Eを示す。

床までの深さは、土層断面観察から最大 47 ㎝を測る。埋土は、レンズ状及びほぼ水平に堆積していることから、自然堆積であると考えられる。

床面は、ほぼ平坦である。また、貼床構造と考えられ、床面のほぼ全体に掘方が確認され、土坑状の掘方は、主にカマド前及び検出南西隅に集中して位置する。掘方の構造は、床のほぼ全体を６～ 17 ㎝の深さに掘りくぼめ、さらに土坑状に最大で 27 ㎝の深さに掘りくぼめ、幾つかの土坑が重複する平面形を呈する。埋土をみると、おおむねにぶい黄橙色土（ソフトローム土）ブロック・粒子、ハードローム土大小ブロック・粒子、焼土粒・炭化物粒を含む黒褐色土で土坑状の掘方を埋めた後、ハードローム土粒子・にぶい黄橙色土（ソフトローム土）粒子を含んだ黒褐色土・褐灰色土・灰黄褐色土・暗灰黄色土で平面的に埋め、一部堅く搗き固めて床面を形成したと考えられる。



第 45 図　元境内遺跡第１号竪穴建物跡掘方



第 46 図　元境内遺跡第 1 号竪穴建物跡出土遺物(1)

第 17 表　元境内遺跡第 1 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 46・47 図）

図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器 坏	(13.40)	残存高 2.90	—	BEGN	A	赤褐色 地色：橙色	口縁部 5%	内外面に赤彩。
2	土師器 坏	10.30	3.50	—	ABEHJKM	A	外面：明褐色、にぶい黄褐色 内面；明褐色、にぶい黄褐色、明赤褐色	ほぼ 100%	
3	土師器 坏	(11.20)	残存高 2.40	—	BEGI	B	橙色、にぶい黄橙色	15%	
4	土師器 坏	(11.90)	残存高 2.90	—	BEIKM	A	橙色	20%	
5	土師器 坏	13.30	3.20	—	ABDEGHKN	A	外面：橙色、褐色 内面：明赤褐色、褐色	70%	
6	土師器 坏	(15.60)	残存高 3.20	—	ABCIKN	B	橙色	口縁部～体部上半 20%	
7	土師器 坏	—	—	—	ABHM	A	明赤褐色	口縁部破片	内面に放射状暗文。
8	須恵器 蓋	つまみ径 3.40	残存高 1.40	—	ADEFGHN	C	外面：橙色 内面：にぶい褐色	つまみ部 100% ～天井部 20%	南比企産。
9	須恵器 蓋	—	残存高 1.40	—	ABFGN	A	灰色	15%	南比企産。
10	須恵器 蓋	(17.40)	残存高 1.80	—	ABFGN	B	黄灰色	口縁部 10%以下	南比企産。
11	須恵器 坏	(11.80)	2.70	(7.60)	ABD	A	灰白色	15%	内面に墨書「木」。
12	須恵器 坏	(13.90)	3.30	(8.00)	ABDFH	A	青灰色	10%	南比企産。
13	須恵器 坏	—	残存高 1.10	(10.15)	ADFGH	B	外面：青灰色、灰オリーブ色 内面：青灰色、灰褐色	底部 30%	南比企産。
14	須恵器 坏	(13.10)	3.15	7.75	ABFGN	B	青灰色、灰黄色	40%	南比企産。
15	須恵器 坏	(13.60)	残存高 3.10	—	ABDFGN	A	青灰色	25%	口縁部外面に焼きだすき。 南比企産。
16	須恵器 坏	—	残存高 1.00	(11.60)	ABDF	B	外面：灰白色、灰黄色 内面：灰黄色	底部 10%	南比企産。
17	須恵器 坏	—	残存高 0.25	(9.80)	ADFHM	B	灰白色	底部 25%	南比企産。
18	須恵器 坏	—	—	—	ABDF	B	灰白色	体部破片	外面に墨書「□（判読不明）」。南比企産。
19	土師器 甕	(19.20)	残存高 3.90	—	ABEGK	A	明赤褐色	口縁部 10%以下	
20	土師器 甕	(21.20)	残存高 3.60	—	ABEIKN	A	橙色、にぶい褐色	口縁部 20%	
21	土師器 甕	(21.80)	残存高 3.20	—	AEGHJ	B	橙色	口縁部 10%以下	
22	土師器 甕	(21.00)	(13.40)	—	ABDGHIK	A	外面：橙色、明赤褐色 内面：明赤褐色、にぶい赤褐色	口縁部～胴部上半 30%	
23	土師器 甕	頸部径 (15.40)	残存高 11.70	—	AEGHJKM	B	外面：橙色 内面：橙色、明赤褐色	胴部上半 15%	
24	土師器 甕	(19.20)	残存高 13.10	—	AEGMN	A	赤褐色	口縁部～胴部上半 10%	
25	土師器 甕	—	残存高 5.90	(6.00)	ABEI	B	外面：褐色、黒褐色 内面：黒褐色	底部～胴部下半 15%	
26	土師器 甕	—	残存高 2.40	(4.90)	ABEGIK	B	外面：にぶい褐色、灰黄褐色 内面：橙色	底部付近 20%	
27	土師器 甕	—	残存高 1.20	(4.30)	ABEGM	C	外面：灰褐色 内面：灰黄褐色	底部付近 25%	
28	土師器 甕	—	残存高 1.40	(5.60)	ABEHIM	B	外面：赤褐色、黒褐色 内面：灰褐色	底部 20%	
29	土師器 甕	—	残存高 1.80	(11.00)	ABGKM	B	にぶい赤褐色、黒褐色、赤褐色	底部 35%	
30	土師器 甕	—	残存高 3.10	14.20	ADEGHMN	B	外面：にぶい赤褐色、明赤褐色 内面：にぶい赤褐色	底部 100%	
31	土師器 甑	(18.70)	残存高 7.80	—	ABEGJKM	A	外面：橙色、にぶい赤褐色 内面：橙色	口縁部～胴部上半 15%	
32	土師器 台付甕	(14.20)	(4.60)	—	ABDHJ	C	外面：にぶい黄褐色、にぶい橙色 内面：にぶい橙色、灰褐色	口縁部 20%	
33	土師器 台付甕	(16.20)	残存高 2.30	—	ABDGHM	B	にぶい橙色、橙色	口縁部 10%以下	
34	土師器 台付甕	頸部径 (11.00)	残存高 4.00	—	ABDJKM	C	外面：橙色 内面：明黄褐色、橙色	頸部～胴部上半 20%	
35	土師器 台付甕	—	残存高 1.00	—	ABEKN	B	明赤褐色	台部破片	
36	土師器 台付甕	—	残存高 2.10	(11.10)	ABDGK	A	外面：橙色、にぶい褐色 内面：橙色	台部 15%	
37	須恵器 甕	厚さ 0.95 ～ 1.00			ABEGLN	B	灰色	胴部破片	末野産か。
38	須恵器 甕	厚さ 0.80 ～ 1.00			ABDHIMN	C	灰黄色	胴部破片	末野産か。
39	須恵器 長頸壺	—	残存高 1.90	—	ABDG	A	灰白色	胴部上半破片	
40	須恵器 長頸壺	頸部最大径 (6.70)	残存高 5.00	—	ABFGN	B	青灰色	頸部 25%	南比企産。
41	須恵器 長頸壺	頸部最大径 (5.50)	残存高 1.80	—	ADGLN	B	外面：暗灰色 内面：青灰色	頸部下半 25%	末野産か。

42	須恵器 壺	厚さ 0.90 ～ 1.00			ADEGKL	C	外面：灰黄色 内面：にぶい黄色	頸部破片	
43	須恵器 壺	胴部最大径 (20.4)	残存高 10.0	(14.60)	ABLN	A	灰白色	胴部下半 40%	一部に自然釉。
44	須恵器 脚付小椀	7.20	3.30	4.30	ABDFL	A	外面：灰色、暗灰色 内面：灰色	90%	外面全体・脚部内面に自然釉。 南比企産。 仏具か。
45	磨石	長さ 10.6　幅 9.9　厚さ 2.35　重量 420 g							砂岩。
46	土錘	長さ 4.4　幅 1.8　厚さ 1.5　孔径 0.5　重量 12g					にぶい黄橙色	ほぼ 100%	
47	刀子	長さ 5.9　幅 1.1　厚さ 0.4　重量 9 g						茎部の一部	

壁溝は、長軸と考えられる南壁の一部でのみ確認され、その規模は、全長 2.16 m、幅５～ 18cm、深さ８cmを測る。なお、北壁の一部で壁溝と思われる溝が確認され、その規模は、検出長 0.35 m、幅 20 cm前後、深さ５cmを測る。

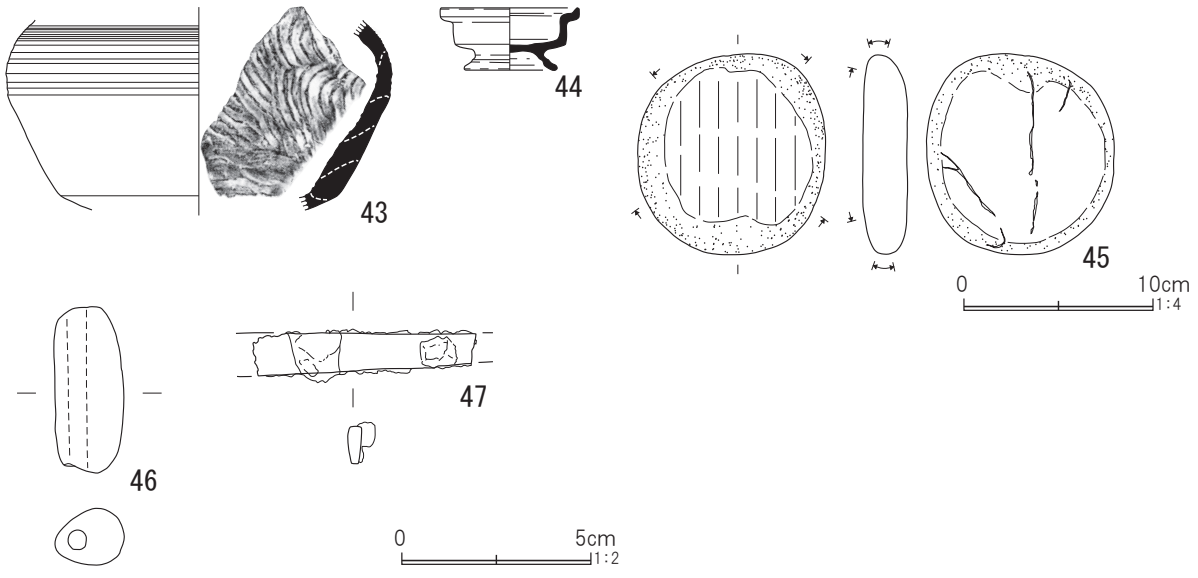
柱穴と考えられるピットは、検出されなかった。

カマドは、短軸と考えられる東壁に、炊口から煙出しと考えられる立ち上がりまで検出された。その規模は、検出長 1.35m、焚口幅 0.98m を測る。煙道は、やや平坦な箇所もあるが、炊口から検出東端に向かって緩やかな傾斜をもって立ち上がり、東端が小規模なピット状になる断面構造である。カマドの炊口には、長軸 0.58 m、短軸 0.45 m、深さ７cmのピット状の掘り込みが検出され、灰混じりの埋土に焼土粒を多量、炭化物粒を若干含んでいた。なお、カマド袖の痕跡は検出されなかった。

貯蔵穴は検出できなかったが、南壁の南西隅に土坑が検出された。その規模は、検出長軸最大 1.60 m、同短軸 0.77 m、深さ 0.30 mを測る。

出土遺物は、土師器坏・甕・台付甕・甑、須恵器蓋・坏・壺・瓶・甕、土錘、刀子等が出土し、主にプランの西半において検出された。なお、須恵器には、仏具と考えられる形態の脚（器台）付きの小埦が見られた。

時期は、やや時期幅あるが、おおむね７世紀末～８世紀前半と考えられる。



第 47 図　元境内遺跡第１号竪穴建物跡出土遺物(2)

⑵　竪穴遺構

第１号竪穴遺構（第 48 図）

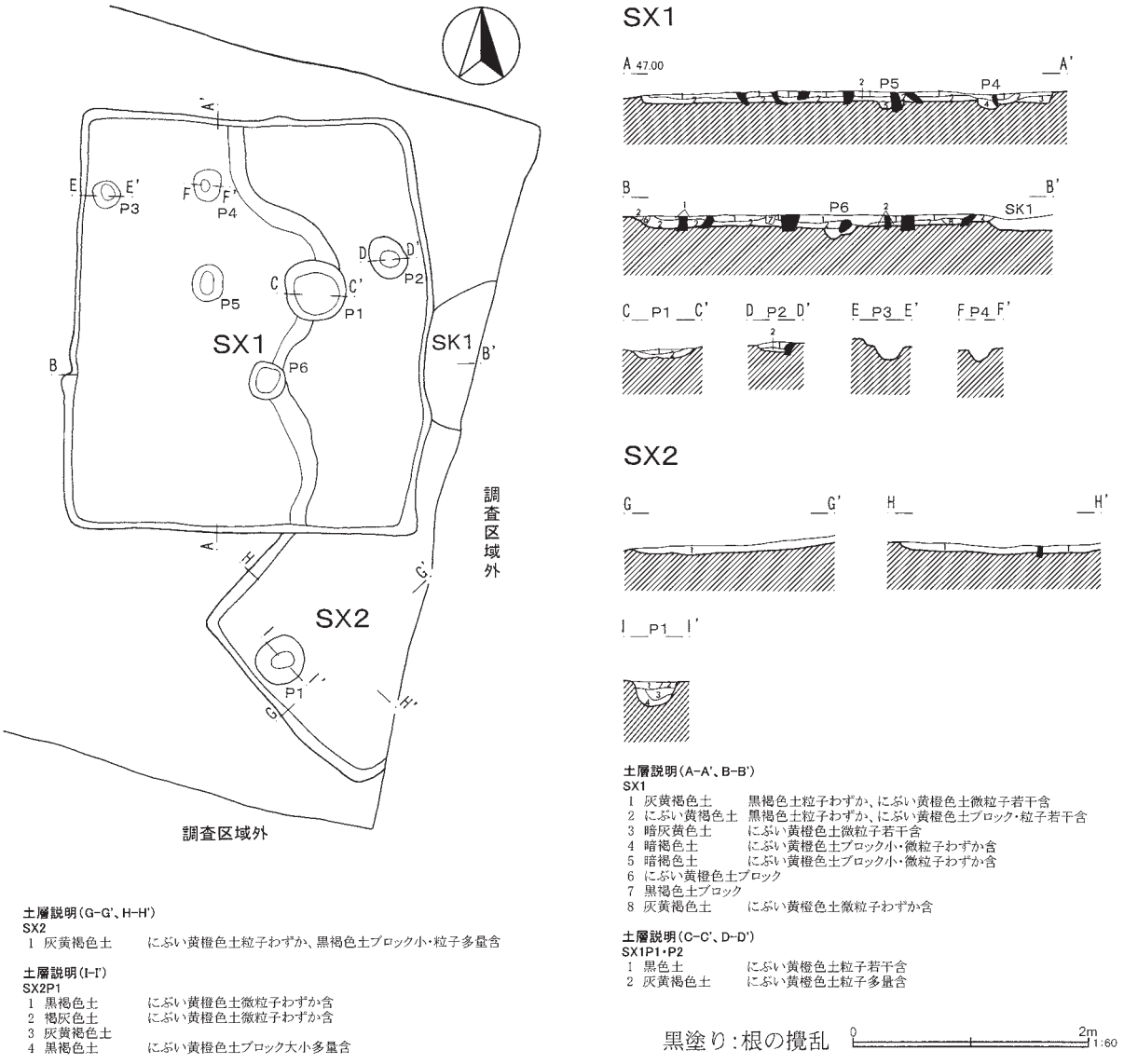
調査区の北東部に位置する。Ａ・Ｂ－２・３グリッド内にある。第２号竪穴遺構及び第１号土坑と重複関係にあり、両遺構を切っている。

規模は最大で、長軸 3.55 ｍ、短軸 3.12 ｍを測る。平面プランは、長方形を呈する。深さは、確認面から、最深で 12 ㎝を測る。長軸の主軸方位は、ほぼ北を示す。

埋土は、一部レンズ状であるが、ほぼ全体が水平に堆積していることから、自然堆積であると考えられる。

床面は、東半が一段やや高いが、各々の段はほぼ平坦である。床面には、ピットが６基検出され、各々の規模は次のとおりである。Ｐ１は最も大きく、径 51 ㎝、深さ７㎝、Ｐ２は長軸 35 ㎝、短軸 29 ㎝、深さ８㎝、Ｐ３は径 22 ㎝、深さは最深で 20 ㎝、Ｐ４は長軸 26 ㎝、短軸 24 ㎝、深さ 10 ㎝、Ｐ５は長軸 31 ㎝、短軸 25 ㎝、深さ６㎝、Ｐ６は径 30 ㎝、深さは最深で８㎝を測る。

出土遺物は、土師器坏・甕、須恵器坏の破片が検出されたが、図示できなかった。



土層説明(G-G'、H-H')
SX2
1 灰黄褐色土　にぶい黄橙色土粒子わずか、黒褐色土ブロック小・粒子多量含

土層説明(I-I')
SX2P1
1 黒褐色土　にぶい黄橙色土微粒子わずか含
2 褐灰色土　にぶい黄橙色土微粒子わずか含
3 灰黄褐色土
4 黒褐色土　にぶい黄橙色土ブロック大小多量含

土層説明(A-A'、B-B')
SX1
1 灰黄褐色土　黒褐色土粒子わずか、にぶい黄橙色土微粒子若干含
2 にぶい黄褐色土　黒褐色土粒子わずか、にぶい黄橙色土ブロック・粒子若干含
3 暗灰黄色土　にぶい黄橙色土微粒子若干含
4 暗褐色土　にぶい黄橙色土ブロック小・微粒子わずか含
5 暗褐色土　にぶい黄橙色土ブロック小・微粒子わずか含
6 にぶい黄橙色土ブロック
7 黒褐色土ブロック
8 灰黄褐色土　にぶい黄橙色土微粒子わずか含

土層説明(C-C'、D-D')
SX1P1・P2
1 黒色土　にぶい黄橙色土粒子若干含
2 灰黄褐色土　にぶい黄橙色土粒子多量含

黒塗り:根の攪乱　0　2m　1:60

第 48 図　元境内遺跡第１・２号竪穴遺構

時期は、おおむね８世紀前半と考えられる。

第２号竪穴遺構（第 48 図）

調査区の南東部に位置する。ほぼＡ－２・３グリッド内にある。第１号竪穴遺構及び第１号土坑と重複関係にあり、両遺構に切られている。

規模は、東部が調査区域外となっており、検出長軸最大 2.75 ｍ、短軸 2.00 ｍを測る。平面プランは、長方形を呈すると考えられる。深さは、確認面から、最深で７㎝を測る。長軸の主軸方位は、Ｎ―44°―Ｅを示す。

埋土は単層で、水平に堆積していることから、自然堆積であると考えられる。

床面は、ほぼ平坦である。床面には、ピットが１基（Ｐ１）検出され、その規模は、径 40 ㎝、深さ 20 ㎝を測る。

出土遺物は、土師器甕の破片が検出されたが、図示できなかった。

時期は、不明である。

⑶　土坑

第１号土坑（第 49 図）

調査区の北西部に位置する。Ａ－２グリッド内にある。第１号竪穴遺構と重複関係にあり、本遺構が切られている。

規模は、東部が調査区域外となっており詳細は不明であるが、検出長軸最大 1.33 ｍ、同短軸最大 0.50 ｍを測る。平面プランは、プランが確認できた箇所でやや不正形な楕円形を呈する。深さは、土層断面観察から、最深で 18 ㎝を測る。

埋土は、ほぼレンズ状に堆積していることから、自然堆積であると考えられる。

掘方は、船底状を呈する。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、不明である。

第２号土坑（第 49 図）

調査区の南西隅に位置する。Ｃ－３グリッド内にある。重複関係にある遺構はない。

規模は、西部及び南部が調査区域外となっており詳細は不明であるが、検出長軸最大 0.55 ｍ、同短軸最大 0.53 ｍを測る。平面プランは、隅丸方形または円形を呈すると推定される。深さは、確認面から、最深で 60 ㎝を測る。

埋土は、レンズ状及びほぼ水平に堆積していることから、自然堆積であると考えられる。

掘方は逆台形状を呈し、床面はほぼ平坦である。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、不明である。

⑷　ピット

第１号ピット（第 49 図）

調査区の西部に位置する。Ｂ－２グリッド内にある。第１号竪穴建物跡と重複関係にあり、本遺構が切られている。

規模は、第１号竪穴建物跡と重複関係にあり詳細は不明であるが、検出長軸最大 0.70 ｍ、同短軸最

大 0.36 mを測る。平面プランは、プランが確認できた箇所で楕円形を呈する。深さは、確認面から最深で 36 cmを測る。

埋土は、ほぼレンズ状に堆積していることから、自然堆積であると考えられる。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、不明である。

第２号ピット（第 49 図）

調査区の中央部南端付近に位置する。Ｂ－３グリッド内にある。重複関係にある遺構はない。

規模は、長軸 0.27 m、短軸 0.20 mを測る。平面プランは、隅丸方形状の楕円形を呈する。深さは、確認面から最深で 16 cmを測る。

埋土は、レンズ状に堆積しているが、中央部が柱痕跡状であることから、本遺構は柱穴の可能性が考えられる。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、不明である。

第３号ピット（第 49 図）

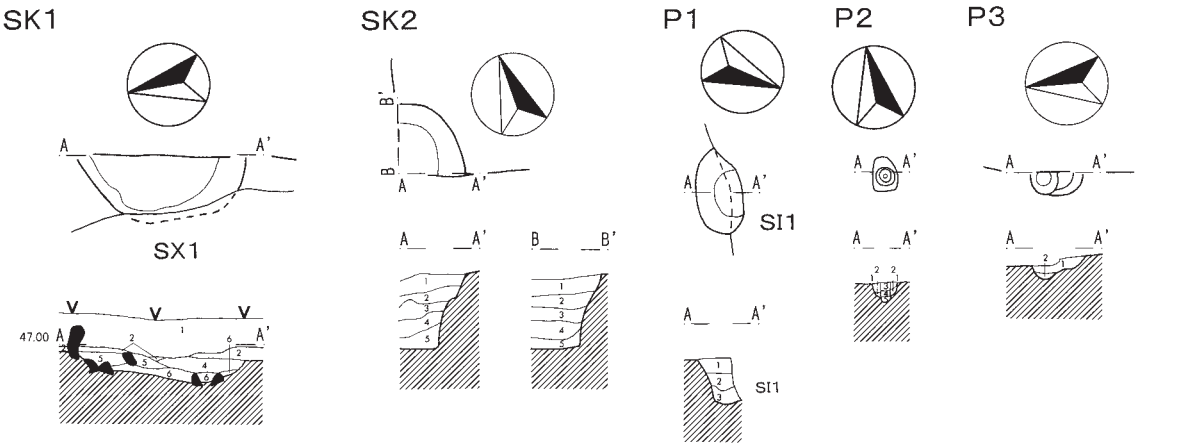
調査区の北東部に位置する。Ａ－２グリッド内にある。重複関係にある遺構はない。

規模は、東部が調査区域外となっており詳細は不明であるが、検出長軸最大 0.42 m、短軸 0.19 mを測る。平面プランは、楕円形を呈するが、北側が一段深くなるものである。深さは、確認面から最深で 11 cmを測る。

埋土は、ほぼ水平に堆積していることから、自然堆積であると考えられる。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、不明である。

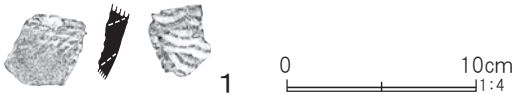


第 49 図　元境内遺跡第１・２号土坑、第１～３号ピット

⑸　遺構外出土遺物

表土除去の際に出土した遺物を１点掲載する（第 50 図）。

１　須恵器甕　厚さは 0.5 ～ 1.0 ㎝。胎土は白色粒子、赤褐色粒子、片岩を含む。色調は暗青灰色。焼成は普通。残存率は胴部破片。調整については、外面が平行叩き後、回転ナデを施す。内面は青海波あて具痕あり。



第 50 図　元境内遺跡遺構外出土遺物

４　調査のまとめ

元境内遺跡における調査は、過去に５次に亘る調査が実施され、今回の調査は、第６次調査に当たる。それでは、まず第１～５次調査の成果を概観しておきたいと思う。

第１次調査は、遺跡範囲の中央部北寄り、台地の平坦面の地点を調査している。調査は、埼玉県中世城館跡調査の一環として実施されたもので、増田館跡の伝承が残る箇所において行われた。土塁及び堀を対象にしてトレンチによる調査であり、箱薬研形の堀が検出され、銭貨 56 枚、板石塔婆、陶器（常滑産）が出土している。土塁では版築の痕跡が認められず、堀・土塁とも大型の館にしては小規模であり、現存する文珠寺に関連する寺域の遺構である可能性が指摘されている。

第２次調査は、遺跡範囲の南東部及び南西部、台地の緩やかな南斜面の地点を調査している。調査では、平安時代の集落跡の一部が確認され、当該期の竪穴住居跡２軒が検出されている。

第３次調査は、遺跡範囲の中央部北寄り、台地の平坦面の地点を調査している。第１次調査地点に隣接する箇所で、増田館跡の内郭及び堀を調査し、中世の塚、近世の土坑、ピット、溝跡等の遺構が検出され、中世から近世にかけての陶磁器や銭貨、中世の板石塔婆や五輪塔、近世の青銅や鉄製の金属製品等が出土している。

第４次調査は、遺跡範囲の南西部、台地の緩やかな南斜面の地点を調査している。調査では、古墳時代の竪穴住居跡 21 軒のほか、縄文時代中期の集石遺構１基等の遺構が検出され、古墳時代の土師器・須恵器・土錘のほか、当該期の住居跡からは鉄製鋤先や炭化した桃の種子、内部から種子が出土した須恵器大甕破片等の遺物が出土している。

第５次調査は、遺跡範囲の南西端付近、第４次調査地点よりさらに高度が下がる台地の緩やかな南斜面で調査をしている。調査では、古墳時代後期の竪穴住居跡８軒のほか、土坑７基、溝跡１条等の遺構が検出され、住居跡からは当該期の土師器・須恵器のほか、石製紡錘車や鉄鏃等が出土している。

次に、今回の第６次調査であるが、小規模な調査ではあったが、おおむね奈良時代前半（７世紀末～８世紀前半）の竪穴建物跡１棟（他の記載では、竪穴住居跡としているものと同義）が検出された。これは、これまでの調査と比べると新たな知見であり、これまで空白であった時期を埋め、本遺跡における集落の様相を考える上で貴重な情報を提供できたと考える。

最後に、周辺の遺跡における状況も合わせて、古墳時代後期から平安時代までの集落について言及してみたいと思う。本遺跡の周辺には、同地形に立地する遺跡が東西に隣接して並び、東から西へと本遺跡、諏訪脇遺跡、野原宮脇遺跡と連続している。そして、西接する諏訪脇遺跡では、古墳時代後期及び平安時代の集落が台地の南縁の緩やかな斜面及び平坦面に営まれていたことが確認されている。また、そのさらに西に隣接する野原宮脇遺跡では、古墳時代後期から平安時代にかけての集落が、諏訪脇遺跡と同様の地形である台地の南縁の緩やかな斜面及びやや奥まった平坦面に営まれていたことが確認されている。これらの状況は、最も東に所在する本遺跡における状況ともほぼ合致し、同様な集落形成の傾向が見られる。

以上、本遺跡の第２・４～６次調査の成果及び隣接する同地形に立地する２遺跡の調査成果から、東西に流れる河川が開析した帯状の沖積地を臨む台地の緩やかな南斜面及びやや奥まった平坦面には、古墳時代後期から平安時代にかけての集落が営まれていたことが推定でき、集落の適地として選地され、長期にわたり集落が営まれていったものと考えられる。

なお、上記の３遺跡の西には近接して、いわゆる「踊る埴輪（男女）」を出土した前方後円墳・野原古墳が属する野原古墳群が展開しているが、その築造時期は６世紀後半～７世紀前半と考えられ、野原古墳を盟主墳とする 26 基以上で構成される群集墳である。また、野原古墳群分布域の東、本遺跡の範囲内にも野原古墳群とほぼ同時期の古墳群（野原東古墳群）も展開しており、３遺跡が所在する地区で集落が営まれた時期の前時代には、古墳が多数築造されていた場所であったことは興味深く、注目される。

主な引用・参考文献

江南町　1995 『江南町史』資料編１　考古

埼玉県教育委員会 1988 『埼玉の中世城館跡』

寺社下 博、新井　端　2009 『箕輪遺跡４次、５次　中廓遺跡３次　西浦遺跡　元境内遺跡４次　宮脇遺跡２次　諏訪脇遺跡』 熊谷市教育委員会

埼玉県教育委員会 1982 『埼玉県埋蔵文化財調査年報　昭和 57 年度』

埼玉県教育委員会 1984 『埼玉県埋蔵文化財調査年報　昭和 58 年度』

埼玉県教育委員会 1998 『埼玉県埋蔵文化財調査年報　平成８年度』

埼玉県教育委員会 2000 『埼玉県埋蔵文化財調査年報　平成 10 年度』

埼玉県教育委員会 2001 『埼玉県埋蔵文化財調査年報　平成 11 年度』

野 原 宮 脇 遺 跡



Ⅵ　野原宮脇遺跡の調査

1　発掘調査の概要

⑴　調査に至る経過

平成 26 年２月 10 日付けで、埼玉県教育委員会あてに、個人住宅建築に伴う、文化財保護法第 93 条第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出があった。

これを受けて、熊谷市教育委員会は、同年２月 26 日、３月 24 日に試掘調査を実施した。その結果、現地表面下 12 ～ 26 ㎝の深度から奈良･平安時代の遺構及び土器などの埋蔵文化財の所在が確認された。

その後、埋蔵文化財の所在が確認された旨を建築主に回答するとともに、その保存に関する協議を重ねたが、工事は保護層が設けられない工法で行うものであり、計画の変更はしない方針となったため、記録保存のための発掘調査の措置を講ずることとなった。

発掘調査は、平成 26 年３月 28 日付け熊教社埋第 1812 号で、文化財保護法第 99 条第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知が提出され、平成 26 年４月 10 日から開始した。

なお、埼玉県教育委員会から熊谷市教育委員会あてに、平成 26 年４月 10 日付け教生文第 4-1766 号で発掘調査実施の指示通知があった。

⑵　発掘調査、整理・報告書作成の経過

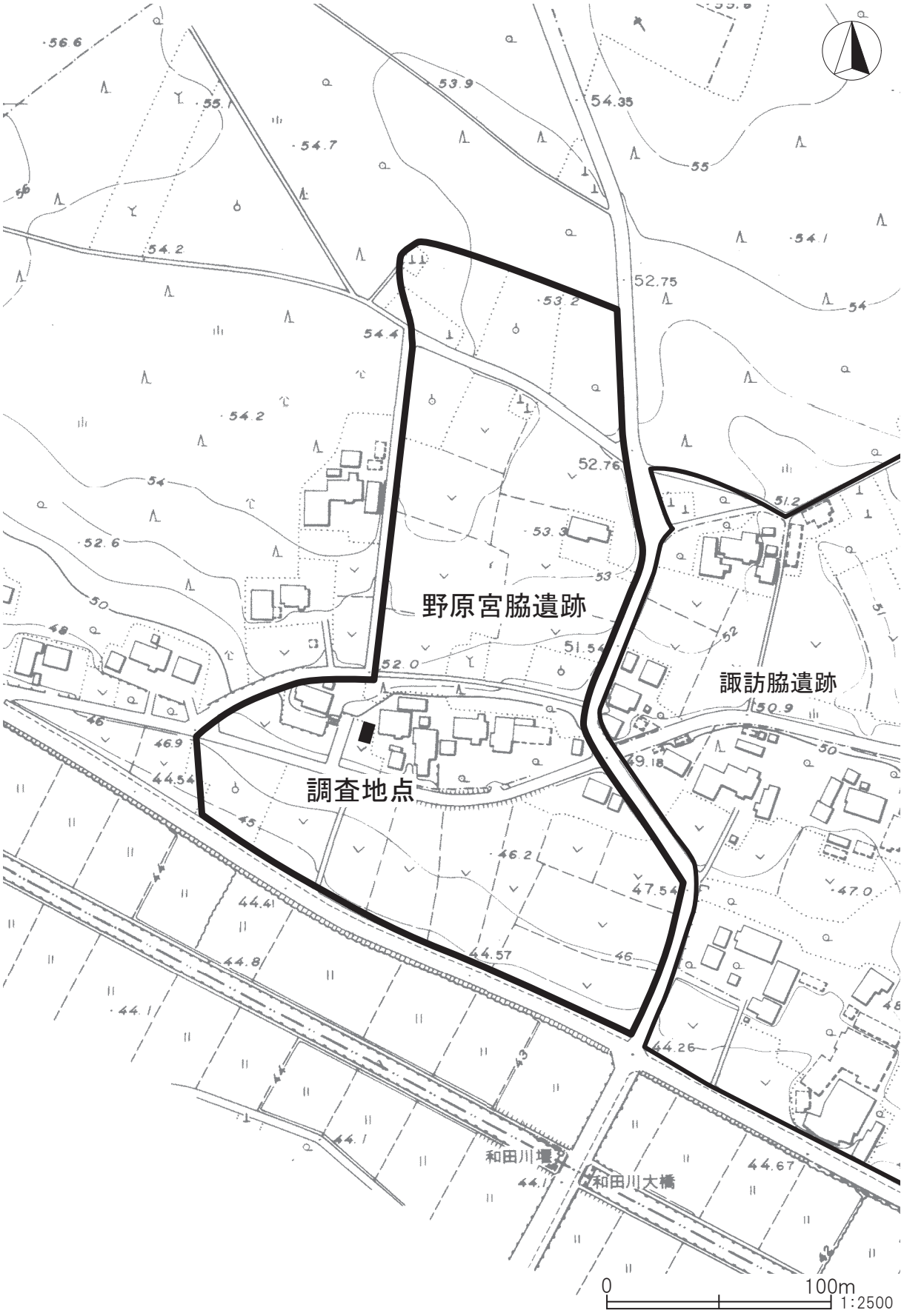
発掘調査は、平成 26 年４月 10 日から平成 26 年４月 22 日にかけて実施した。調査面積は、40.89 ㎡であった。

まず、平成 26 年４月 10 日に遺構確認面まで重機による表土剥ぎを行った。この時期には珍しく、降雨が続いたため、表土剥ぎに想定外の時間を要した。表土が剥ぎ終わったのち、翌日から遺構確認作業を行った。その際、溝跡、ピットなどが確認され、順次遺構の調査に着手した。そして、平成 26 年４月 22 日、調査のすべてを終了した。

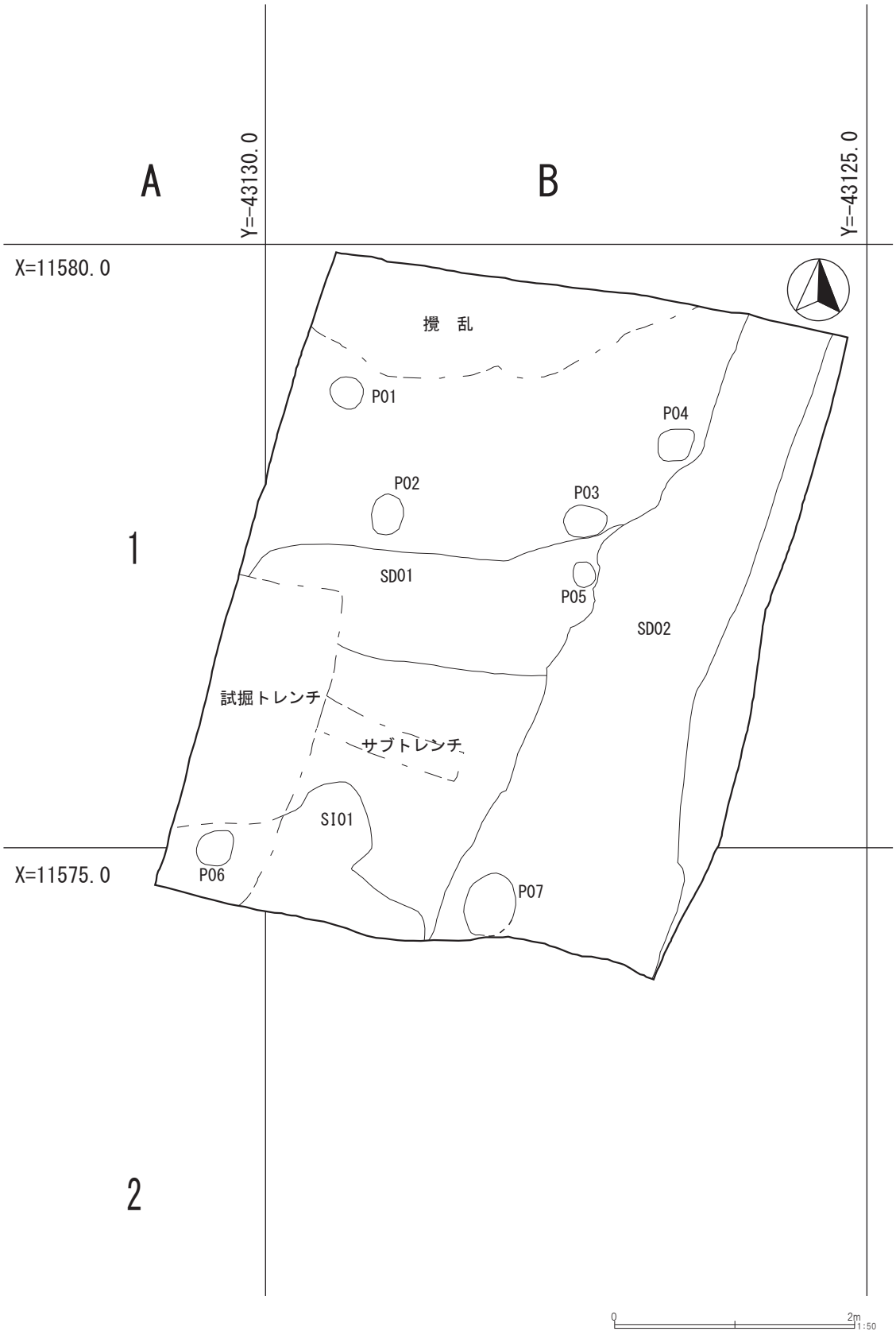
整理作業は、平成 30 年４月から始めた。まずは、遺物の洗浄・注記・復元を行い、その後 11 月までに順次､遺物の実測､拓本採りを行った。12 月からは遺構の図面整理作業を行い､遺構･遺物図面のトレース、遺構・遺物の図版組を行い、翌年２月下旬には、原稿執筆、割付等の作業をして、報告書の印刷に入り、校正を行った後、３月下旬に本報告書を刊行した。

⑶　発掘調査、整理・報告書刊行の組織

発掘調査は平成 26 年度に、整理・報告書作成は平成 30 年度に実施し、いずれも熊谷市教育委員会が主体者となって実施した。なお、組織については、第Ⅴ章の元境内遺跡と同一であることから記述を省略するため、第Ⅴ章の記述を参照されたい。



第 51 図　野原宮脇遺跡調査地点位置図



第 52 図　野原宮脇遺跡調査区全測図

2　遺跡の概要

⑴　野原宮脇遺跡について

野原宮脇遺跡は、同名称の遺跡があることから、混乱を防止するため、平成 28 年 11 月 1 日付けで宮脇遺跡から野原宮脇遺跡へ名称の変更をおこなっている。

本遺跡はこれまでに２次にわたる発掘調査が実施されており、第１次調査は昭和 58 年度に旧江南村教育委員会によって実施された。道路改良事業に伴う調査（300 ㎡）であり、縄文時代早期の竪穴住居跡１軒、古墳時代～平安時代の竪穴住居跡 11 軒が確認されている。続いて第２次調査は、平成 13 年度に旧江南町教育委員会によって実施された。個人住宅建築工事に伴う調査（200 ㎡）であり、古墳時代～平安時代の竪穴住居跡３軒が確認されている。

今回の調査でも時期不明であるが竪穴住居跡が１軒確認されていることから、本遺跡における集落の展開が確認できた大きな成果であった。

⑵　調査の方法

発掘調査の方法は、１辺５ｍのグリッド方式を用いて行い、調査区全体を網羅できる様に、北西隅をＡ－１として東へＡ・Ｂ、南へ１・２とし、Ａラインは北から南へＡ－１・Ａ－２と呼称した。Ｂライン以東もＡラインと同様に呼称し、グリッド設定を行った。

発掘調査は、重機による遺構確認面までの表土剥ぎを行った後、先述のグリッド設定を行った。なお、座標は、周辺の過去の発掘調査地点との照会を容易にするため、世界測地系による国家方眼座標に基づく基準点測量による。

重機による表土剥ぎを実施した後は、人力による遺構確認のための精査を実施し、確認された各遺構は各々手掘りを行った。原則として、遺物は必要に応じて写真撮影後、遺構ごとに一括して慎重に取り上げた。遺構は、写真撮影した後、実測を行った。そして、最後に遺構全体の写真撮影を行い、全測図の実測を行った。

⑶　検出された遺構と遺物

本調査によって検出された遺構は、竪穴住居跡１軒、溝跡２条、ピット７基であった。調査区の３分の１を第２号溝跡が占めており、北側は隣接する建物の造成にかかる攪乱が確認された。

遺物については、第２号溝跡から出土した遺物が大半で、その多くが土師器や須恵器などの細片であり、器形が分かるものは甕や皿などわずかであった。

検出した遺物量は、コンテナ（大きさ：縦 34 ㎝、横 54 ㎝、深さ 15 ㎝）にして１箱であった。

3　遺構と遺物

⑴　竪穴住居跡

第１号住居跡（第 53 図）

本調査区の南西に位置し、Ａ・Ｂ－１・２グリッドから検出した。第６号ピットと重複しており、第６号ピットに切られている。また、試掘調査トレンチによって、一部削平されている。

本遺構は、カマドを含めた住居跡の一部が検出された。平面プランは、北東隅が確認できたことから、隅丸方形と推定される。主軸方位はＮ－ 27°－Ｅを示すものと考えられる。

規模は、検出長軸 2.24 ｍ、短軸 1.12 ｍ、深さは 15 ㎝を測る。

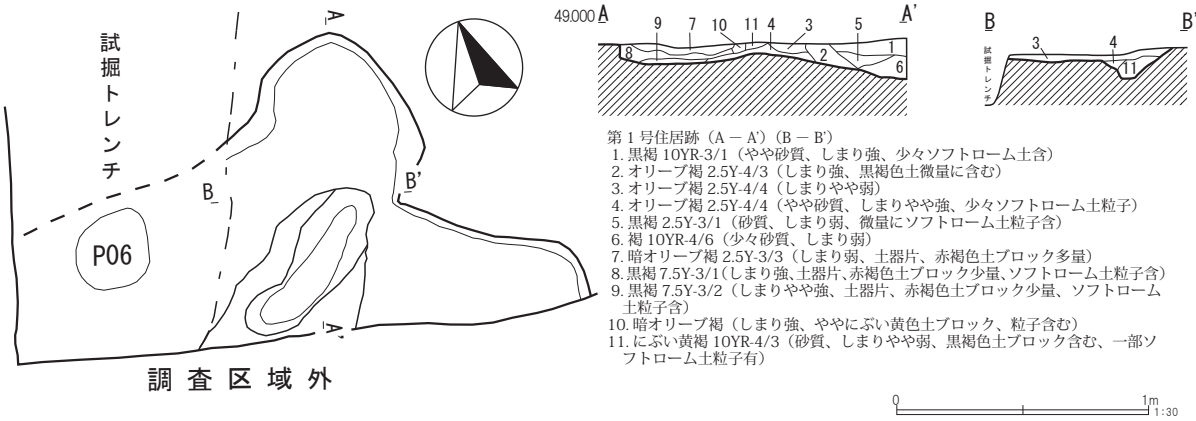
床面は、残存状態が悪いが、平坦である。

カマド前に土坑状の掘り込みがあり、用途は不明である。

埋土は、ほぼレンズ状に堆積していたことから自然堆積により埋まったものと推測できる。

出土遺物は、微細な土器片のみで、図示できなかった。

時期は、不明である。



第 53 図　野原宮脇遺跡第１号住居跡

⑵　溝跡

第１号溝跡（第 54・55 図）

本調査区の中央に位置し、Ａ・Ｂ－１グリッドから検出した。第２号溝跡、第３・５号ピットと重複関係にあり、いずれの遺構にも切られていた。また、試掘トレンチによって一部削平されている。

本遺構は、第２号溝跡に切られているが、東西方向に延伸し、調査区西壁手前で終結する。

規模は、検出長 2.62 ｍ程度、検出幅 1.35 ｍ～ 0.89 ｍを測り、深さは遺構確認面から 18 ㎝を測る。

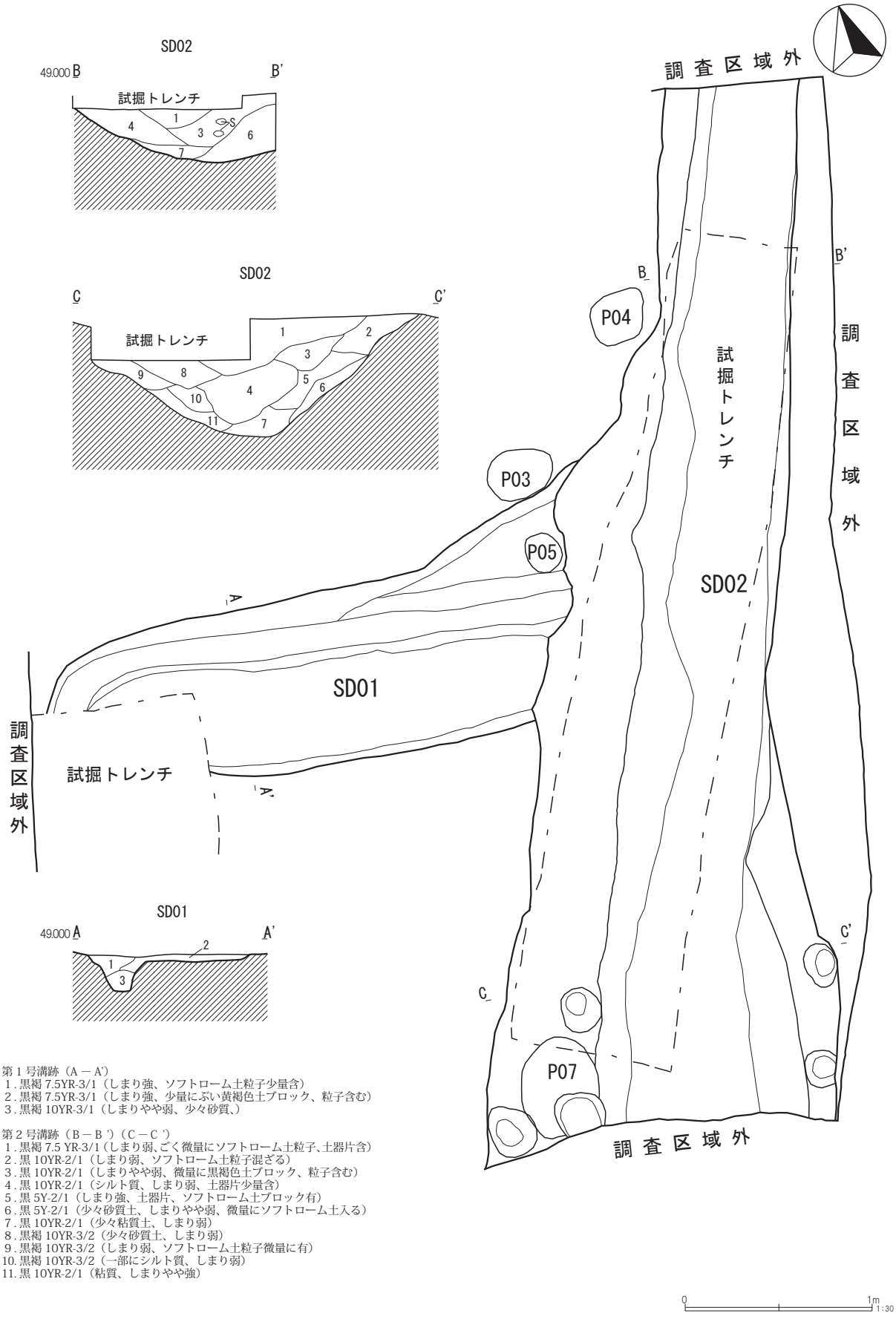
平面プランは、東部が幅広で、底面は、２段に落ち込み、１段目は５㎝の深さで平坦であり、さらに 13 ㎝の深さでＶ字状の落ち込みが確認できた。

埋土は、レンズ状に堆積していることから、自然堆積により埋まったものと推測できる。

用途は不明である。

出土遺物は、微細な土器片が多く、図示できたものはわずかであった。

時期は、不明である。



第１号溝跡（A － A'）
1.黒褐 7.5YR-3/1（しまり強、ソフトローム土粒子少量含）
2.黒褐 7.5YR-3/1（しまり強、少量にぶい黄褐色土ブロック、粒子含む）
3.黒褐 10YR-3/1（しまりやや弱、少々砂質、）

第２号溝跡（B － B '）（C － C '）
1.黒褐 7.5 YR-3/1（しまり弱、ごく微量にソフトローム土粒子、土器片含）
2.黒 10YR-2/1（しまり弱、ソフトローム土粒子混ざる）
3.黒 10YR-2/1（しまりやや弱、微量に黒褐色土ブロック、粒子含む）
4.黒 10YR-2/1（シルト質、しまり弱、土器片少量含）
5.黒 5Y-2/1（しまり強、土器片、ソフトローム土ブロック有）
6.黒 5Y-2/1（少々砂質土、しまりやや弱、微量にソフトローム土入る）
7.黒 10YR-2/1（少々粘質土、しまり弱）
8.黒褐 10YR-3/2（少々砂質土、しまり弱）
9.黒褐 10YR-3/2（しまり弱、ソフトローム土粒子微量に有）
10.黒褐 10YR-3/2（一部にシルト質、しまり弱）
11.黒 10YR-2/1（粘質、しまりやや強）

第 54 図　野原宮脇遺跡第１・２号溝跡

第２号溝跡（第 54・55 図）

本調査区の東部に位置し、Ｂ－１・２グリッドから検出した。第７号ピットと重複関係しており、第７号ピットに一部切られていた。調査区北壁から南北方向に延伸し、調査区南壁へ抜けている。

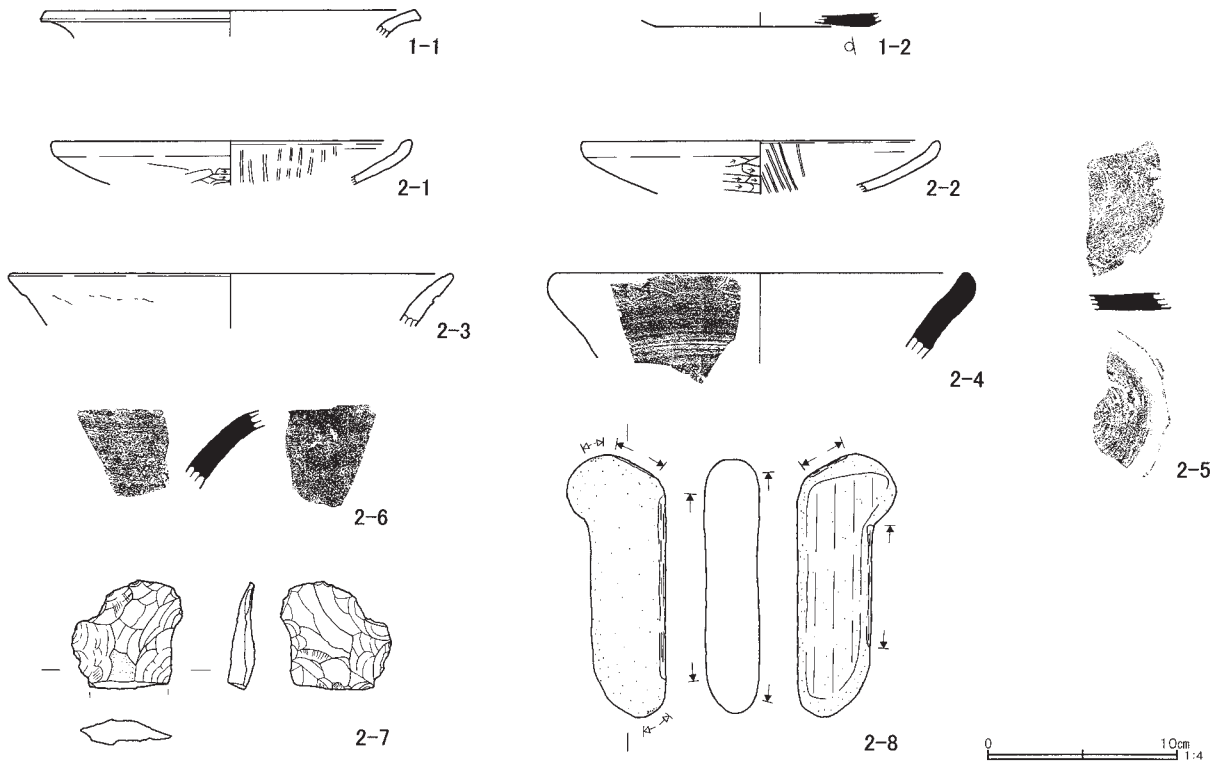
規模は、検出長 5.35 m程度、検出幅 1.83 m～ 0.95 mを測り、深さは遺構確認面から 60 ㎝程度を測る。

底面は、断面観察から北から南へ傾斜しており、地形に沿った溝跡であることがわかる。

断面形は、逆台形を呈するが、一部はU字状であった。

用途は不明であるが、導水のための水路であったのではないかと推定でき、調査区南壁付近のピット４基（２基対）は、溝を跨ぐための橋に伴う橋脚穴と考えられる。

埋土は、ややランダムであるが、時間をかけて自然堆積により埋まったものと推定できる。



第 55 図　野原宮脇遺跡溝跡出土遺物

第 18 表　野原宮脇遺跡溝跡出土遺物観察表（第 55 図）

No	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
1-1	SD01	土師器 甕	(20.2)	(1.4)	-	ABI	にぶい赤褐 5YR-5/4	B	口縁部破片		
1-2	SD01	須恵器 皿	-	(0.7)	(11.5)	AFN	灰 5Y-6/1	A	底部破片	回転ロクロ調整 底部糸切調整痕	
2-1	SD02	土師器 坏	(19.0)	(2.3)	-	ADI	にぶい赤褐 5YR-5/4	B	口縁部 10%	内面：放射線状暗文有	
2-2	SD02	土師器 皿	(19.0)	(2.7)	-	ABDIK	外面：褐 7.5YR-4/3 内面：にぶい赤褐 2.5YR-5/4	B	口縁部破片	内面：放射線状暗文有	
2-3	SD02	土師器 甕	(23.6)	(3.2)	-	ABEI	橙 7.5YR-6/6	B	口縁部 20%		
2-4	SD02	須恵器 壷	(21.8)	-	-	ABCIJ	灰 5Y-5/1	B	口縁部 10%	外面：指ナデ調整痕	
2-5	SD02	須恵器 高台皿？	-	-	(10.0)	ABD	外面：黄灰 2.5Y-5/1 内面：にぶい黄橙 10YR-7/3	B	底部 20%	回転ロクロ調整 底部台部剥離 底部回転ヘラケズリ	
2-6	SD02	須恵器 甕	-	-	-	AB	灰 N-5/	B	口縁部破片	外面：ナデ調整	
2-7	SD02	石斧	最大長　5.7　最大幅　5.3　最大厚　1.4　重さ　39.5 g								花崗岩
2-8	SD02	石製品	最大長　13.9　最大幅 5.2　最大厚　2.9　重さ　291 g							全面すり痕有 底部に敲打痕有	砂岩

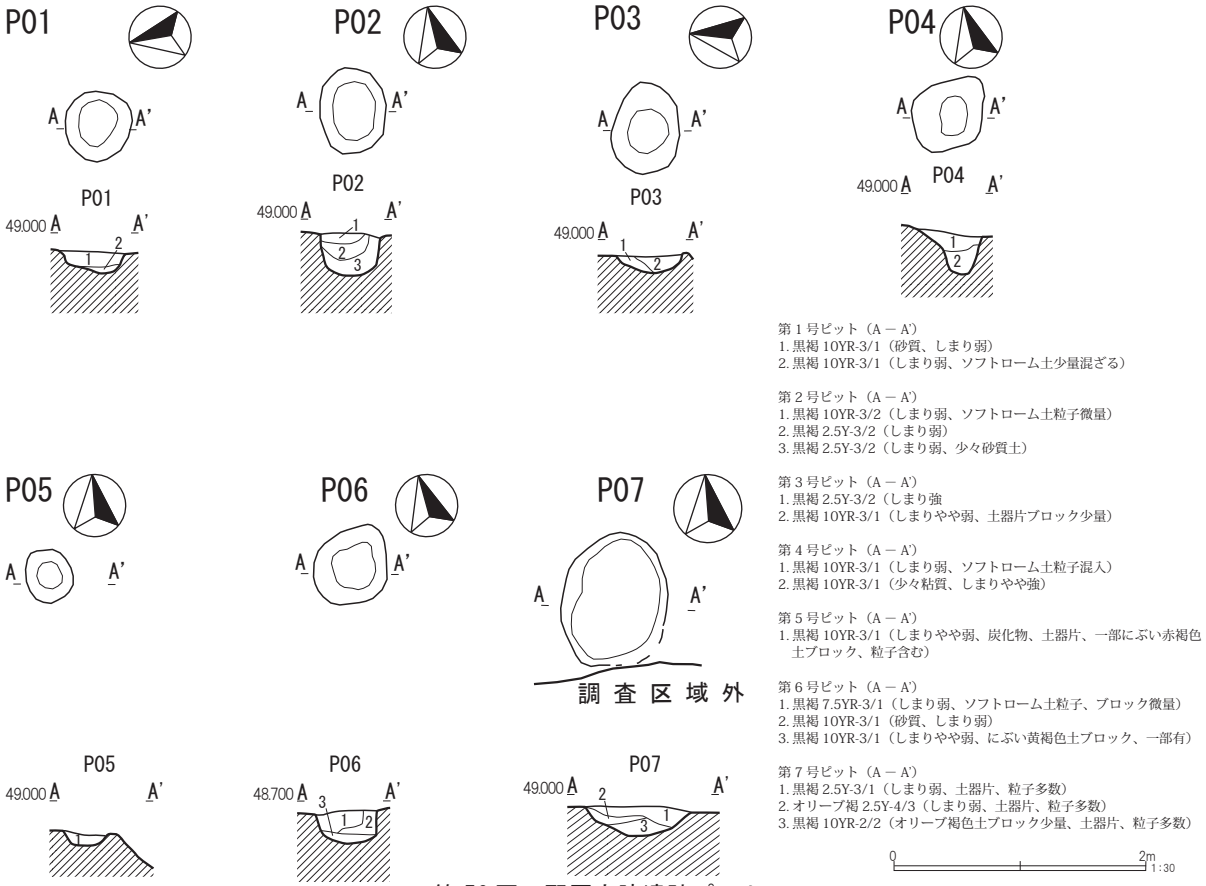
出土遺物は、土師器、須恵器片が検出された。時期は、土師器の暗文皿から７世紀後半～８世紀初頭と考えられる。

⑶　ピット

ピットは、総数にして７基を検出した。以下、一覧表で掲載する。

第 19 表　野原宮脇遺跡ピット一覧表（第 56・57 図）

No.	位置	平面形状	長軸×短軸×深さ (m)	出土遺物	重複関係	備考
1	B-1	円形	0.28 × 0.26 × 0.95			
2	B-1	楕円形	0.33 × 0.25 × 0.18			
3	B-1	楕円形	0.36 × 0.25 × 0.07		第１号溝跡	
4	B-1	隅丸方形	0.28 × 0.25 × 0.15			
5	B-1	円形	0.20 × 0.18 × 0.06		第１号溝跡	
6	A-1・2	隅丸方形	0.29 × 0.28 × 0.12		第１号住居跡	
7	B-2	楕円形	0.54 × 0.42 × 0.12	土師器甕	第２号溝跡	



第１号ピット（A － A'）
1. 黒褐 10YR-3/1（砂質、しまり弱）
2. 黒褐 10YR-3/1（しまり弱、ソフトローム土少量混ざる）

第２号ピット（A － A'）
1. 黒褐 10YR-3/2（しまり弱、ソフトローム土粒子微量）
2. 黒褐 2.5Y-3/2（しまり弱）
3. 黒褐 2.5Y-3/2（しまり弱、少々砂質土）

第３号ピット（A － A'）
1. 黒褐 2.5Y-3/2（しまり強
2. 黒褐 10YR-3/1（しまりやや弱、土器片ブロック少量）

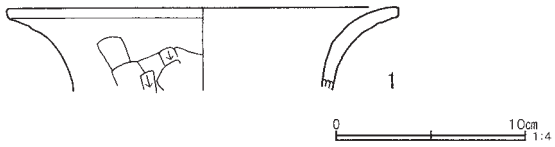
第４号ピット（A － A'）
1. 黒褐 10YR-3/1（しまり弱、ソフトローム土粒子混入）
2. 黒褐 10YR-3/1（少々粘質、しまりやや強）

第５号ピット（A － A'）
1. 黒褐 10YR-3/1（しまりやや弱、炭化物、土器片、一部にぶい赤褐色土ブロック、粒子含む）

第６号ピット（A － A'）
1. 黒褐 7.5YR-3/1（しまり弱、ソフトローム土粒子、ブロック微量）
2. 黒褐 10YR-3/1（砂質、しまり弱）
3. 黒褐 10YR-3/1（しまりやや弱、にぶい黄褐色土ブロック、一部有）

第７号ピット（A － A'）
1. 黒褐 2.5Y-3/1（しまり弱、土器片、粒子多数）
2. オリーブ褐 2.5Y-4/3（しまり弱、土器片、粒子多数）
3. 黒褐 10YR-2/2（オリーブ褐色土ブロック少量、土器片、粒子多数）

第 56 図　野原宮脇遺跡ピット



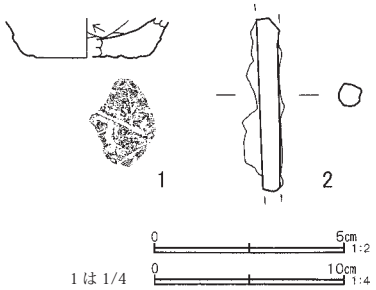
第 57 図　野原宮脇遺跡ピット出土遺物

第 20 表　野原宮脇遺跡ピット出土遺物観察表（第 57 図）

No	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
1	P07	土師器 甕	(20.6)	(4.3)	-	ABEH	にぶい黄褐 10YR-5/4	B	口縁部 10%	外面：ヘラケズリ（縦位）	

⑶　遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、主に表土剥ぎの際に出土した遺物である。また、調査区北西の攪乱部付近からの出土であった。



第 21 表　野原宮脇遺跡遺構外出土遺物観察表（第 58 図）

No	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等
1	土師器 甕	-	(2.1)	(7.0)	ABGIKM	橙 5YR-6/8	B	底部 25%	底部外面に木葉文
2	鉄釘	最大長 (4.5)　最大幅 1.1　最大厚　0.6　重さ　3.0 g							

第 58 図　野原宮脇遺跡遺構外出土遺物

4　調査のまとめ

野原宮脇遺跡の調査は、本調査が第３次調査となる。これまでの調査によって、古墳時代後期、奈良・平安時代の遺構・遺物が検出されており、本調査では、調査範囲が狭小ながら、それを裏付ける結果となった。

野原宮脇遺跡は、その名称を字地名から呼称しているが、それは野原地内に所在していた「能満寺」という古代から中世まであった寺院に由来すると考えられる。本遺跡周辺の字地名を確認してみると、諏訪脇、道祖神、能満寺、郷、味尊堂などの神仏などに関連する名称を想起させる地名が分布している。

これらのことと３次にわたる調査から、本遺跡周辺には、当時神仏の関連施設、周辺にはそれを支える施設や集落があったことが推定ができる。よって、本地域については、今後の調査や研究においては、このような歴史的な背景と共に、地理的な観点も踏まえて、注視していく必要があると考える。

引用・参考文献

熊谷市　1963『熊谷市史』前編

大里村　1990『大里村史』

埼玉県教育委員会　1988「埼玉の中世城館跡」

寺社下 博、新井　端　2009『箕輪遺跡４次、５次　中廓遺跡３次　西浦遺跡　元境内遺跡４次　宮脇遺跡２次　諏訪脇遺跡』熊谷市教育委員会

写　真　図　版



三ヶ尻古墳群　第１次調査調査区全景（東から）



三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号住居跡　遺物検出状況



三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号住居跡　炉跡



三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号住居跡（中央部分）（東から）

図版 2



三ヶ尻古墳群　第 1 次調査第 63 号墳　周溝（東から）



三ヶ尻古墳群　第 1 次調査第 64 号墳　周溝（北から）



三ヶ尻古墳群　第 1 次調査第 1 号溝跡（南から）



三ヶ尻古墳群　第１次調査　第１号埴輪棺墓（上が南）



同埴輪棺　（検出直後）



同埴輪棺　（上部覆い取外し後）



同埴輪棺　（取り上げ後全景）



同埴輪棺　（測量風景）

図版 4



三ヶ尻古墳群　第２次調査　調査区全景（北東から）



三ヶ尻古墳群　第２次調査第１号住居跡　（南東から）



三ヶ尻古墳群　第２次調査
Ｂ－５・６グリッド付近　ピット群　（南西から）



三ヶ尻古墳群　第２次調査第 64 号墳　周溝（東から）



三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号埴輪棺墓　第 17 図１



三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号埴輪棺墓　第 17 図２



三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号埴輪棺墓　第 17 図３

図版 6



三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号住居跡　第８図１



三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号住居跡　第９図２



三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号住居跡　第９図３



三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号住居跡　第 10 図８



三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号住居跡　第 10 図９



三ヶ尻古墳群　第 1 次調査第 1 号住居跡　第 10 図 7



三ヶ尻古墳群　第 1 次調査第 1 号住居跡　第 10 図 10



三ヶ尻古墳群　第 1 次調査第 1 号住居跡
第 10 図　上：14・15　下：16・17



三ヶ尻古墳群　第 1 次調査第 1 号住居跡　第 11 図 18



三ヶ尻古墳群　第 1 次調査第 1 号住居跡　第 10 図 13



三ヶ尻古墳群　第 1 次調査第 1 号住居跡　第 11 図 19



三ヶ尻古墳群　第 1 次調査第 1 号住居跡　第 11 図 21



三ヶ尻古墳群　第 1 次調査第 1 号住居跡　第 11 図 22

図版 8



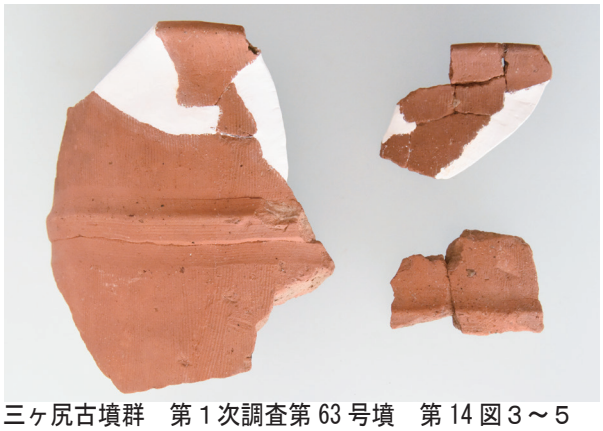
三ヶ尻古墳群　第１次調査第 63 号墳　第 14 図２



三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号溝跡　第 20 図１－１・２



三ヶ尻古墳群　第１次調査第２号溝跡
第 20 図　上：２－１～３、下：２－４・５



三ヶ尻古墳群　第１次調査第 63 号墳　第 14 図３～５



三ヶ尻古墳群　第１次調査第１号溝跡　第 20 図１－５～７・11



三ヶ尻古墳群　第１次調査第２号土坑　第 22 図２・３



三ヶ尻古墳群　第１次調査遺構外　第 33 図 17



三ヶ尻古墳群　第１次調査遺構外　第 32 図４・５



三ヶ尻古墳群　第１次調査遺構外　第 32 図６



三ヶ尻古墳群　第２次調査第１号住居跡
第 24 図　上：１～３、下：４～７



三ヶ尻古墳群　第２次調査第１号住居跡
第 28 図　上：１・２、下：３・４



三ヶ尻古墳群　第２次調査第 64 号墳
第 26 図　上：１～３、下：４～８



三ヶ尻古墳群　第２次調査遺構外
第 34 図１・２



三ヶ尻古墳群　第２次調査遺構外　第 34 図 12・13



三ヶ尻古墳群　第１次調査作業風景

図版 10



西別府館跡　調査区全景　（北から）



西別府館跡　調査区全景（西から）



西別府館跡
第１号溝跡
第 37 図１～４（外面）



西別府館跡
第１号溝跡
第 37 図１～４（内面）

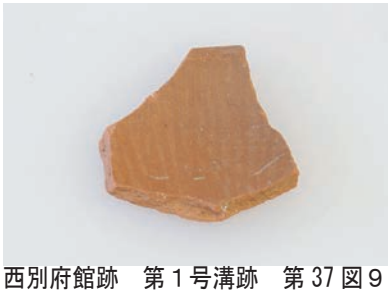


西別府館跡　第１号溝跡　第 37 図７



西別府館跡　第１号溝跡　第 37 図８

図版 12



西別府館跡　第 1 号溝跡　第 37 図 9



西別府館跡　第 1 号溝跡　第 37 図 10



西別府館跡　第 1 号溝跡　第 37 図 11



西別府館跡
第 1 号溝跡
第 37 図 12 ～ 14(凹面)



西別府館跡
第 1 号溝跡
第 37 図 12 ～ 14（凸面）



上前原遺跡　調査区全景（上が北東）



上前原遺跡　第１号竪穴遺構（南西から）

図版 14



上前原遺跡　第１号竪穴遺構土層断面



上前原遺跡
調査区遺構外、試掘トレンチ２
　第 41 図１・２・３



元境内遺跡　調査区全景　（南から）



元境内遺跡　第１号竪穴建物跡　（西から）

図版 16



元境内遺跡　第１号竪穴建物跡掘方　（北から）



元境内遺跡　第１号竪穴建物跡　須恵器脚付小埦出土状況



元境内遺跡
第１号竪穴遺構（北から）



元境内遺跡
第２号竪穴遺構（北東から）



元境内遺跡
第１号土坑（西から）

図版 18



元境内遺跡　第 1 号竪穴建物跡　第 46 図 2



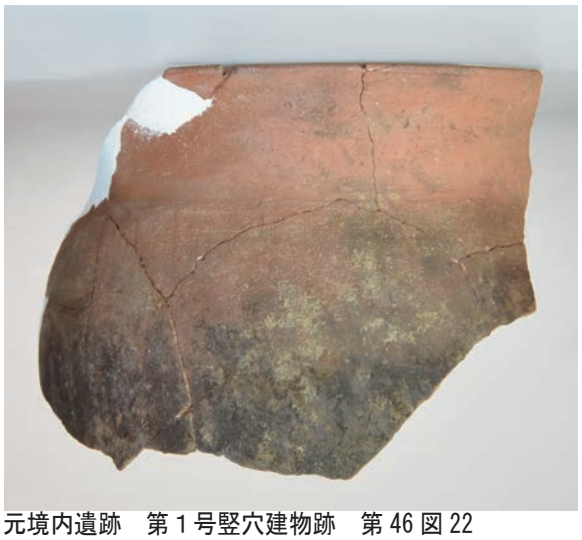
元境内遺跡　第 1 号竪穴建物跡　第 46 図 5



元境内遺跡　第 1 号竪穴建物跡　第 46 図 14



元境内遺跡　第 1 号竪穴建物跡　第 46 図 15



元境内遺跡　第 1 号竪穴建物跡　第 46 図 22



元境内遺跡　第 1 号竪穴建物跡　第 46 図 30



元境内遺跡　第 1 号竪穴建物跡　第 47 図 43



元境内遺跡　第 1 号竪穴建物跡　第 47 図 44



元境内遺跡
第１号竪穴建物跡
第 46 図１・３・４・６・７



元境内遺跡
第１号竪穴建物跡
第 46 図８・９・10



元境内遺跡
第１号竪穴建物跡
第 46 図 12・13・16・17



元境内遺跡
第１号竪穴建物跡
第 46 図 11・18（墨書）

図版 20



元境内遺跡
第 1 号竪穴建物跡
第 46 図 19 ～ 21、23 ～ 29



元境内遺跡
第 1 号竪穴建物跡
第 46 図 31 ～ 36

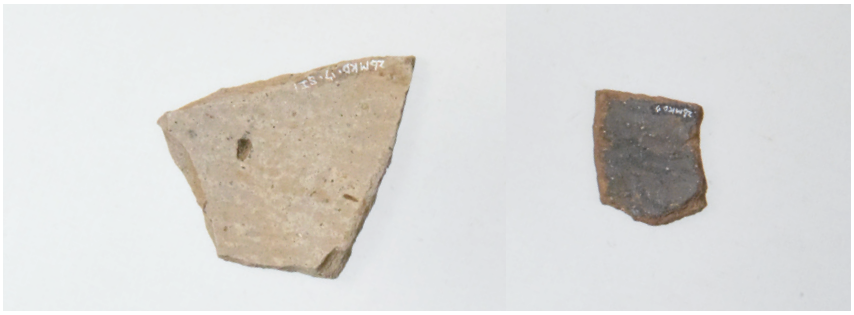


元境内遺跡
第 1 号竪穴建物跡
第 46 図 38 ～ 42

元境内遺跡
第 1 号竪穴建物跡
　第 46 図 37（外面）
遺構外
　第 50 図 1 （外面）



元境内遺跡
第 1 号竪穴建物跡
　第 46 図 37（内面）
遺構外
　第 50 図 1 （内面）



元境内遺跡
第 1 号竪穴建物跡
　第 47 図 45 ～ 47



図版 22



野原宮脇遺跡　調査区全景（北東から）



野原宮脇遺跡　第２号溝跡（北から）



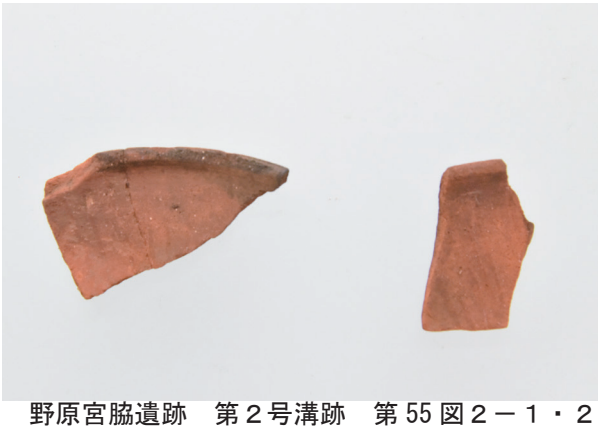
野原宮脇遺跡　第１号住居跡（北から）



野原宮脇遺跡　ピット群（北から）



野原宮脇遺跡　第１・２号溝跡　第 55 図１－１・２、２－３～６



野原宮脇遺跡　第２号溝跡　第 55 図２－１・２



野原宮脇遺跡　第２号溝跡　第 55 図２－７・８



野原宮脇遺跡　第７号ピット　第 57 図１



野原宮脇遺跡　作業風景

報告書抄録

ふりがな	みかじりこふんぐん・にしべっぷやかたあと・かみまえはらいせき・もとけいだいいせき・のはらみやわきいせき
書名	三ヶ尻古墳群・西別府館跡・上前原遺跡・元境内遺跡・野原宮脇遺跡
副書名	市内遺跡発掘調査報告書Ⅵ
シリーズ名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第32集
編集者名	吉野　健　　松田　哲　　腰塚　博隆
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会
所在地	〒360-0107 埼玉県熊谷市千代329番地 熊谷市立江南文化財センター TEL048-536-5062
発行年月日	西暦2019（平成31）年3月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
みかじりこふんぐん 三ヶ尻古墳群 第63・64号墳	さいたまけんくまがやしみかじりあざはやし 埼玉県熊谷市三ヶ尻字林 3605番、3606番4、11	11202	59-021 (59-021-63) (59-021-64)	36° 17′ 12″	139° 30′ 61″	20150817 ～ 20151016	133.73	記録保存調査
にしべっぷやかたあと 西別府館跡	さいたまけんくまがやしにしべっぷあざ 天神2225番28	11202	59-039	36° 19′ 24″	139° 33′ 27″	20111018	2.00	
かみまえはらいせき 上前原遺跡 （第５次調査）	さいたまけんくまがやしせんだいあざだい 埼玉県熊谷市千代字代 63番12、13	11202	65-022	36° 07′ 22″	139° 20′ 15″	20110726	2.40	
もとけいだいいせき 元境内遺跡 （第６次調査）	さいたまけんくまがやしのはらあざもちはし 埼玉県熊谷市野原字持橋ノ道上668番3	11202	65-039	36° 06′ 07″	139° 21′ 42″	20140927 ～ 20141020	57.54	
のはらみやわきいせき 野原宮脇遺跡	さいたまけんくまがやしのはらあざみやわき 埼玉県熊谷市野原字宮脇 72番2	11202	65-041	36° 10′ 34″	139° 35′ 43″	20140410 ～ 20140422	40.89	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三ヶ尻古墳群 第63・64号墳	集落 古墳	縄文時代 古墳時代	住居跡　１軒 古墳　２基 溝跡　４条 埴輪棺墓　１基 土坑　２基 ピット　24基	縄文土器　土師器 円筒埴輪	縄文時代中期の住居跡が検出されたことと過去の調査から集落の展開が確認できた。 古墳２基の周溝が検出され、隣接して埴輪棺墓が検出された。
西別府館跡	集落 城館	奈良時代 平安時代	溝跡　１条	土師器　須恵器 平瓦	
上前原遺跡 （第５次調査）	集落 古墳	縄文時代	竪穴遺構　１基 ピット　１基	縄文土器	
元境内遺跡 （第６次調査）	集落 城館 古墳 社寺	奈良時代	竪穴建物跡　１棟 竪穴遺構　２基 土坑　２基 ピット　３基	土師器　須恵器 土錘　刀子　磨石	竪穴建物跡から仏具と考えられる須恵器脚付小埦が出土し、注目される。
野原宮脇遺跡	集落	奈良時代 平安時代	住居跡　１軒 溝跡　２条 ピット　７基	土師器　須恵器	

埼玉県熊谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第32集

三ヶ尻古墳群
西別府館跡
上前原遺跡
元境内遺跡
野原宮脇遺跡

－市内遺跡発掘調査報告書Ⅵ－

平成 31 年 3 月 27 日発行
発行／埼玉県熊谷市教育委員会
印刷／関東図書株式会社